

---

# そのお見合いは、危険です。

藤谷 要

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そのお見合いは、危険です。

### 【Nコード】

N4796W

### 【作者名】

藤谷 要

### 【あらすじ】

断られる前提で申し込んだお見合いが、佳子の想像を裏切る方向へと進んでしまう。お見合いを申し込んだ相手・五月春人との関係は、何事もなくすぐに終わるはずだったのに。

大好きだった父の死。そして佳子に力を貸す謎の鬼、如月。一族が抱えた闇の真実を知ろうとした佳子が迎える結末とは。

この作品は、前作「狭間の少年」の主人公の親世代の話になります。単品でもお読みいただけます。

## 序章（前書き）

連載始めました。よろしくお願いします。

## 序章

休日の昼間、一上佳子いちがみ よしこが家で留守番中に一本の電話が掛かって来た。誰だろうと思いい、電話を取ると、それは母の実家へ訪れていた父からだった。

何時になく声が弾んで楽しそうな父に、佳子もつられて嬉しくなつた。

留守中に変わりはなかったかと様子を尋ねられて、佳子は何もないわと答えた。

佳子は高校3年生で、卒業までもうすぐと云う2月末では、家の中で特に何もすることはなかった。

あとは卒業式を迎えるだけ。

進学予定もない佳子は、卒業後の予定は未定だった。

進学は経済的に無理そうだった。

外へ働くこと自体に母が良い顔をしないので、積極的に就職活動も出来ず、結局どこにも採用先が決まっていなかった。

その代わり、母には高校卒業後にお見合いを勧められていた。

女性は結婚して子供を産むことが仕事 というのが母の考えだった。母の勧める縁談に全く乗り気ではなかったが、高校を卒業してしまえば、学生と云う身分を盾に結婚の反対も出来ない。

きつと言われるままにお見合いをして入籍してしまうのだろうかと、佳子は自分の行く末を悲観していた。

父は佳子の好きにすれば良いと言って庇ってはくれるが、父に甘えていつまでも自分の主張を通しては、父の立場が悪くなって行くだけだと分かっていた。

憂鬱な最近だったが、父の明るい声に少し気分が上昇する。

「佳子に会わせたい人がいるんだ」

父はそう言っていた。

「誰なの？」と尋ねると、父はその人と会うまでのお楽しみとはぐらかされてしまった。

そして、今夜には帰るからと、父は最後まで明るい口調で会話して電話が終わった。

早く夜になればいいのに。

佳子は父の帰宅を待ちわびた。

今日は母も人と会うからと外出していた。母の不在は大歓迎だった。口うるさく自分を支配的な母より、寛容で優しい父と一緒に過ごす時間の方が好きだった。

やがて日が暮れて、母が女中と帰宅してきた。

母と静かに夕飯を食べ終えて、父の運転する車が敷地に入ってくる音を自分の部屋で耳を澄ませて待った。

そんな佳子の耳に入って来たのは、乗用車の車輪の音ではなく、電話の呼び鈴だった。

それは警察から父の交通事故を知らせる電話だった。

取る物も取り敢えず、警察から伝えられた病院へ母たちと向かった。そこで、変わり果てた父の姿と対面した。

山道を運転中、ハンドル操作を誤ったのか、ガードレールを突き破って、崖から車ごと下へ転落した。そして、ガソリンが漏れて車が炎上したようだ、と、淡々と警察は説明をしてくれた。

焼け焦げた無残な父の死に顔。

これは何かの間違いだ。父が交通事故で亡くなるなんて。

しかもこんな悲惨な最期だなんて。

佳子は堰を切ったように父に縋って号泣した。

取り乱した自分の傍で、母は「みっともない泣き真似は止めなさい」と冷静だった。

この時の母のいつもと変わらぬ横顔を、今でも忘れられない。

何故、どうして。

その問いは何度も頭の中を巡回した。

現実を受け入れられずに、自問する日々。

後にその答えを佳子は予期せぬところで知ることとなる。

## 色よい返事

それは、庭に植えてある金木犀が満開の頃であった。

風と共に仄かな花の香りが、二人の男女のもとまで漂ってくる。

夏の季節が過ぎて、すっかり秋らしくなったこの頃では、風が幾分か冷たさを帯びてきていたが、今日のような晴天の中では日差しが体を暖かくしてくれた。

「正さん、今なんて言ったの？」

—上佳子は目の前にいる男 いちがみ よしこ 坂井正 さかいただしに目を見開いて聞き返した。

正と呼ばれた男は、佳子よりも一回り以上も年上で、彼女が産まれる以前からずっとこの家に仕えてきた者だった。

背恰好は大きめな女の人と同じくらいで、男の人の割には華奢であった。

顔は優しそうだが特に特徴もないため、静かにしているとあまり存在感がなかった。

見た目はぱっとしない家人だったが、父の代から仕えてくれた正に佳子は信頼を置いていた。

佳子はというと、伸ばした長い髪は背中に垂らして、着ている服もトレーナーと高校時代のジャージのズボンという非常に色気がないものだった。

いつもはコンタクトを装着しているのだが、ひと月ほど前に洗面所でうっかり排水溝へと流してしまったために、古臭いデザインの眼鏡を使用している。

佳子と正がいる場所は、佳子が住んでいる屋敷の中の、居間に面した渡り廊下だった。

同じ敷地内に建っている離れの屋敷から庭を通って正がやってきて、外から鍵の掛かっている廊下の戸を開けると、中にいた佳子に声をかけてきたのだ。そして、歩いて近づいてきた佳子に、正は廊下へ腰を下ろして、先ほどこう言ったのだ。

「五月家から了承の返事が来たと申し上げたのです…」

答える正の声は、どこか途方にくれていた。

その家人の様子を見守りながら、佳子は頬に手を添えて首を傾けた。その際に、背中に流していた彼女の長い黒髪が、数房揺れて顔に垂れてきた。

くせのない真っ直ぐな細い髪は、彼女の頬を優しく撫でた。

「…そうなの。それは困ったわね」

彼の言葉に鷹揚に呟く。その様子は、どこか他人事のようにも見えない。

佳子の命令で、釣書と一緒に彼女の写真を添えて五月家にお見合いを申し込んだのは、ちょうど一週間前。

通常ならば、申し込んだお見合いが相手にも気に入られて、話が進むのはおめでたい話のはずだ。

しかし、佳子には事情が違った。

断られるのを前提で申し込んだのである。

お見合いを申し込んだ五月家は、一上家とは犬猿の仲。

五月家とは同郷になるが、顔を会わせれば嫌みの応酬と言う、非常に不仲であった。



佳子がお見合いを申し込んだ相手は、その五月家の四男坊。現在高校三年生の18歳。当の佳子は、3歳年上の21歳であった。

相手はようやく結婚できる年齢になった若者である。しかも、在学中である。

本人にしてみれば、結婚なんてまだ先の話だろうし、お見合いの相手は一上家の人間である。

しかも3つも年上。

「ふざけるな！」と激怒されて、一蹴されるものだと思っていた。

ところが、蓋を開けてみれば、五月家から会いましょうと了承の返事が来たというのだ。

申し込んだ本人とは言え、事の成り行きに正直驚いていた。お見合いが進展するなど、予想外のことだった。

「どっしょっしょっしょ？」

佳子の呟く声に正は反応する。

「とりあえず、会ってみるしかないんじゃないですか？」

正は至極まともな回答をした。

お見合いを申し込んだのは、一上家である。断る立場にはない。

「…そうね、会っしかないわよね」

佳子は少し考えたのち、面倒くさそうに答えた。

一体、どういふ事情で五月家がお見合いの話を進めようと思ったにせよ、場を設けて顔合わせはしなくてはならない。どうせ断られるのに違いないのに、わざわざお金を払ってまで会いに行かなくてはいけないなんて…。自分が申し込んだことを棚に上げると、佳子は今月の生活費の残高を思い出して、ため息をついた。

## 雨の日の再会

雨の日は嫌いじゃない。

雨音が周りの余計な騒音を遮ってくれて、傘の中だけ自分の世界のような気がするから。

一上佳子は傘を差して、綺麗に舗装された歩道を歩いていた。傘に手を添える左手首には、スーパーの袋がぶら下がっている。

レジのパート勤めを終えて、通い慣れた帰路の途中だった。

日が沈みかけて、薄暗い街中。

あいにくの天気のせいか、行き交う歩行者の数は少ない。

ガードレールの脇の車道を次々と通り過ぎる車は、前照灯を点けて走っていた。

空間が明かりに照らされて、車が通り過ぎる一瞬だけ地面に向けて降り注ぐ雨の姿をとらえることができる。

雨の勢いは比較的強く、排水溝に雨水が流れ込んでいるが、窪んだアスファルトの表面には、所々水溜まりが出来ていた。

雨の日は嫌いじゃない。

でも、歩道の脇を傍若無人に走る車は嫌い。

路肩側にあった大きな水溜まりの上を、減速もせず一台の車が佳子の脇を通り抜けていく。

車輪によって飛び散る大量の水しぶき。

それは運悪く側にいた佳子の方へと飛んできた。

ぼんやりと歩いていた佳子が気付いた時には、着ていた服に泥水がかけられて、主に下半身のスカート部分が酷いことになっていた。

服を汚した犯人である車の後ろ姿を睨みつけるが、そんな佳子に気

付かずに走り去ってゆく。  
小さくなってゆく尾灯を唾然としてしばらく見つめていた。

「あー、もう！」

苛立ちを隠さずに声を上げると、それに対して応えてくれるモノがいた。

「ダイジヨウブ？」

低く籠ったような、その声は佳子の足元から聞こえてきた。

正確には佳子の足の下の地面から。

佳子の黒い影が、光の加減を無視して流動的にモゾモゾと動いた。

「もう家に帰るだけだから、大丈夫よ」

佳子は返事をして、再び歩き始めた。

佳子がイライラとして不機嫌なままでいると、側にいるモノたちが不安になる。

意識して気分を持ちなおす。

家に帰ってすぐに服を着替えれば、布が素肌に張り付く気持ち悪い感じともおさらばできる。

それまでの辛抱だ。

スカートの汚れがきちんと落ちるか気になったが、彼らに何とかしてもらおう。

佳子の頭の中には、家事を手伝ってくれるモノたちの姿が浮かんでいた。

現世の理を外れた、普通なら存在しないものとして目に映らない彼ら。

妖怪、物の怪、妖。あやかし

様々な呼び名が彼らにはあるが、それが見える自分は一体何者なのだろうと思う時がある。

佳子の家は、小さな山の中腹にある。

公道から続く山道は、家へと続くためのものである。

アスファルト舗装された道から砂利が敷き詰められた道へと変わってゆく。

黙って歩いていると、後ろから急に「おい」と声を掛けられた。

佳子は立ち止まり、後ろを振り向くと、彼女と同じように傘を差した男が一人立っている。

紺色の傘は、その男の首から上を隠していた。

「誰ですか？」

突然現れた男に警戒をしつつ、佳子が尋ねる。

男は傘を持ち上げて、自分の顔を佳子の方へと見せた。

「お久しぶり」

何か含みのある楽しいげな表情を浮かべながら、眼差しを佳子へ向け、若い男は挨拶をした。

暗い中でも分かる程、肌の色が白く、涼しげな奥二重の目元、そして恐ろしいほど整った顔をしている。

適当に伸ばした艶のある髪は、後ろで一つに束ねられているが、顎まで伸びた前髪が頬にかかっている。

長袖のTシャツにジーパンと云うラフな格好は、どこにでもいる人間と変わりはない。

彼の本性もまた、人ではないけれども。

「如月きげんだったの」

見知った顔に佳子は驚いた声を上げて、男の名前を呼んだ。そして、まじまじと“如月”と呼んだ男の姿を見つめる。

「久しぶり。相変わらず、神出鬼没ね」

佳子は苦笑を浮かべながら、如月に話しかける。

如月は破顔して佳子に近づいてくる。

端正な顔は表情を崩しても、見応えがある。

久しぶりに会ったこともあり、思わず彼の姿に佳子が見とれると、それに気付いた如月が片手を佳子の頬へ伸ばした。

頬に触れた彼の手は、一瞬ドキリとするくらい、冷たかった。

「そんなに見つめられると困るな。俺に会えたのがそんなに嬉しかった？」

フェロモン垂れ流しの、艶やかな笑みを浮かべて、佳子の顔を覗き見る。

それでなくても心臓に悪い美貌なのに、意図的に色気まで付けられると、恋愛経験の無い佳子には太刀打ちできない。

言われた科白も、佳子を慌てさせるには十分だった。

「な、何言ってるの？」

人をからかうのは止めて！」

思わず頬に触られた手を払いのけると、赤面しているのがばれないように佳子は如月から顔を背けた。

「まったく、顔の良い男は自意識過剰なんだから」

ぶつぶつと文句を言うと、クスリと笑う声が聞こえる。

「お褒めに預かり光栄だね」

彼が可笑しそうに佳子へ切り返す。

如月は人をからかうのが大好きなのだ。

彼に会うのは久しぶりだったから、うっかりしていた。

落ち着かない気持ちを上手く誤魔化しつつ、佳子は後ろを振り返る。

「とりあえず、立ち話もなんだから、家に来ない？」

「親御さん、いるんじゃないの？」

「大丈夫、実家へ帰ったから」

「ん？」

「喧嘩したら出て行ったの」

「そうなんだ」

佳子と如月は、並んで歩き始めた。

佳子は現在、広い平屋の屋敷に一人暮らしだ。

以前は、母親と女中との三人暮らしだったが、今回のお見合いの件で激怒した母親と喧嘩したら、女中を引き連れて実家へ帰ってしまったのだ。

人ではない如月を家へ招いても、咎める者は誰もいない。

佳子たちが自宅に着いた時は、すっかり辺りは暗くなっていた。佳子しか住んでいない屋敷の中は無人のはずだが、屋敷の中に明かりが灯っていた。

佳子が玄関の鍵を開けて、引き戸を開ける。  
軒先で二人とも傘を畳む。

「おかえりなさいませ〜」

甲高い声が屋敷の奥から聞こえてくる。  
声のした方からペタペタと足音を立てて、玄関に向かってくる存在があった。

佳子たちのいる玄関先に現れたそれは、ボロボロの薄汚れた大きな布を頭から足元まで被ったモノであった。

人のように手足が生えていて、二本足で立っている。  
大きさは子供くらいだった。

顔と思われる部分には丸い二つの穴が空いている。

隙間から不気味に光る瞳がたまに見えた。

その右手には料理で使うおたまが握られていた。

「ただいま、シロ」

佳子は“シロ”と呼んだ妖怪に挨拶をする。土間にある傘立てに使用していた傘を置くと、靴を脱いで屋敷に上がった。

そんな佳子の姿を、下駄箱のわずかな隙間の暗闇の中から覗いている瞳が複数あった。

玄関から真っ直ぐ廊下が続いており、先に進むと台所がある。

廊下の左手にはガラスの引き戸があり、居間になっている。

右手には仏間の部屋とトイレがある。



台所で何か作っているのか、ここまで食べ物匂いが漂っていた。佳子はシロにスーパーの袋を渡した。

「お邪魔するね」

如月も挨拶して佳子に続く。

シロは廊下の先にある台所へ消えていった。

佳子は歩いて居間に入ると、後ろにいる如月に「ここで適当に寛いでいて」と声を掛けて、隣にある自分の部屋へ移動した。居間の両側に部屋があり、その一つを自室として使っていた。

部屋の戸を閉めて、自分の服を見下ろす。

汚れたのはスカートだけかと思いきや、上着の裾の部分にも汚れがついていた。

佳子はすぐに着ていた衣類を脱ぎ始める。

上下共に脱ぎ捨てて下着のみになると、ダンスから新しい服を取り出している時に、さっき閉めたはずの部屋の戸が開いた。

「冷蔵庫に飲み物とか…」

声もかけずに戸を開け放ったのは、如月だった。

下着姿の佳子の格好を見て、言いかけた科白を飲み込んだ。

予想もしない出来ごとに、思わず佳子は頭が真っ白になり、固まった。

「あー、ごめんね」

如月は居心地の悪そうな表情を浮かべて視線を佳子から外すと、す

ぐに戸を閉めて姿を消した。

佳子は顔から火が出るくらい恥ずかしかった。  
混乱のあまり、声も出ない。

とんでもない姿を見られた！

しかも、今日に限って適当な下着のチョイス。

色気のかけらもない、地味なものだ。

上下もお揃いじゃないし。

胸だって貧層だし…。

ん？　なんで私がそんなことを気にしなくてはならないのだ。

もとはと云えば、常識な彼のせいで恥ずかしい目にあってしまったのに。

佳子の頭にむくむくと怒りの感情が芽生えてきた。

「ノックぐらいしてよ！」

若干のブランクの後に正気に戻った佳子が、如月へ文句を言ったが、戸の向こうに消えた彼に聞こえていたのかは定かではない。

## とりあえず乾杯

不機嫌な佳子とは反対に如月は楽しそうだ。

居間にいる二人は、それぞれ食卓に向き合つように座っている。

正面にいる如月から視線をずらして、俯き加減で正座姿の佳子。

一方、あぐらをかいて肘を食卓の上に置いて頬杖をついている如月は、非常に寛ぎながら、佳子の顔を観察していた。

シロが用意した夕飯を、先ほど二人は食べ終えていた。

佳子に声を掛けられたシロがやってきて、二人が使った食器を台所へ下げて行った。

居間と台所を繋ぐ戸が、きちんと閉められている。

戸を隔てた台所の中から、シロ以外にも複数の怪しげな気配がしている。

食器をいじる音とペチャペチャと何かを舐める音。

ケケケと楽しげに笑う声もする。

「ご飯って、いつもあいつらに作らせているの？」

台所から聞こえてくる音に聞き耳を立てつつ、如月が尋ねてきた。

「作っているのはシロ一人よ。他のモノは人間が食べられるような物は作れなかったの。」

「ふーん。」

シロ以外は、虫とか雑草とか、自分たちが食べる物を悪気なく平気で入れてくる。

ゲテモノスープを思い出して、眉間に皺が寄った。

母が家を出たのは良いが、家事をしてくれていた女中も一緒にいなくなっただので、全ての家の事を佳子が一人でしなくてはならなかった。

隣に住む正夫婦が何かと気を掛けてくれるが、あちらには就学前の男の子がいて、何かと手がかかる時期だった。

自分の都合でこういう状況に陥ったのだから、彼らの手をあまり煩わせるのは申し訳ない。

当然のことながら、学校の掃除や授業以外に家事は一切教えられたことがなかったため、全部手探りでやり始める。

食器を割るのはもちろんのこと、レンジ内で食べ物を爆発させたり、鍋を焦がしたりと失敗は徹底的にしてきた。

そんな悲惨な状況を陰で様子を見ていたモノたちが、突っ込みをしつつ、腹を抱えて自分を笑い物にしていた。

腹が立った佳子が、「お前たちなら出来ると言うわけ？」と挑発してやらせてみたところ、自分より上手くて余計にむかついたのだった。

そこで佳子は気付いた。

彼らにやらせればいいじゃない！

良いことを思いついたと、気付いた佳子の行動は早かった。

彼らの中で誰が一番料理上手か調べてみた。

その結果、人間が食べられる物を作ることができたのはシロのみ。もともとシロは、台所で使われていた布巾が年を経て妖怪になったモノだった。

掃除と洗濯については、料理よりは簡単だったので、他のモノでもできそうだった。

彼らが何でも食べることを知っていた佳子は、報酬に残飯を提示し

たところ、上手い具合に交渉が成立した。  
生ゴミも出ないし、一石二鳥であった。

「相変わらず、好かれているよね。」

「ん？」

「術の類は使わないで、あいつらを従えているんだよね？」

「餌で釣って働いてもらっているだけよ？」

「それだけで言う事をきかせているんだから、すごいよね。」

「…そうなの？」

佳子は感心される意味が分からなかった。

佳子にとってみれば、物心ついた時から彼らと付き合っていて、当たり前のようにやりとりになっていたのだ。

彼らは佳子に概ね親切であった。

餌をあげれば、喜んで手伝いをしてくれる。

佳子に話しかける妖怪が人間に好意的なだけかと思っていたが、如月の話を聞くと、そうでもないらしいことが分かった。

母は妖怪を害虫のように毛嫌いしていたので論外だが、父も自分と同じように妖怪と仲が良さそうだったし、如月に指摘されるまで疑問に思ったことが無かった。

「料理だけじゃなくて、部屋の片付けも頼めばいいんじゃない？」

如月が意地の悪い顔をして言う。

それに対して、佳子は困った表情を浮かべる。

片付けだけは彼らに任せられないので、自分でやるしかなかった。基本的に収納や片付けが特に苦手だった佳子は、使った物をすぐに仕舞うことができずにいた。

以前は整然としていた屋敷の中が、物が出しっぱなしで散らかり始めて、所帯染みた家へと変貌を遂げていた。普段いる自室は特に酷い有様になっていた。

先ほど着替えを如月に見られてしまった佳子だったが、そのことで文句を言った時に、彼にこう言い返されてしまった。

「下着姿にはびっくりしたけど、部屋の汚さにはもっとびっくりした」と。

佳子の機嫌が再び急降下したのは言うまでもなく、冒頭のように「飯を食べ終わった後でも仏頂面をしていたのだ。

「いるものでも捨てられたりしたら大変だから、任せたくないのよ。」

どこに仕舞われたか分からなくなったりしても嫌だし、と付け足す。そうは言いつつも、きちんと出来ない自分が悲しいが。

「まあ、それは置いておいて。如月は何か用があつて私に会いに来たんじゃないの?」

居心地の悪さに耐えきれず、佳子は自分から話題を変えた。

「まあ、そうだけど。それよりも何か飲み物ないの?」

如月は台所の方へ首を向ける。

そのあからさまなしぐさは、冷蔵庫から何か持って来て欲しいと語

っていた。

「はいはい。ちょっと待ってて」

佳子はマイペースな如月に振り回されていると自覚しつつも、彼の為に立ちあがって台所にある冷蔵庫へと向かった。そこからビールを二つ取って、居間へと戻る。

「悪いけど直で飲んで」

グラスを出して注いで飲む方がいいのかもしれないが、後で洗うのがとても億劫だった。

基本、佳子は面倒くさがり屋である。

再び座り込むと、缶のプルタブを開ける。

お酒なんて一週間ぶりだ。

「乾杯しようよ」

如月が缶を開けてこちらに向かって持ち上げていた。佳子も真似をする。

「何について乾杯するのよ？」

「とりあえず、再会を祝って？」

「それじゃ、かんぱーい。」

コツンと軽く缶同士を当てる。そして、自分の口元へ缶を引き寄せ、飲み始めた。

彼と初めて会ったのは、家出したあの日の夜中。

制服姿で街を彷徨っていた佳子に声を掛けて来たのだ。過去に思いが触れた矢先、如月が口を開いた。

「お前が探していた男について、色々分かったよ」

言われた内容に息を飲んで、佳子が如月に視線を送ると、彼はすでに佳子の目を見据えていた。

その双眸は、佳子の心情の変化を一つも逃さず捕えているようだった。

緊張が体中に走るのが、自分でも分かった。

「本当？　すごいわね」

内心の動揺を抑えつつも、思わず出た感嘆の声は、いつもより興奮気味だったと思う。

如月は口の端を持ち上げて笑い、目を細めた。

「まあね」

「どつやっただの？」

「まあ、情報収集の賜物ってことで。」

如月はたいしたことのないように言うが、佳子には到底できない芸当である。

「もしかして、色仕掛けでも使ったの？」

いつもからかわれている仕返しとばかりに冗談を言ってみた。



「んー、まあ、違わなくはないけど、今回はこの目の力を使ったし、そんなにあくどいことはしてないよ?」

如月は片眼を瞑ってウインクした。

「そうなんだ…。」

色仕掛けを完全に否定しないあたり、色男たる所以か。

佳子はぎこちない笑みを浮かべるしかなかった。

如月の目は、不思議な力があるらしい。

相手の目を見つめて、強く念じながら命令すると、見つめられた人は思わず如月の言う通りに行動するらしい。

簡単な命令しかできないらしいが、軽い催眠状態にできるようなので、使い方によってはとても怖いものである。

「そいつの名前は、一上真吾。いちがみ しんご ええと、お前のお祖父さんの愛人の子らしいよ。」

愛人という言葉に、佳子は思わず眉をひそめる。

そんな佳子の顔を見て、如月は苦笑して肩を竦めた。

「一上家の遠縁の女が産んだ子供らしい。」

血縁的には、お前の母親の弟? つまり叔父さんになるよな。」

言いながら、如月は一枚の写真をズボンのポケットから取り出す。

食卓の上に写真を置いて、佳子の方へと差し出す。

佳子が覗き見ると、写真の中には隠し撮りされたような感じで、男がメインで写されていた。

父によく似た男。

年は佳子より一回りくらい上に見える。

生き写しともいえるその顔は、他人とは言い難い血縁を匂わせる。

彼の名前が、一上真吾。

父との最後の電話で、自分に会わせたいと言っていた人かもしれない男性。

「彼と話すことが出来て、今度会う約束したんだよ。」

「本当？」

「ああ、お前も一緒に行くだろう？」

「もちろんよ。」

佳子は真剣な表情で大きく頷いた。

一歩ずつ、前へ動き出す。

全ては亡き父の為に。

## 関係

あれから酒のつまみやお代わりも如月に催促されて食卓の上に並ぶと、飲み会が始まっていた。

先ほどまで正座していた佳子だが、足を崩してリラックスしていた。如月はあくらで座り、ピーナッツをつまんでいる。

食卓を挟んで正面を向き合うように座っているのは変わらない。

物陰から妖怪たちが物欲しそうに覗いていたが、二人は無視をしていた。

「そういえば、今度お見合いすることになったのよ。」

佳子が炙ったスルメを齧りながら、ふと思い出したことを語りだした。

「あれ？ ついに観念したの？」

如月は両肘を食卓の上について、身を乗り出して面白そうに話を聞いていた。

如月には結婚を親から勧められていることを話したことがあった。そして、同様に拒絶しつづけていることも。

佳子の一族は、親族間の結婚を続けて、血にまつわる力を守っていた。

佳子の両親も、本家の父の元へ分家の母が嫁いできていた。

一上家は固有の特殊能力として、絵に描いたものを具現化できた。

蝶を書けば、ひらひらと生き物のように空を舞った。

個人によってレベルの差が激しいが、一族の中核に行くほど、能力が高いものが多かった。

佳子も同様な才能を実は持っている。

― 上家の本家であり、その直系の一人娘だからだ。

佳子自身も例には漏れず、勧められたお見合い相手は母の親戚だった。

母のいとこの子供で、佳子とはまたいとこの間柄となる。

一族の慣わしがどうであれ、佳子は分家との結婚を嫌がった。

佳子は首を横に振る。

「違うわよ。私が他所の家にお見合いを勝手に申し込んだの。」

言いながら、スルメを咀嚼する。

「へー、よくやったね。でも、親御さん怒ったんじゃない？」

あ、だから出て行ったのか？」

佳子の母親が喧嘩して出て行ったと話したことを、如月は思い出したらしい。

お見合いが原因だとは話してはいなかったが、察したらしい。

「そうなのよ。お陰で色々とやりやすくなったわ。」

佳子は意味深に笑う。

そして、ビールの缶を持つと、口につけて一口飲みこんだ。

母のことをもともと疎んじていた佳子は、同居が解消されたことで

精神的に解放されていた。  
重苦しく監視がかった家の中が、自由な空間になったのは云うまでもない。

「家の中に男を呼び込みやすくなった？」

如月はまたふざけたことを言い出した。  
やりやすくなったのは、そっちではない。  
すぐに如月はそういう方面に話を持って行きたがる。

「全く、何言っているの…。」

でも、男だけじゃなくて、色々と招きやすくなったけど？」

呆れつつも、今回は平常心を保ったまま返答できた。

母がいたら、如月は家に上げられなかっただろう。

母は妖怪が家を徘徊するのはおろか、一般の人まで招き入れるのを嫌がった。

特別な力を持つ自分たちを、選ばれた人間だと勘違いしていた母は、彼らを卑下していたのだ。

小さい頃は、母に禁じられて近所の友達と遊ぶことが出来ず、他の子が遊ぶのを遠くで眺めているだけという、寂しい思いをしたこともあった。

同級生たちとは行事に影響しない程度に当たり障りのない表面上の付き合いしか出来なくなって、卒業後の現在でも付き合いがあるかと言えば、全くない。

退屈しのぎに親の目を盗むように妖怪たちと遊んでいた子供の頃の自分。

いつしか妖怪たちと話す方が、気楽になった。

「如月って、今夜泊るところあるの？」

「…もし無いなら、泊まってもいいわよ。」

時計を見ると、まだ寝るには早い時間だが、如月が現在どこで寝泊まりしているか知らなかったため、思わず心配になり尋ねてみた。以前は知り合いの家にお世話になっていたと言っていた。

佳子の家からそこまで帰るのに、ひよつとしたら帰る時間が遅くなって足が無くて困っているかも。

余計なお世話かもしれないが、気を利かせてみた。

「もしかして誘ってくれてるの？」

如月はわざとらしく色っぽい笑みを浮かべている。

少し予想していたけど、やっぱりそう返してくるか。

「ち・が・い・ま・す！」

「もー、人がせっかく親切に気を遣ったのに。」

ムスツとふくれっ面を見せると、如月は佳子の顔を見て笑った。

「あはは。老婆心ながら言うけど、その気もないのに、男女二人きりで夜を明かすのは、止した方がいいと思うよ？」

「如月が手を出さなければいいだけでしょ。」

女には困ってなさそうなくせに。

「据え膳はいただく主義なんだよね。」

「それじゃあ、お帰りください。」

何かされては堪ったものではないと、きっぱり言い放つと、如月は「もっとオブラートに包もうよ」と苦笑した。

「全く、男女の機微に疎いというか…。相手に気を持たせつつも、上手にかわすのが美学ってもんでしょ？」

「ごめんなさい。誰かさんみたいに百戦錬磨じゃないので。」

「勉強には喜んで付き合おうよ？」

「はいはい。」

如月とは、こうやって気軽に遠慮なく話せる関係が気に入っていた。いつも明るく話しかけてくれて、親しげな雰囲気で接してくれる。たまに整った彼の顔に見とれてしまう時があるけど、それは憧れに近いもので恋愛感情ではないはず。

しかし、佳子に近づいて協力してくれる、その本心については探り合いの真っ只中であった。

くだいようだが、彼は人間ではない。

もとは人だったと云うが、今では俗に云う鬼と呼ばれるその存在。人間の魂が外道に堕ちると、人の輪廻から外れて人外のものへと、つまり妖怪の類へ変貌を遂げることが稀にあるらしい。

主に極悪非道の所業をした人間が鬼になることがあるらしいが、目の前にいる如月がそのようなことをしたとは到底思えなかった。こうして冗談を交わしながら酒を飲むのは楽しい。

でも、どこまで彼を信頼できるのだろうか。

見返り無く、どうして自分に手を貸してくれるのか。  
鬼である彼に惹かれて、心に占めていくのは恐い気がした。

如月のことは実はほとんど知らない。

普段何をしているのか、どこに住んでいるのか。

名前すら教えてくれなかった。

好きに呼べばいいと言われて、“如月”と名前をつけたのは佳子だ。  
彼と出会ったのが二月であったから、そこからつけた。

佳子のお見合いについて、誰と会うのかとか、如月は特に気にして  
なかった。

泊ればと誘ったけど、気付かないうちに、佳子の性格をよく掴んだ  
やり取りの末に、上手い具合にかわされた。

それが少し寂しく感じて、彼にとって自分はどんな存在なのだろう  
と、そう疑問に思った自分が嫌になった。

彼の本性は鬼なのだから。

人の情を求めても、返ってくる見込みはない。

自分がどん底にいた時に、立ち上がるきっかけを与えてくれたのが  
如月だったから、彼に特別な何かを期待してしまうのかもしれない。  
そう自分に言い聞かせるように結論付けて、納得しようとした。

如月が帰る際に、玄関まで彼を見送ろうと一緒に歩いていたら、唐  
突にお見合いの件について質問された。

特に変わった様子なく、日時と場所を簡潔に訊かれたので、つい何  
も考えずに正直に答えてしまった。

神出鬼没の彼のことだ。



突然会いに来た時に、佳子が不在だった場合を避けたいのだろう。それで佳子のスケジュールを気にしたのかと、この時は彼の行動の意味について気にも留めなかった。彼がいなくなっただ後に、今回も自分の名前を呼ばれなかったなあと、全く違うことを考えているだけだった。

しかし、お見合い当日にそれをとて後悔することになる。

## 関係（後書き）

やっと次回からお見合い編に突入します。

## 喧嘩（前書き）

とりあえず、お見合い編スタートです。

## 喧嘩

お見合い当日、佳子は某ホテルのロビーで、脱いだ上着を膝の上に置いてソファアームに座って待っていた。

木々が紅く色つき始めたこの頃、風が肌寒くなってきていたので、日中でも外出には上着が必要になっていた。

ただ、ホテルの中では空調設備が整っているので、上着がある方が返って暑かった。

これからお見合いだと云うのに、佳子はダサい眼鏡をまだ使用していた。

とっくに流行が過ぎた、黒くて丸いフレームのそれは、真面目で堅苦しい印象しか与えない。

財布の事情でコンタクトを購入していなかったのと、佳子自身がどんな眼鏡でもいいだろうと頓着していなかったからだ。

髪は後ろで団子状に一つにまとめて、細いうなじが見えていた。

今日はスリムタイプのブルーのワンピースを着ていた。ちょうどスカート丈は膝上である。

服に合わせて、ストッキングにヒールのある靴を履いている。

佳子自身痩せているので、彼女が選択した服は非常に似合っていた。丸く開いた首元が寂しかったので、普段はつけないネックレスを着用している。

持ってきたショルダーバッグはお気に入りのもので、こげ茶色の革製で、父と一緒に買ったものだ。

身なりだけは相手に失礼の無いように佳子は気を遣った。

特に問題はない恰好だが、もし服を選ぶときに母がいたら、“お見合いの席には振袖でしょう”と文句の一つでも言われていただろう。そして、最終的にはいつものように母が選んだ、母好みの振袖の着

物を身につけさせられたに違いない。

着せ替え人形のように。

母は和服が好きで、それこそ正装というような考え方であり、若い人が着る丈の短いスカートには眉を顰めていたことがあった。

まだこれなら膝上でセーフだろうけど。

佳子は自分の服装に視線を送る。

そう考えて、母の存在がまだ自分の中で大きいことに気付いて、佳子は心の中で苦笑した。

あの日、初めて母と大喧嘩した時を思い出す。

「佳子さん、貴女は何て事をなさったの!？」

母親の怒りの剣幕は凄まじかった。

予想していたとはいえ、佳子は内心恐れで縮こまる。

自室まごにいて筆耕の仕事に勤んでいた時に、いつもの和服姿で母の政子まさこがやってきた。

長く家を空けていた佳子が自宅に戻って来てからというもの、毎日のように結婚について説得もとい説教をするために母は佳子のもとへ訪ねていた。

そんな母に「五月家にお見合いを申し込んだんですよ、アハハ」とふざけ気味に暴露したら、冒頭のようにマジギレされた。

16歳で結婚してから佳子が授かるまで10年もかかった母は、まだ娘が21歳だというのに非常に焦る気持ちは分からなくもないが、毎日耳にタコが出来るくらい、「結婚、結婚」と繰り返されて鬱憤が溜まっていた。

「いきなり大声を出されてどうしたのですか、お母様。」

母の怒りの原因などとづくに分かっているはずなのに、敢えて佳子は平静を装ってとぼけてみせた。

このぐらいの意趣返しは、可愛いものだろう。

ゆっくりと手にしていた筆を卓上の筆置きに横たえると、母親の方へと向き直る。

母は佳子と目が合うと、目尻を釣り上げて彼女を睨みつけた。

家の中でもきちんとした和服姿の母とは対照的に、彼女の着用していた衣類は、長袖のカットソーに綿パンという寛いだ感じのホームウェアだった。

母に倣って和服を着こなしていた時期もあったが、今ではこの恰好が定着している。これについて母との間に一悶着あったのだが、母の小言を馬耳東風の如く無視を続けていたら、いつの間にか母は何も言うのを止めて、佳子は無言の勝利を治めていた。

「五月家にお見合いを申し込んだなんて…。」

なんてことをしてくれたのです！」

佳子は鬼の形相をした母を作った笑顔で見つめる。

「お母様と約束したじゃないですか。」

里の奉納試合で優勝した人とお見合いするって。

だから、五月家に申し込んだんですよ。」

先月のことになるが、佳子は一上家の当主として、母の故郷で行われた盆祭りに母と一緒に参加していた。

お祭りのメインイベントとして、四年に一度の奉納試合が行われて、

今年は五月家の人間が優勝していた。

「佳子さん、何を言っているの!？」

「あれは…」

「分家の人間が優勝した時、限定とか言わないで下さいよ？」

佳子は母の言葉を遮って発言した。

母は、分家筋の人間と自分を結婚させたがっていた。

佳子の婚約者（予定）が前回の奉納試合にて準優勝だった話を聞いて、優勝も出来ない人間と結婚なんて出来ないわと嫌味を言ったら、逆に母によって優勝したらお見合いをしてもらうわよと無理矢理約束させられた経緯があった。

トーナメント方式の決勝戦で、一上家と五月家がぶつかり合い、勝負の軍配は後者に上がった。

一上家の婚約者（予定）が優勝したら、問答無用でお見合いをさせられて入籍まで行きそうだったが、佳子は何とか難を逃れたのだ。そして、これ幸いにと母の言を借りて、優勝した五月家にお見合いを独断で申し込んだのだ。

全ては母の背後にある分家との繋がりを断つために。

一上家は代々親戚筋と婚姻を繰り返し、それが当たり前となっていた。

母自身も分家の出身で、父と結婚して故郷から遠く離れたこの地で暮らすようになった。

一上家の本家だけ、お役目のために離れた土地で暮らしているため、故郷との関係は薄いですが、親戚づきあいは濃厚に続いていた。

故郷の山代は、様々な特殊な能力を持った人間が集まった集落だ。その能力を活かして、様々な裏の仕事をこなしている。

一上家も例には漏れず、能力者であり、その血筋を絶やすことなく現代まで続いている。

同じ血縁同士の婚姻を繰り返してきたため、異能の力を今まで保持することが出来たと言えるかもしれないが、数代前からの当主筋の人間は、虚弱体質が続いている。

血が濃くなっていることの弊害かもしれない。

父が生存していた時は、それが母の勧める縁談を渋っていた主な原因でもあった。

何度か婚約者（予定）に会ったことがあるが、分家で育った母と同様な物の考え方をする人だったため、良い印象を持っていなかったのも大きい。

父の死後には、別の理由で分家とは縁を切りたいと考えるようになったが。

佳子が幼い頃から感じていた事だが、母の考え方は相容れないものが多かった。

一般の子供に混じって育ってきた佳子と、古くからの一族の因習を当たり前として分家の中で育ってきた母の政子。

二人の環境は大きく異なり、母の言動は佳子を子供の頃から苦しめてきた。

それでも、今は亡き父が佳子と母の間に立って、彼女を守ってくれていた。

しかし、優しい父の庇護の手はもはやない。

彼女が高校3年の、もうすぐ卒業という2月の冬に交通事故で最愛の父を亡くしてしまった。

その後、この家や母から逃げるように佳子は家出してしまったが、父の死後から3度目の春の終わりに再び戻って来た。

今では秋になり、仏間に飾られた父の遺影に涙することも少なくなかった。



「屁理屈を言わないでください。」

一上家の当主である貴女が、後世に後継者を残すためには、婿は適当に選べないんですよ！

先祖が苦勞して残してきた素晴らしい力を、貴女の代で途絶えさせるわけにはいかないのです。

それに五月の四男坊と言えば、他所からやってきた貰われっ子ではないですか。

「どこの馬の骨とも知らぬ輩……」

「お母様が何と言おうと、もう当主である私が決めたことですから、決定事項です。」

「黙って従ってください。」

私は再び母の科白を遮った。

佳子が母の目を見据えながら、低い声ではっきり言い切ると、母が怒りで身を震わせたのが分かった。

そして、振りあげられる母の右手。

「パシンッ」

佳子の頬を平手で叩く音が部屋に響いた。

和服の袖を左手で押さえて、右手を振りおろした様は、険しく恐ろしい形相でも、とても優雅で凜としていた。

「親に向かって何て口の聞き方をするんです！

当主といえども、一族が決めた者以外との結婚は許されません！」

佳子は打たれた頬を手でさすりながら、そう叫ぶ母を見た。

母が放つ凄まじい怒気によって、佳子の肌に電気が走ったような感

触がした。

母の言動は佳子の予想の範囲だった。歯を食いしばり、母の気迫に負けまいと踏ん張る。

「もう私は成人しましたから、保護者の同意なく結婚できます。

しかも、結婚は個人の自由でしょう。一族が勝手に決めるなんて馬鹿馬鹿しい。」

「なんですって！」

吐き捨てるように中傷すると、母の怒りがさらに増したのが手に取るように分かった。

母を追い詰めようとさらに口を開く。

「そもそも、お母様はどうなんですか？

嫁に出てもなお、親の脛をかじって贅沢三昧。

いつまでお嬢様気分で、ご実家からお小遣いを貰えば気が済むんですか？

お父様があまりお金を稼げなかったのは事実でしたが、お母様も一緒に働いて二人で頑張れば、分家のご実家に頼らず貧しいなりに生活できたかと思うんですけど。

それなのに、一切働こうとはしませんでしたね。」

綺麗に整えられた母の眉毛が、ピクリと跳ねあがった。興奮しているためだ。

お役目のために、里から遠く離れたこの地で生活している当主筋の家系。

今ではすっかり落ちぶれて、分家から見れば、能力と血筋だけしか勝る物がない。

貧しい本家とは対照的に、繁栄して裕福な分家。恵まれたお嬢様生活を送って来た母は、嫁に来ても本家の状況に馴染もうとせずに、独身時代と同等の生活水準を求めた。身につける衣類や装飾品は、高級品ばかり。

女中を分家から呼んで家事をさせて、自分は全く手を掛けなかった。

「貴女、何を言っているの!？」

そもそも、どうして私が働かなくてはならないのですか。

私は当主の嫁としてふさわしい振る舞いをとってきただけです。

そのことについて非難される筋合いはありません!」

「当主の嫁としての振る舞い？」

お母様の場合、私を産んだは良いけど、子育ては女中に任せて、外に出て遊びっぱなしだったじゃないですか。」

呼吸器系が生まれつき弱い佳子は、熱を出した時にその症状が悪化することが多くて、苦しい咳が何日も続くことがあった。

そんな状態の佳子を、母は特に悪びれもせずに置いて出かけたことがあった。

女中や父が家にいてお世話してくれたから、放置されていたわけではなかったが、小さい頃はやはり体調が悪くて辛い時の母親の不在は寂しいものがあったのだ。

大きくなった今でも、忘れられない記憶の一部となっている。

「遊びつて、何てことを…!」

お付き合いも大事な女の仕事なんですよ!

貴女、今更何を言い出すの!？」

佳子の言葉に傷ついたように母は顔を顰めた。

母の肩が興奮の為に震えていた。

どんなに母が反論しても、佳子は全く同情しようとは思わなかった。母が会っていた人たちは、独身時代に分家との付き合いがあった人で、佳子にとってみれば、本家のこの家に住んでいる限り、無理に付き合う必要のないものである。嫁の仕事と称するには、あまりにも勘違い過ぎる。

「お金もないのに、見栄だけのために新しい衣服を買い、付き合いと称してその人たちにあわせて豪華な食事のし放題で、金銭的にずいぶんお父様を苦しめたんじゃないですか。

いつも分家のお爺様に頭を下げて、可哀想でした。

私は、もう分家から経済的に援助してもらうのを止めたいんです。レジのバイトと内職の収入は少ないですけど、贅沢をせず節約すれば、何とか食べていけます。

お母様もここで暮らす以上、何かしら働いてください。」

母の顔が醜く歪んだ。

怒りは頂点に達したと見た。

父と母の仲は、悪かったと佳子は認識している。

佳子の言ったように、金銭感覚のない母は湯水のようにお金を使い、いつも父は支払いに苦慮していた。

母の実家に頭を下げながら電話している姿を何度も見かけたことがあった。

もちろん父は母に何度もお金の使い方について、母の背後にあるお爺様の存在に遠慮して、遠まわしであったが苦情を伝えていた。

しかし、独身時のお嬢様感覚がいつまでも抜けない母には、全く理解できなかつたようだ。

実家に援助してもらうのに何の疑いも抵抗も持たない母とは、話し合いになつてなかつた。

優しい父から笑顔が消えたのは、いつだったからか。

そんな父の姿を見て育った佳子は、自分自身が同じように母によって苦しめられるのは、何としても避けたかった。

そもそも分家に依存しては、結婚を断ることができない。

まずは自立しなくてはと、佳子は今年の夏頃から働きに出ていた。外で働くことを良しとしない母によって、そのことを反対されたが、言うことを聞かずに続けていた。

それは母に初めて逆らった時だった。

自分の意思を曲げずに、給料日まで働き続けて初めて給料を貰った時は、本当に感動したものだ。

「何で子供の貴女にそんな酷いことを言われなくてはならないの!？」

お父様の援助は当然なものよ!」

母は興奮のあまりに、大きな声で叫んでいた。

そんな母の姿を見て、逆に自分が冷静になるのを感じた。表情を殺して視線を送る。

「では、お爺様の扶養されるつもりなら、ご実家に帰られてください。

うちでは、働かざる者食うべからず、です。」

「なんですって!？」

貴女、自分の親を追い出すつもり!？」

母の科白に、わざとらしくため息を漏らす。

「出て行きたくないなら、仕事を見つけて働いてください。

お母様はお父様や私と異なり、病気一つない健康体じゃないですか。」

言いながら、決して母が自分の提案を受け入れないことを確信していた。

「親に向かって、何て生意気な…！」

誰のおかげでここまで育ててもらったと…！」

母は憎らしげに佳子をしばらく睨み続けた。

佳子はその視線をかわすことなく、受け続けた。

この気持ちを伝えようと決意するまで、佳子はどれほど躊躇いや母親に対する恐れがあったか。

それを克服したからこそ、彼女は母と対峙できたのだ。

目を逸らさず自分を見つめる佳子の姿に、揺らぎない意思を感じ取ったのか、ふと母は険しい表情を緩めた。

そして、興奮を抑えるためか、大きなため息を一つこぼした。

「いいでしょう。貴女の言う通り、実家に帰って差し上げましょう。

せいぜい苦労して、親のありがたみを知りなさい。

…貴女独りで何ができるといえるのかしら。」

話し合いの末、折れたのは母だった。

こちらを見る目つきは鋭いものの、怒りで興奮した頭は少し落ち着きを取り戻したようだった。

母の考えでは、佳子が音を上げて、親に泣きついてくると予測しているようだった。

佳子は母のその言葉に何も返さなかった。

「家出しても結局は戻ってきましたしね。

今回はいつまで強がりを書いていられるかしらね？」

母はそう捨て台詞を残すと踵を返す。

足音も無く佳子の部屋から出てゆき、戸を閉めて行った。

遠くで母が女中を呼ぶ声がする。

きつとこれから実家へ帰るために準備をするのだろう。

全ては佳子の計算通りに事は進んだ。

母と分家から遣わされた女中をこの家から追い出す。

それこそ、佳子の考えたシナリオの一部だった。

今頃になって、手が震えてきた。

緊張が途切れたせいか。

自分の手をそつと握り締める。

長い間溜めこんでいた母への不満をぶちまけて、すっきりするはずだったのに、虚しいのは何故だろう。

子供の頃から抑圧されていた感情は、まだうまく整理できそうもなかった。

喧嘩（後書き）

春人をなかなか出せなくてすみません。  
次回こそは！



## 春人との対面

お見合いの相手がいつ来るかと、出入り口の方を見つめてその姿を探していた。

まだ約束の時間にはなっていない。

とはいっても、あと5分くらいでその時間はやってくる。

今日のお見合いの席は、当人同士だけという、シンプルなものにした。

堅苦しい雰囲気はなしにしたいというのは建前で、佳子の母親が自分と現在不仲なために出席してくれそうにもないからだ。

あら、来たみたい。

入口から入って来た目的の人を見つけて、すぐに立ち上がると、その男性に向かって手を振って、こちらの存在をアピールした。こちらに気付いて足早に近づいてくる男性の姿を見守った。

「お待たせして申し訳ございません」

男性は礼儀正しくお辞儀をしながら、謝罪した。

「まだ時間前だし、気にしなくていいですよ？」

佳子は安心させるように笑顔を浮かべながら、集合場所に最後にやってきて恐縮している男性に向かって返答する。

男性は濃いグレーのスーツを着ていた。

傍から見ても真新しいそれは、男性自身の若さもあってとてもフレッシュな印象を与えた。

染めていない短い黒髪と、丁寧な物腰は、真面目そうな雰囲気。綺麗に伸びた背筋と、逞しそうな両肩や腕回りは、背広を着ていても見て取れた。

成長期を終えた体は、大人とさほど変わりはないが、顔つきはまだ成人前だったため、若さに溢れていた。

お見合いの男性は、まだ卒業前の高校生だ。

フォーマルの服装と言えば制服だと思うが、これからお見合いに同席する身としてはそれを彼が着用してなくて良かったと佳子は思った。

制服姿の男性とお見合いとは、少し恥ずかしい感じがしたからだ。

それにしても、と佳子は男性を改めて見つめる。

男性の顔は、目を見張るものがあった。

要するに、とても良すぎるのである。

先日久しぶりに会った如月とは、全く違ったタイプだ。

如月はどちらかという中性的で柔らかな雰囲気を持ち、陰のある妖艶な色気を漂わせていた。

一方、目の前にいる男性は精悍な顔つきで男らしく清々しかった。

どちらも負けず劣らず眼福ものである。

間近で彼の顔を見たのは今日が初めてだった。

彼を最初に見かけたのは、故郷で行われた夏のお祭りの時だった。

夏祭りのメインイベントである奉納試合の観戦をしていた時に、試合に参加していた彼の姿が会場にあった。

しかし、その時は遠めだったし、古くて度が弱くなった眼鏡だったため、彼の顔までは確認できなかった。

佳子の裸眼の視力は結構悪いので、コンタクトや眼鏡がないとほとんど見えない。

愛用していたコンタクトはお祭り前に紛失したため、度の合わなく

なっていた眼鏡を引つ張り出して使っていたのだ。

まさか直接会って話をする機会があるとは思ってもみなかったし、その時はお見合いのことまで考えてなかったから、あえて顔まで確認しようとは思わなかった。

後になって、母の逆鱗にわざと触れさせるために五月家とのお見合いを企てた時も、相手の家に100%断られると思っていたから、正直に言うとか相手の顔も知らないで申し込んでいたのだ。

そんな状況の中、五月家から快い返事を意外にも貰い、それから佳子は慌てて相手の素性を調べ出した次第だった。

「彼って、どんな顔をしているの？」

こんな質問をして、正には呆れて白い目を向けられた。

正によって得られたお祭りの時の彼の写真を見て、佳子が啞然としたのは言うまでもない。

自身が申し込んだお見合いの相手が、美男子だったということは、佳子にとって衝撃だった。

優しい人だと良いなと呑気に考えていた自分が恨めしい。

誰しもが認める美貌の顔。

私が彼の顔に一目惚れをして、一族が指定した婿候補者を蹴っ飛ばし、結婚を申し込んだと思われるじゃないか！

彼女の想像はあまり外れておらず、正の嫁には、「彼ってカッコいいわよね。佳子さんが気に入るのも分かるわ。ウフフ。」なんて言われる始末だった。

「いえ、違ってます。」といちいち訂正して回りたい気分だったが、そんな科白も照れているからだと解釈されるに違いないと思い、他人にどう思われているか気にしないことにした。もともと自分が蒔いた種だ。

自分さえ気にしなければ、害のないものだ。

ちらりと再度彼の顔を見つめる。

こんなに格好良いなら、女の子なんて選り取りみどりだろうに。

しかも18歳の若い男がお見合いに参加なんて、馬鹿げている気がした。

結婚相手なんて、今すぐに決めなくて良いはずだ。

そもそも一上家と五月家は仲が悪い筈。

それなのに自分とお見合いするなんて、何か裏があるに違いないと、佳子は密かに警戒をしていた。

自分からお見合いを申し込んでいるにも関わらず、彼との縁はこれつきりにしたいと、内心では酷い扱いになっていた。

今日の佳子の目的は、穩便にお見合いを終わらせることだ。

佳子は自分の本来の目的の為に、今後色々と他に行動を起こさなくてはならないため、序盤から余計なことで頭を悩ませたくなかった。

とりあえず彼の出方を見てみようと思ひ、本心はおくびにも出さずに、佳子もわざわざ会場まで出向いてくれた男性に満面の笑顔を向けた。

「初めまして、一上佳子です。」

佳子は深々と頭を下げる。

そして、佳子は彼を見つめた。

彼は佳子と目が合つと、一瞬大きく目を見開き、視線が少し泳いだと思つたら、すぐに恥ずかしそうに目を伏せた。

「…こちらこそ、初めまして。  
五月みづき春人はるとです。」

春人も佳子に倣うようにお辞儀をした。

声のトーンが少し硬かったのは、緊張からだろうか。

何にせよ、お見合いはここから始まる。

相手に分からないように、佳子は気合を入れた。

## 春人との対面（後書き）

やっとお見合い相手の春人と会えましたが…。  
次回更新は一週間くらい後になります。  
すいません。

## 闖入者 1

佳子たちは、予約してあったホテル内のレストランへとやって来た。ランチタイムを過ぎた時間帯だったので、店内は客が少なく、まばらに席が埋まっていた。

二人は適当に飲み物を注文する。

運ばれてきた紅茶のカップを口に運びつつ、佳子は目の前に座る春人を見つめた。

先ほどから目下のテーブルにはかり視線を送っている春人は、佳子と目を合わせようとしない。

何処となく落ち着きがない態度に、佳子は彼に少し同情した。

もしかして、あちらも自分と似たような状況なのかしら？

佳子はその風な風にぼんやり考えた。

五月家もお見合いを突然申し込まれて、不審に思うのも不思議ではない。

佳子が何を考えているのか探るために、春人が上から命令されて嫌々この席にしているとしたら、佳子に対して好意的でないのも頷ける。

佳子はあまり乗り気でなさそうな彼の様子を気にしないことにした。自分だって、本気で結婚しようとは考えていない。

向こうだってそうだろう。だから、今日で彼と会うのも終わりのはずだ。

とりあえず、会話しないことには間が持てないので、世間話をしようと思った。

「今日はどこやってここまで来たのですか？」

「車です。」

「貴方が運転されたんですか？」

「はい、免許を持っているので。」

「へーすごいですね。」

「住んでいるところが田舎なので、免許が無いと困るんです。同級生の多くが夏休みに教習所へ通っていましたね。」

「そうなんですか。」

でも免許取り立てで、遠乗りはさぞかし大変だったでしょう。」

「いえ、運転が割と性にあっていて好きなので、苦になりませんでした。」

結構ハキハキ答えてくれるので、会話はこちらが質問する限り、順調に進むようだ。

「今日は、ここまで来るのにどのくらい時間が掛かったんですか？」

「途中、少し道が混んでいたので2時間近く掛かりました。」

当初の予定では1時間半くらいだと見込んでいたんですが。」

「そうなんですか。」

本当に今日は遠いところからわざわざお越しいただいてありがとうございます。」

佳子が頭を軽く下げると、春人は恐縮したように慌てて頭を下げ返した。



「いえ、こちらこそ。」

今日はお会い出来て嬉しいです。」

お世辞攻撃が来たので、佳子も愛想笑いを浮かべてお返しをする。

「私もです。」

緊張して昨日なかなか眠れなかったんですよ。」

昨晚の就寝時間が遅かったのは事実だが、それは内職の量が今回多かったにも関わらず、本日お見合いがあつて時間が削られたため、皺寄せが来たからに他ならなかった。

佳子は宛名書きなどの筆耕の内職をしている。

亡き父が同じ仕事をしていたので、父の仕事関係の知り合いに頼んで、少し仕事をまわして貰うことができた。

父に教わって書道が続けたお陰で、佳子の筆使いは代筆できるくらいには上達していた。

春人がここまで2時間かかったというが、佳子も電車でここまで来るのに1時間半かかっている。

二人が住んでいるところが遠かったため、お互いの中間地点で本日待ち合わせしたのだ。

そこは佳子の住んでいる街から電車で来られるところだった。

佳子は免許を持っていないため、移動には公共機関を利用するしかない。

電車に乗っている間は、うとうとと居眠りをしていて、あやうく降車する駅を乗り過ごすところだった。

佳子は紅茶のカップに手を伸ばして、再び口をつけた。

カップを受け皿に置いて、春人の様子を観察すると、彼も同じよう

にお茶を飲んでいた。

絵になる光景に目の保養とばかりに思わず見とれる。

テーブルの上に戻すまでの仕草を一部始終眺めていると、彼が佳子の後方へと視線を移して顔色を変えたのに気付いた。

佳子の後ろには、レストランの出入り口がある。

春人の異変が気になった佳子は、思わず後ろを振り返って状況を確認した。

人が一人歩いてくるのが見えた。

こちらに急ぎ足で向かってくるのは、スーツを着た男性。

自分と同じくらいの年齢で、しかもどこかで見た顔だと思って、それが今年の夏に会ったばかりの人だと気付く。

一族が用意した佳子の結婚相手、いちがみ たかし一上高志。

高志は眉間に皺を寄せて、こちらに真っ直ぐ向かってくる。

もともと目つきが鋭く神経質そうな顔な上に、体格が大柄なので、そんな男が勢いよく近づいてくるのは怖いものがあった。

しかし、どうして彼がここにいるのだ。

不機嫌な顔をした高志が佳子たちのテーブルの前に来ると、足を止めて佳子を見下ろした。

一瞬だけ、春人の方に視線を送るが、すぐに佳子の方へと戻す。

そして、おもむろに佳子の手を掴むと、無理矢理引っ張る。

佳子は強制的に椅子から立ち上がる破目になった。

春人も慌てて立ち上がる。

「何をするの!？」

佳子が抗議すると、高志は舌打ちをして険しい表情を佳子に向けた。

「お前こそ、ここで何をしている。」

「何って、お見合いだけど。」

佳子の言葉に高志は思いつきり蔑んだ表情を浮かべた。

「馬鹿を言うな。お前は俺と結婚するんだ。時間の無駄になるようなことはするな。」

「私は貴方と結婚する気はありません！」

手を離してもらえませんか。そしてすぐに帰ってください。」

高志はもう一度派手に舌打ちすると、無言のまま強引に佳子の手を引つ張り出口へ向かう。

佳子は引きずられるように連れ去られようとした。

止めてと叫ぼうとした時に、様子を見守っていた春人が動いた。

驚くほどの速さで、佳子を捕えていた高志の腕を掴む。

高志がそれに気付いて立ち止まり、後ろを振り返ったと思ったら、

春人は彼の腕を捻りあげた。

高志は苦痛の表情を浮かべると、佳子を掴んでいた手の力が緩み、

一瞬にして高志から佳子は解放される。

佳子は再び捕まっては堪らないと、春人の背後に隠れて高志の挙動を見守った。

佳子が安全な場所まで移動したせいか、すぐに春人は高志の腕を離す。

「邪魔をしないでいただけますか。一上さん。」

高志と春人は向かい合う。彼らの間に緊迫した空気が流れる。

高志は春人を無言でしばらく睨みつけていた。

そして、佳子へ視線を巡らせると、口を開く。

「そいつは俺のものだ。返してもらおう。」

「お断りします。」

春人は即答する。

背後にいた佳子は春人に対する株を少し上げた。

佳子のゴタゴタに春人は巻き込まれただけなのに、自分を庇ってくれる彼が意外に良い人かも思った。

ちらりと周りを見ると、店内にいた客は何事かとこちらに視線を送っているのに気付いた。

騒ぎを起こして注目されている。

何とかしなくてはと思うが、高志とまともに話し合いが出来る状況ではない。

高志は頑なに佳子の引き渡しを拒否する春人を睨みつけている。

この眼光だけでも人を殺せそうだ。

「これは当家の問題だ。お前とのお見合いなど手違いにすぎん。

茶番は終わりにしてもらおう。」

「彼女は貴方と結婚する意志はないようですが？」

「ふん、あいつの意思など関係無い。一族の決定には誰も逆らえん。」

「彼女は当主でしょう？」

当主の意思は無視するのかと暗に春人は尋ねる。

「こいつが当主だからこそ、婿には俺が選ばれたんだ。」

いいから、そこをどいてそいつを寄せ。」

高志は春人の質問の意図には触れず、自分の要求のみ繰り返す。そんな高志の態度に佳子は苛立ちを感じた。

「何度も言いますが、お断りします。」

春人がはつきりと拒絶したその時だった。

高志の口元が歪み、そして、「平蕪<sup>ひょうぶ</sup>、やれ」と呟いた。

その直後に高志の背後から複数の黒い帯状の何かがすごい勢いで飛び出してきて、春人の体に巻きついてきた。

咄嗟のことに春人は対応できず、主に上半身部分、腕や首元を締め付け上げるように捕縛された。

「くっ…！」

春人はうめき声を上げる。

「ちょっと、彼に何をするの！？ 止めて！」

春人に巻きついてるのは、黒い布のような妖怪だ。

高志に使役された妖怪が気配を殺して彼の背後にいたらしい。

里の掟で、特殊な能力を一般人にばれる様な公共の場で使うことは緊急時を除き、禁止されている。

従って、高志のこの行動は違反となる。

春人を押さえる妖怪は一般人には見えないが、拘束された彼の挙動は他の客の目には怪しく映っているだろう。

佳子は高志に抗議するが、彼は何も答えず、体の自由を奪われた春人を横へ押しのと、佳子の腕を再度捕えた。

高志に押された春人は、倒れそうになる体勢を何とか堪えるのに精

いっぱい、佳子にまで手が回らない。  
その際に高志は佳子を連れ去ろうとする。

「ちょっと、乱暴は止めてよ！」

佳子が必死に抵抗しても、男の力には勝てず、ずるずるとレストラ  
ンから引きずられるように連行される。

ところが、お店から出た矢先、高志は足を急に止めた。  
足が止まったことに驚いた佳子は、俯いていた顔を持ち上げると、  
高志の前に立ちはだかる男に気付いた。

## 闖入者 1 (後書き)

途中ですいません。  
なるべく早く次は更新したいです。

## 闖入者 2

「あっ！」

見知った男の出現にさらに驚いた佳子は、思わず声を上げてしまった。

極上の笑みを浮かべた美貌の男が目の前にいた。

高志が佳子の声に反応して、目の前の男から注意を逸らしたとたん、男は高志を突然殴りつけた。

殴られた衝撃で横に飛ばされて床に倒れる高志。

あまりの展開に佳子は呆然と立ち尽くし、うつぶせに倒れている高志がふらふらしながら起き上がろうとしているのに目を離せないでいると、高志を殴った男に今度は手を取られた。

「ほら、行くよ！」

そして、今度は男に手を握られて引つ張られる。

伝わってくる体温は相変わらず冷たい。

大きな彼の手に包み込まれている自分の掌。

さっきまで乱暴に高志に握られたものと比べて、優しさが感じられた。

「ちょ、ちょっと。何で如月がここにいるのよ!？」

突然現れた男の名前を佳子は呼ぶ。

「いいから、いいから。とりあえず、逃げよ?」

相変わらず妖艶な色気を振りまきながら、如月は佳子を振り返って



笑みを浮かべると、有無を言わず佳子の手を引いて誘導し続けた。高志よりマシかもしれないが、お見合いの場から連れ去られることには変わりが無い。

「ちよつと待つて！」

帰るわけにはいかないんだけど…。」

佳子の抗議を如月も聞いてはくれず、ホテルから出る破目になる。出入り口付近にあるロータリーに停めてあつた高級そうな黒塗りの車に一直線に向かう。

如月は後部座席を開けると、佳子を押し込むように乗せた。そして、彼も続いて乗りこんでくる。

「すぐに出して。」

如月が言うと、後部座席を振り返っていた運転手が「はい」と返事して、すぐに前を向いて発車させた。

運転手は黒いサングラスをかけた青年で、後部座席に乗った佳子と如月よりは一回りほど年上のように見えた。

車がゆつくりと動き出した中、如月はドアを閉める。

次の瞬間、ドアにロックが掛かる音が車内に響いた。

如月と体を密着して座っている状況にすぐに気付き、異性に慣れない佳子は思わず緊張する。

彼から離れるために、慌てて隣の座席へ腰を少しずつ動かしながら移った。

車がホテル前のロータリーを出た時だった。

先ほど如月が閉めた車のドアを叩く音がした。

佳子が驚いて首をそちらに向けると、春人がドアを叩いて、「佳子さん！」と叫んでいた。

春人は高志の妖怪から解放されていた。

春人は動いている車と並走しながら、ドアノブに手を掛けて開けようとしていたが、鍵が掛かっていたため、無駄に終わる。

「五月さん、危ないですよ！」

私は大丈夫ですから！」

思わずドアの方へ身を乗り出して、佳子は大声を出した。ドアと佳子の間にいた如月が今は邪魔だった。

佳子たちの車は車道を走り始めていたので、体一つで車を追いかけるのは、明らかに危険だった。

しかも、ロータリーを出てから一般道の流れに乗らなくてはならなかったため、車の速度は急に上がっている。

春人が車に轢かれてもしたら大変だ。

佳子の声が届いたのか、それとも車の速度に追いつかなくなったのか、春人は車の側からいなくなった。

佳子が後ろを振り返り、リアガラス越しに春人の姿を探すと、歩道にぽつんと立ち尽してこちらを眺めていた彼がいた。

一人置いていかれて小さくなって行く彼の姿を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

自分のせいで彼に迷惑を掛けてしまった。

後で連絡して一言お詫びしないと気が済まない心地だった。

「彼とお見合いしてたの？」

穏やかに笑みを浮かべながら如月が尋ねてきた。

「そうよ。でも、お見合いが途中でぶち壊されて、彼に迷惑をかけたしまったわ。」

前へ体の向きを直しながら、返事をする。  
その一因でもある如月を軽く睨みつけると、如月は佳子の視線を受けても意に返さず表情を崩さない。

「じゃあ、俺が殴ったのは誰だったの？」

「えーと、親が勧める縁談相手。」

「もしかして、修羅場だったの？」

「もしかしなくても、そうだったわ。」

「もー、あの人といい、如月といい、どうして黙って見守っていてくれなかったのかしら？」

さっきのいざこざを思い出すだけで頭が重かった。

自分の額を手で押さえつつ、チクリと嫌味を言うと、如月は心外だと言わんばかりに、目を大きく見開いて佳子を覗き込んだ。

「もしかして、俺に怒っている？」

もとから結婚する気がないのに、お見合いを申し込んだくせに、むしろ、邪魔されて助かったんじゃないの？」

軽い口調だったが、如月の鋭い指摘に佳子は言葉に詰まった。

確かに自分の都合だけで、五月家にお見合いを申し込んで春人を巻き込んでしまい、そもそも迷惑をかけたのは佳子だ。

如月の言う通り、春人と本気で結婚しようとは思っていなかったし、今となっては言い訳だが、申し込んでもすぐに断られると考えていた。

自己嫌悪に陥り気味の佳子が、視線を彷徨わせて黙りこんでも、如

月は言葉を続けた。

「まあ、でも、一度やってみたかったんだよね。」

意に染まぬお見合いに無理矢理参加させられたお嬢様を攫うナイト役。」

「なによそれ。」

如月の軽口に反応する佳子。

如月を再び見ると、相変わらず面白おかしく佳子を見つめていた。

そんな如月に佳子も表情を崩す。

彼の調子の良さに、少し気分が上昇した。

「後で彼に謝っておくわ。これでこのご縁も終わりね。」

思わず、ため息が漏れた。

もつと穩便にお見合いを終わらせたかった。

五月家の面目を潰そうなどと考えてもいなかったが、結果としてそうなってしまう、ますます一上家との仲が悪くなってしまうかもしれない。

佳子の脳裏には先ほどの春人の姿が浮かんでいた。

「佳子さん」と春人は自分の名前を呼んで、間近で見た顔はとても切羽詰まっていた。

あの一瞬の表情が作りものだったとは思えない。本気で心配してくれたのだろう。

分家の人間以外に他の能力者と個人的にほとんど話したことがなかったため、他の里の人間に対しても分家と同じく悪いイメージを持っていたが、今日の春人の人柄を見るとそうでもないらしい。

それにしても予期しない闖入者たちがずいぶんと暴れてくれたものだ。

高志は何故お見合いの場にちょうど現れたのだろうか。  
どこでその情報を仕入れたのだろうか。

佳子如きのためにわざわざ動く人だと考えていなかったが、婚約者（予定）として今回のお見合いを放置することは、分家内で許されなかったのかもしれない。

高志と何度か会ったことがあったが、彼は自分に全く興味が無さそうだった。

本家の娘というだけで美しくもない自分との結婚を、あからさまではないが嫌そうだったので、今回佳子の方から彼との結婚を拒絶して、むしろ感謝されると思っていたくらいだ。

しかし、いざ佳子に振られるとなるとプライドが許さなかったのか。それとも分家に逆らう佳子を許せなかったのか。

高志の不機嫌な顔を思い出す。

彼の乱暴な振る舞いは許せなかったが、嫌々ながらもやって来たのにも関わらず、如月に殴られた彼には少し同情の余地があった。

春人を傷つけたわけでもないし、里の掟を破ったことには、今回は目を瞑ってもいいかもしれない。

佳子はサイドガラスから外の景色を眺めた。

ビルやお店が立ち並んでいる合間を走っている。次々に変わる街並みに目が回るのを感じた。

現在走っている道路は、分岐帯のある2車線道路で幅が広がった。交通量は結構あり、何台も列を作って走行している。信号で停まると、歩行者が何人も横断歩道を通っていた。

普段と変わりのない日常を眺めて、自分が今日置かれたドラマみたいなお見合いの興奮から抜けつつあるのを感じる。

「もし、またどこかにお見合いを申し込むなら、俺にしておきなよ。

便利だよ？」

「はあ？ 私、貴方の本名も知らないんだけど？」

「大丈夫、誰も知らないから。」

「それ意味分からない。」

佳子たちが後部座席に座って、ふざけたやり取りをしている間にも運転手はどこかへと車を走らせている。

如月が佳子に対して不埒な真似をするとは思えなかったが、一体どこへと向かっているのか心配になってきた。

「ねえ、これからどこに行くの？」

「佳子の家。せっかくだから送ってあげようと思って。」

「本当？ ありがとう。」

如月の言葉に安心した佳子は座席に深く座り込んだ。

腰をすっぽりと包みこむ様な座り心地に思わず感心する。

外で車の外観を見た時に高級そうだと思ったが、落ち着いてじっくりと内装も見ると、高級感漂う雰囲気がある。

最近貧乏性が板についてきた佳子は、この車の値段を考えて、決して汚さないように気をつけようと思った。

如月をこっそりと伺い見る。

佳子の視線にすぐに気付いた如月は、にっこりと嬉しそうに笑みを浮かべる。

今日の彼は前回のラフな格好とは異なり、お洒落な身なりだった。

ダークグレーのジャケットの下には襟口が大きく開いて体にフィットした白いカットソーを着て、ボトムスはタイトなラインの黒だ。首から鎖骨へと滑らかなラインがはつきりと露わになっていて、艶やかな白い肌からは色気が漂っているように見える。長い脚を組んでゆったりと座席に腰かけて寛いでいる様子は、とても優雅だった。

心の中でこっそりとため息を漏らす。

「そういえば、今日来るなんて一言も聞いてなかったんだけど…。」

「言っていたら意味ないでしょ。いやー、想像はしていたけど、佳子の驚いた顔は見物だったよ！」

声を立てて笑う如月。

佳子のことを心配して駆け付けてくれたのかと、今回の彼の動機を良い方に一瞬でも考えていた自分が愚かだった。

「もー、人で遊ぶのは止めて！」

結局、自分は彼にとっておもちゃみたいなものかもしれない。

佳子が怒った顔をして、よしよしと頭を撫でられてしまい、如月にはちっとも効いていなさそうだった。

## 闖入者 2 (後書き)

お気に入り件数がじわじわ増えているので嬉しいです。  
読んでくださってありがとうございます。



## 如月の回想 佳子との出会い 1

如月は佳子の寝顔を見つめる。

車に揺られて気持ち良くなったのか、いつの間にか寝入ってしまったらしく、佳子は微かに寝息を立てていた。

背もたれとドアの隙間に寄りかかるように座っている。

そんな無防備な佳子の姿に苦笑する。

自分が佳子の家に向かっていっているとえば、あっさりと信じるし、自分が何か悪企みをしていると考えないのだろうか。

自分を全く疑わない佳子の能天気さには程ほど呆れる。

まあ、今のところ彼女に何かする気はないが。

如月は自分の上着を脱いで佳子の体に掛けた。

人間は弱い。簡単に病気になったり、怪我をしたりするから厄介だ。自分が人ではなくなって久しくなり、そう云った人間の脆さとは無縁な体になったが、人間の世界に紛れているうちは、それを忘れてはならない。

まだ彼女には元気でいてもらわなくては困る。

自分は彼女の行く末を見届けたかった。

彼女の望む、復讐の結末を。

あれは、3年近く前のことだ。

まだ寒さが続く冬の夜。

何気なく寄った繁華街に、女と歩いていた時だ。

夜が更けて、酒の力により浮かれた人間たちが賑やかに通り過ぎる中、自分の向かいからグレーのコートを羽織った女子校生らしい女が目に入った。

学生だと思ったのは、ボタンが全開のコートから下に着用している

制服が見えたからだ。

こちらに向かつて、俯いたまま覚束無い足取りで歩いてくる。味気ない紺色のナイロン製のバッグを肩から掛けている姿は、まさしく学生そのものだった。

明らかに場違いな姿にも関わらず、すれ違う人間たちは彼女に何の反応も示さない。

一瞬、自分の目を疑った。

自分と同類かと思ったが、その気配は人間のものだった。

それにも関わらず、誰の目にも留まらないのは何故だ。

しかもどういふ訳か分からないが、彼女の存在をそのまま見過ごさずにいられない何かが自分を突き動かす。

いつもなら余計なことには首を突っ込まない性分なのに、近づいてきた彼女に思わず声を掛けてしまった。

しかし、彼女の耳に自分の声が届かなかったのか、何も反応を返してくれず、自分の脇を通り過ぎてゆく。

去りゆく後ろ姿を見て、彼女が髪を後ろで一つに束ねているのに気付いた。

その時、何か心をかき乱されるような、それでいて何故か惹きつけられるような、理解しがたい感情を彼女に抱く。

それが何なのか理解できないまま、彼女から目が離すことが出来ず、無意識のうちに踵を返して彼女の後姿を追っていた。

一緒にいた女を置き去りにして彼女の方へ向かってしまったため、背後で何か文句を言われたが、適当に声を掛けたどうでもいい女だったため、気にも留めなかった。

「ちょっと、いきなりどうしたの?」

女が自分の後をついてきて、自分の腕に絡みついてくる。

思わず舌打ちしそうになった。

「ごめん、他に用事ができたんだ。また今度ね。」

苛立ちを押さええて冷静に別れを告げたが、女はなおも食い下がる。

「えー、なんでよ。そんなことよりあたしと遊ぼうよ!」

察しが悪いらしい。

これ以上付き纏うなら、どうなっても知らないぞ。

殺気を受けて女の方を見ると、女は息を飲んで後退り、逃げるように慌てて去って行った。

「ねえ、その女子校生!」

慌てて追いかけて、彼女の腕を掴んで再度声を掛けると、ようやく彼女は自分に気付いたのか、足を止めて自分を見た。

胡乱な表情を自分に向けてくれた。

その両目が赤く潤んでいるのに、気付いた。

やっとこちらを見てくれたことに安堵を覚えるが、彼女と目が合った次の瞬間、ぞっと背筋が寒くなった。

身体が強張り、動けなくなった。

何故、目の前にいるただの女子校生に、恐怖じみた感覚を持たなければならぬのか不思議だった。

しかし、その感覚は一瞬のことで、すぐに過ぎ去って平静に戻ることができた。

緊張が解けると、何事もなかったかのように自分はわざと人好きそうな笑みを浮かべた。

自分の笑顔が、女性にとってかなり魅力的であることを自覚していたからだ。

「こんな時間にこんなところを歩いていたら危ないよ?」

出来るだけ警戒されないように、優しい口調で彼女を気遣うように話しかけてみた。

「放っておいて。」

彼女は自分から目を逸らして、突き放すように呟いた。

彼女は腕を掴んでいた自分の手を振りほどいて、再び歩き始めた。よほど機嫌がよろしくなく、自分に声を掛けられて頬を赤らめないばかりか、見向きもしない。

目の前にいる彼女が去るのをこのまま見過ごせば、二度と会うこともないだろう。

そう思うと、何故か彼女を放っておけなくて、後をついてゆく。素気無く断られた場合、次の瞬間その女のことは頭から抜けて忘れ去るのがいつものことだった。

人外になってからというもの、女という存在は顔や体つきが変わるだけで、自分にとってはどれも同じようなものだったのに。

「ねえ、おうちの人は心配してないの?」

「帰るところないの?」

「ねえってば、聞いている?」

前を歩く彼女に話しかけても、何も反応はなく、無視される。そんなつれない彼女にめげずに自分は構い続けた。

しつこい位に話しかけていると、今まで彼女に見向きもしなかった周りの通行人も、制服姿の彼女に注目し始める。

「こんな時間に高校生がなんているんだ?」

そんな呟きが周りから聞こえてきた。

飲み屋や風俗店が立ち並んで営業している中で、まだ年若い彼女が制服を着て歩いていたら、補導してくださいと言っていているようなものだ。

ましてや、彼女に構い続けている自分はそれでも目立ちやすい。

自分の容姿は良くも悪くも人の気を引きやすかった。

多少強引な手段ではあったが、彼女の手を無理矢理取り、連れて歩いた。

「止めて。」

迷惑そうに彼女は言う。

その冷静で淡々とした口調に驚く。

もっと必死になって抵抗されると思ったから、意外だった。

「こんなところにそんな制服姿で歩いたら、捕まっちゃうよ？」

行くところがないなら、俺についてきなよ。悪いようにはしないから。」

彼女からの返事は無かった。

ただ無言で自分に素直に従って、一緒に歩いてくれた。会話も無く、ひたすら目的地を目指して歩き続けた。

自分たちは客待ちタクシーが並んだ通りに出た。列の先頭の車に近づくと、自動で後部座席のドアを開けてくれた。

「乗って。」

自分がそう彼女に言うと、一瞬躊躇したように見えたが、結局自分の言う通りに彼女はタクシーに乗ってくれた。

続いて自分も乗りこむ。

タクシーに行き先を大まかに伝えると、運転手は車を発進させた。

タクシーの中でも彼女は無言だった。

自分も彼女に合わせて無言を貫いた。

色々と言いたいことがあったが、タクシーの運転手に聞かれるのは避けたかった。

彼女は窓から風景を眺めていた。

目的地が近くなり、細かく順路の指示を伝える。

着いたのは、とあるスナックだった。

如月の回想 佳子との出会い 1 (後書き)

なかなかストックが溜まらないので、また一週間後くらいに更新予定です。

## 如月の回想 佳子との出会い 2

お店に入ると、カウンターにいた店のママがこちらを見て、自分に声をかけてくれた。

店の中には、何人かお客がいて、店の女の子が接客にあたっていた。にこにこ営業スマイルを浮かべていたママは、自分の後ろについてきている彼女を見て、驚いた顔をした。ママがカウンターから出てきて、自分に近づいてきた。

「ちょっと、ボス！」

何、高校生捕まえているの？」

小声でママが自分に話しかけてくる。

「あ、うん。ちょっと訳ありで。」

着替えか何かある？」

彼女に着せてあげて？」

「いいけど…。」

ママが躊躇いがちに答えると、すぐ側にいた彼女に視線を送った。自分も彼女の方を見て、口を開いた。

「というわけで悪いけど、夜遅くに制服姿は目立つから着替えてきてくれる？」

彼女は自分の制服姿を見下ろして何か察したのか、素直に頷いてくれた。



店のママは突然の成り行きにも関わらず、お店の女の子を呼んで対応させた。

彼女は従業員と一緒に店の奥へ連れていかれた。

残された自分は、ママによって空いている店の角のL字型ソファ―席へと案内されて、上着を脱いで腰を下ろした。その上着をママが受け取る。

「今日は何飲む？」

あの娘はジュースがいいのかな？」

「そうだね。俺はビールで。」

あ、でも、彼女は何か暖かい飲み物にして。任せるよ。」

彼女は外を彷徨い歩いていた。

彼女の手に触れた時に、冷え切っていたのを思い出したからだ。この寒い季節、どのくらい外にいたのだろう。

ママは「分かったわ。」と答え、上着を持って一度店の奥に行くと、手ぶらで戻って来てカウンターへ入って行った。

ママが飲み物をすぐに持って来てくれたので、一人で飲み始める。しばらくすると、店の奥へ行っていた彼女がお店の子と一緒に戻って来た。

彼女が着ているのは、衿元のレース状のフリルが可愛い軽い素材のワンピースだった。ウエストの高い部分でリボンを結んでいるため、細いくびれが更に強調される。フレアのスカートは膝上の短め、生足にサンダルを履いていた。若く滑らかで健康的な脚は非常に目の保養であった。

顔を見ると、化粧を施されているのか、ずいぶんと垢抜けて、先程

までとは全くイメージが異なり、大人びていた。

無造作に一つに束ねられていた髪は、アップにされて綺麗にまとめられていた。

女はよく化けると云うが、短時間で女子校生から夜の女へと変身したのには、正直驚いた。

ついまじまじと彼女を見つめ過ぎたせいか、彼女は居心地悪そうに立ち尽くしていた。

慌てて「座れば？」と勧めると、彼女は素直に従い、ソファアの端に腰かけた。

自分とは少し距離を置かれた。

どうして彼女をここまで連れて来てしまったのか分からなかった。

自分は彼女に対して何かしたいわけでもなく、ただ気になるという一点だけで、明確な目的も無かった。

横にいる彼女を盗み見ると、彼女は前の方に視線を彷徨わせていた。視線の先にはテーブルが置いてあるだけだ。

そのテーブルの上には自分が飲んでいるビールとつまみ、おしぼりが置いてある。

物憂げな表情の下で、何を考えているのか分からない。

側にいる自分に興味を示してもくれず、彼女の無関心さに漠然とした不安を感じる。

彼女は何も話さない。自分も同じように話さなかった。

ただ黙ってソファアに座っているだけだったので、先客たちの声がよくフロアに響いていた。

彼女との間に流れる沈黙に、居心地の悪さを感じた。

いつもなら当たり前のように出る女性に対しての褒め言葉を、お洒落に着飾った彼女に対して言っていなかったと、後になって気付いた。

ちょうどママが彼女の為にお茶を運んできてくれたので、彼女が「いただきます」と言って飲み始めた。それが話しかけるきっかけになりやすかった。

「その格好、似合うね。綺麗だよ。」

…無理矢理連れて来てなんだけど、おうちの人には心配してない？」

彼女はゆっくりとこちらに首を向ける。

「大丈夫。」

彼女が答えてくれて、会話が成り立ったことに、何故か安堵を覚える。

「それならいいけど。」

それにしても、どうして一人であんなところを歩いていたの？」

彼女はその質問には何も答えず、自分をしばらく見つめた。やがて、暗い表情で薄く笑った。その笑いに、また背筋がぞっとした。

「さつきから質問ばかり。」

聞こえてきた台詞は、自分の行動を揶揄するものだった。気分を害してしまったのかと、内心不安が走る。

何故、こんな小娘に気を遣うのか、自分の感情の変化が不思議だった。

「ごめんね。鬱陶しかった？」

「ううん。そうではないの。でも、いちいち質問に答えるのは、今は辛くて。」

彼女は首を横に振って答えてくれた。

持っていたお茶をテーブルの上に戻す。

今の彼女は会話をしたい気分で無いことが分かった。

それじゃあ、どうすれば間が持つのだと考えた時に、彼女が手を動かすのが目の端に入った。

良く見ると、彼女は右手を動かして目元を押さえていた。

彼女の頬に一筋の涙が流れていた。

声を殺して彼女は泣いていた。

鼻を吸る音が微かに聞こえる。

どうしようと焦った。

そして、焦る自分に驚く。

泣いている女がいたら、とりあえず肩に手を掛けて抱き寄せて優しく扱えば、それで良かった。

それで大抵の女は、安心して自分に身を寄せてきて、良い雰囲気の流れ込んでいた。

すでにパターン化した行動にも関わらず、それを実行するのに躊躇う自分。

今の彼女の気配には、自分を気安く近づけさせない何かがあった。

肩に手を伸ばして抱き寄せようなどと、恐れ多い気がした。

今日の出来事を振り返って、彼女と会ってからの自分は、はっきり言って奇怪しい。

彼女に対してどう接するのが一番よいのか分からなくて、泣いている側で、情けなく自分はただ座っているだけだった。

どのくらい時間が経ったのだろうか。  
気付いたら、彼女は自分で涙を止めていた。

「えーと、ごめんなさい。」

彼女が突然謝って来た。

「どうして謝るの？」

「突然泣きだしたから、困ったかなと思って。」

彼女は答えながら、テーブルの上にあるおしぼりで目元の涙を拭いていた。

確かに対処には困ったが、会った時に目が赤かったので、泣きたいほどの理由を既に抱えていたのは分かっていた。

だから、彼女が泣くことについては特に問題を感じていなかった。

「泣いて気持ちが落ち着いたんなら、それでいいんだけど。」

「うん。」

自分を見る彼女の表情が少し柔らかくなっているのに気付いた。  
彼女と目が合う。

自分は彼女を安心させるために笑みを浮かべた。

そんな自分を彼女は凝視している。何か自分を見定めているような目つきだった。

そんな彼女の様子が気になり、どうしたのか尋ねようとしたら、彼女の方が先に口を開いた。

「貴方、人ではないのね。」

はつきりと言いきられた。  
確かに自分は人外の者だ。

しかし、普通の人間には見えない曖昧な存在の妖怪たちと比べて、自分は普通に人目に触れるし、人間と紛れて暮らし、人間のように振舞っている。

自分から暴露するまで気付かないか、よほど能力が高い者でもない  
と見破られたことがなかった。

「よく、分かったね。」

内心の動揺は隠して、答えた。

彼女はきつと恐ろしいほど能力が秀でている。

「人間ではないけど、お前をどうしようと思っただけ連れてきたわけじゃないよ。」

「そうみたいね。」

ある程度は信用されてきているらしい。

「何か辛いこともあったの？」

「良ければ力になるけど…。」

口にしてから自分が言った言葉に驚いた。

力になるって、彼女に協力して自分に何の得があると云うのだ。

ただ夜中に歩いていた女子高生が気になって声を掛けてみただけなのに、ここまで首を突っ込む必要があるのか。

しかし、彼女の顔が再び暗くなってしまったのを見た時、感情がざ

わめいた。

彼女は下唇をきつく噛んで、何か辛い感情を堪えているようだった。また泣きだしてしまうのではないかと思った。

「悪かった。嫌なら答えなくていいよ…。」

思わず謝ると、彼女は首を横に振った。

「いいの。いきなり泣いてしまって、貴方が気になるのも無理はないと思うし。」

「最近ね、父を亡くしたのよ。」

家族が亡くなれば、悲しいのは当たり前だ。

人間だった時から理解している感情。

それで彼女が泣いていたのかと、納得した。

しかし、どうしてあんな遅い時間に一人で歩いていたのだろうか。

何か他に事情があるように思えた。

「車の事故だね。…数日前のことよ。」

彼女は再び鼻を睨った。

「父の車が崖から転落して、乗ったまま車が燃えてしまったみたいで、」

彼女は言葉を紡ぐように、必死に語ってくれた。

「誰とも分からないような姿になってしまったわ。」

自分は彼女の話に頷く。

自分はあえて何も話さず、彼女が気持ちを整理して言葉にするのを待った。

「急に父が亡くなって、悲しくて、幽霊の姿でもいいから一目会いたくて、父が亡くなった現場へ行って見たの。」

自分の本性を見抜いた彼女のことだから、幽霊を見るのは当たり前のことだろう。

彼女は只者ではない。自分がこんなに調子を狂わされるのは、恐らく彼女のせいだ。

「探してみたけど、…父にとうとう会えなくて。」

諦めて帰ろうとした時に、そこで妖怪に出会ったの。」

妖怪か。

人間には警戒して通常ならば目にすることは少ない。

自分から姿を現す妖怪を珍しいと思った。

「その妖怪は、何て言ったと思う?。」

彼女は自分を覗き込む。

彼女の瞳に自分が映っているのが見えた。

彼女の質問の答えを、全く想像ができなかった自分は、黙ったまま首を横に傾けた。

それを見て、彼女は口を開く。

「それは、父が殺されるのを見たって言ったのよ…。」

彼女は絞り出すように言った。



彼女の父が殺された。  
その事実にも、彼女がさらに苦しめられているのだと知った。

如月の回想 佳子との出会い 2 (後書き)

読んでくださりありがとうございます。

毎日は無理ですが、なるべく早い更新を目指したいです。

## 忘れ物

如月に起こされて、自分がいつの間にか気持ちよく寝てしまっていたことに気付いた。

「もうすぐ着くよ」と彼に言われて、現在どこにいるのか、自分の脇の後部座席のドアの窓から確認する。

水滴で濡れた窓で、雨が降っていることに気付く。

暗い空から次から次へと雨が降り注ぎ、視界がぼやけて見える。

目を凝らすと、見慣れた山道や街路灯が目についた。

自分が住む屋敷へと続く、舗装されていない砂利の坂道を、ゆっくりとヘッドライトを点けた車が上っていた。

「寝かせてくれてありがとう。」

深く座席に腰掛けた状態だったので、体を動かして佇まいを直す。そして、如月が着ていたはずの上着が自分の体に掛かっているのに気付いた。

全く肌寒く感じなかったのは、これのお陰だったのか。

「上着もありがとうね。」

でも、如月が優しすぎて恐いんだけど。」

そう言いながら、佳子は上着を如月に返した。

「俺の優しさは一応プライスレスだよ？」

面白そうに目を細めて如月は笑う。

「もし後で請求来ても踏み倒すわよ。うち貧乏だし。」

「請求するつもりもないけどさ。」

それに、お金が無いなら、俺に対してなら体で払ってくれてもいいんだよ?」

「痩せているから食べても美味しくないわよ。」

佳子は目つきを剣呑にして如月を睨みつけた。

佳子たちが乗った車は、屋敷の前まで辿りついた。

玄関前の広い庭の空間に駐車する。

降りようとしたが、外は雨だったため、家へすぐに入るために、事前に鍵を取り出そうと、自分のバッグを探した。

そこで、バッグがないことに気付いた。

佳子は青ざめた。

最後にバッグを見たのは、どこだったか。

佳子の頭の中で、急いで今までの行動が逆再生される。

如月に連れ去られた時は、すでに手ぶらだった。

高志の時も、手ぶらだった。

レストランに移動して、席についた時に、空いている席にバッグと上着を置いたのを覚えている。

もしかして、両方ともレストランに忘れてきた?

シヨックで言葉も出ない。

バッグの中には財布が入っており、その中には大事なお金と、銀行のキャッシュカードが入っている。

しかも、バッグは亡き父が誕生日にくれた、自分にとっては父から貰った最期の贈り物だった。

上着も他所行き用に購入して、結構いい値段がしたものだった。

「どうしたの?」

動きが止まった佳子に如月が怪訝な表情で尋ねてきた。

「如月…、どうしよう。」

ホテルのレストランにバッグと上着を忘れてきたみたい。」

佳子は今にも泣きそうだった。

如月はズボンのポケットから携帯電話を取り出すと、どこかにダイヤルする。

「もしもし。1階にあるレストランにつないで欲しいんですけど。」

…あ、すみません。今日、2時頃にそちらに来た一上佳子と云う者がバッグと上着を忘れたみたいなんですけど、そちらで預かっていますか？ え、無い？ 連れが持つて行った？ あ、そうですね、ありがとうございます。」

如月は電話を操作して、会話を終了した。

どうやら、今日佳子が行ったホテルのレストランに電話をかけて問い合わせてくれたようだ。

しかも、会話の内容から誰かが持つて行ったらしい。

連れというと、春人だと考えられるが、本当に彼なのだろうか。もしかしたら、高志ということも考えられる。

どちらが持つて行ったにせよ、どうやって返してもらおうか。

ホテルにある方が、心理的に取りに行きやすかった。

彼らには顔を合わせづらい。

「聞いていて分かったと思うけど、ホテルのレストランには無いみたいだよ？」

「うん、訊いてくれてありがとう。」

後は自分で探してみる。」

「ごめん、俺も荷物まで気が回らなくて。」

「うん。私もすっかり忘れていたから、どうしようもないわ。送ってくれてありがとう。またね。」

「うん、またね。」

佳子が後部座席のドアを開けて、車から降りる。

暖かくエアコンの効いた車内から風雨が吹きつける外に出て、思わず佳子は身震いした。

雨脚は強く、あっという間に佳子の体が濡れる。

急いで玄関の軒下に走った。

玄関の引き戸を叩いて、「佳子よ。開けて。」というと、戸にある曇ガラスから黒い影が動くのが見えた。

そして、ガチャガチャと鍵を操作する音が聞こえて、戸が自動的に少し開いた。

そうしている間にも、如月たちが乗った車は車体の向きを転換させて帰って行った。

一人残された佳子は引き戸を自分が通れるように開けると、中に入っ

て行った。土間に入って玄関の電気を点けると、あちこちに散らばっていた小さい黒い影たちが一目散に物陰に隠れていった。

「ただいま。」

中に声を掛けると、屋敷の奥から「おかえりなさいませ〜」と声が複数した。姿は見えない。

今日はシロに夕飯を頼んでいなかった。お見合いがどのくらい長引くか、先が見えなかったからだ。

結局、蓋を開いてみれば、お見合い開始直後に連れ去られて、ほとんどホテルにいなかったのが現状だった。

春人と少ししか話せず、彼が車の免許を夏休みに取得したばかりで、運転が割と好きだと云うことしか知りえなかった。

10分も話していただろうか？

本当にただ単に行って帰ってきただけだ。しかも大事なものを忘れてくると云う始末。

お見合いなど、今後どこにも申し込みたくない。

自分が失ったものを思うと、高すぎる勉強代だと感じた。

靴を脱いで居間へ行くと、電話器の留守電ボタンが点滅していた。

自分の外出中にどこからか電話が掛かって来たらしい。

電話器を操作して、着信情報を確認する。

佳子の家の電話はナンバーディスプレイの契約をしていたため、相手の電話番号が分かるのだ。

使いなれてしまうと便利な機能なので、月々の使用料をケチって解約はしていなかった。

着信件数は二件、最初の一件は母の実家からで、もう一つは公衆電話からだった。

電話器に残されたメッセージを再生する。

「メッセージは二件です。」

続いて、日付と時間を機械が述べる。

「私です。帰ったら電話を頂戴。」

母の声だった。

今日のお見合いについて何か言いたいのだろう。  
どうせ佳子にとってはロクでもないことしか言われない。無視する  
ことにした。

次のメッセージが残された日付と時間が聞こえてくる。

「五月です。」

聞こえてきた声に、心臓が止まりそうになった。  
春人の声だった。

「佳子さん、ご無事ですか？」

佳子さんのバッグと上着をこちらで預かっています。今晚よろし  
ければご連絡ください。

電話番号は、 - - です。」

落ち着いた声のトーンだった。

そこから彼の感情を読みとることは難しかった。  
今日のことを怒っているのか、それとも心配してくれているのか。

佳子はメモ帳とボールペンを手に取った。

もう一度メッセージを再生して、春人が話す電話番号を紙に記入す  
る。

もともと、謝罪はするつもりではあった。

時間と経費を佳子の都合でかけさせてしまった拳句に、途中で佳子  
本人がいなくなってしまうのだから。

既に迷惑をかけているのにも関わらず、春人が保管している忘れ物  
を返してもらえるように、厚かましくもお願ひしなければならぬ。  
春人は佳子のために、これ以上何かしら手間を掛けてくれるのだろ



うか。

気まずい相手をお願いするのは、大変気が重い。

上着は何とか諦められても、思い出のバッグとその中身は取り返したかった。

背に腹はかえられない。土下座覚悟で（電話だから見えないが）誠心誠意謝ろう。

佳子は自分の迂闊さをこの時ばかりは恨めしく思った。

## 如月の執着

「お前はあの女をどう思う？」

佳子を家まで送り届けた後、彼女がいなくなった車内で、如月は運転手に話しかけていた。

運転手は如月の部下で加藤かとうという名前であった。

彼がまだ子供である頃から如月は知っていた。加藤の父もまた如月に仕えていた。

「どうと言われましても…。」

真面目そうなお嬢さんですね。」

加藤の無難な返答を聞いて、如月は苦笑した。

彼女の野暮ったい眼鏡からそんな印象を持ったのだろう。

「でも、その…。」

「でも、なんだい？」

「ボスの相手には役不足な気がしますが…。」

「そうかい？」

気に入った女をそのように評価されても如月は気にしてなかった。

彼女の外観だけで構っているわけではなかったからだ。

如月は微笑みながら、バックミラー越しに加藤を見た。

あたりは暗くなっていたので、昼間はあったサングラスが顔からなくなっていた。

人間である加藤に、自分と同じように彼女の特異性を感じることが出来るのか、試して感想を聞いただけだった。やはり普通の人間には、彼女の価値は分からないようだ。

「彼女は俺が人間じゃないって、気付いたんだよ。」

「へえ、そうなんですか！」

意外に普通の子っぱいのに、あの子はそっち系の人だったんですね。」

能力者たちの多くは、一般人と比べて独特の個性を持っていることが多い。

特に能力が桁外れの場合、その力に振り回されたり、溺れたりすることが多いため、人格にまで影響が出て歪んでしまった人間を如月は何人も見た。

しかし、彼女の場合は、そう言った側面が全く見えなかった。

加藤の言わんとしていることが、如月には良く分かった。

そもそも彼女自身、一族に伝わる能力をあまり使わない。女は外では働かせないという一上家の慣わしがあるらしく、基本的な力の使い方は親から習ったものの、実地に出ることはなかったため、経験を磨く機会が乏しかったらしい。

ただ、日常的に妖怪の類が彼女を慕って集まってくるため、そういうったモノたちへの扱い方には長けていた。

鬼となった自分や、妖怪と呼ばれる人外存在に対して、彼女が持つ何かが作用するらしい。

酷く己を惹きつけてならない、不思議な何か。

意識して妖怪と仲良くなりたいと考えているわけでもないのに、向こうからいつも彼女に近づいてくるらしい。

自分も彼女にしつこく付き纏ってしまったのを考えると、彼女の気を引こうと、妖怪たちからいつもあんな目に遭っているのだろう。

それにしても、一人の人間に執着するのは、人外になって初めてだった。

彼女がいるだけで、心が高揚する。

真つ黒な胸の中に、滲むように明かりを灯してくれた。

光を求めて集まる夜の蝶のように、彼女を追い求め、その気持ちは段々と膨れ上がっていった。

貪欲な欲望を満たすために、自分は動いた。

まず、彼女とは友達みたいな関係を築くことに成功した。

浅ましい下心を時折隠すのに失敗しながらも、冗談を交えつつ誤魔化し、警戒をされない範囲で接しているうちに、彼女の安全圏内に入り込んでいった。

彼女の信頼を裏切らないようにし、助力を尽くしてきた賜物だ。

暗がりにも身を置いた自分と、普通に暮らす彼女とでは、酷く立場がかけ離れているし、一上の一族として彼女自身を縛っているものはとても多すぎる。

それに、彼女の心の隅には、亡くなった父親が常にいる。

父親を残酷な目に遭わせた者たちに対する怒りが、彼女を復讐へと駆り立てている。

それがある限り、他のことで気持ちを占める余裕はないはずだ。

今のままでは決して手に入らないから、彼女が復讐を望んだ時に、迷わず手を貸すことを決めた。

自分と同じように、数多の屍を築けばいい。

報復という名の殺戮で、彼女の両手が血に染まった時に、今までの居場所に決して戻ることが出来なくなる。

彼女は全ての柵しがらみから解放されるのだ。

その時に彼女を導けばよいのだ。  
自分のもとへ。

ああ、その時が待ち遠しい。  
それまでは、彼女に余計な虫がつかないように、せいぜい気を付けるようにしよう。

その気もないのに、男を家に泊めようとするなど、彼女は抜けていくところがあるから危険だ。

泊るかと誘われた時は、嬉しすぎて思わず顔がにやけてしまったが、念のために確認したら、やはり彼女は自分とは寢床を共にするつもりがないようだった。

まだ手を出さず段階ではないので、惜しみつつも辞退したが、彼女に忠告をしっかりとしておいた。

脳裏に浮かんだのは、今日の彼女の見合い相手。

見た目は良かったが、自分によって簡単に女を奪われる男である。

所詮、自分にとっては取るに足らない存在だ。

彼女に去られて道端で所在なげに立ち尽していた彼を、内心嘲った。

残された口実（前書き）

春人視点です。

## 残された口実

佳子が黒い車でホテルから連れ去られてしまった後、春人はホテルのレストランへ戻るべく踵を返した。

車の中から佳子の「大丈夫」という声が聞こえたので、最終的に強引な救出は控えたのだが、その判断は正しかったのか不安が残った。一般人が多くいる中で、自分の特異な能力を使えば、秘匿の錠を破ってしまうことになる。

連れ去られた佳子自身、能力を使用しているようには見えなかった。ので、彼女の身に危険はなかったと推測できるのだが、突然のことで正しく状況を把握できていたのか、分からなかった。

最初に現れた一上高志は同じ里の人間なのでよく知っていたが、最後に現れた男は誰なのだろうか。

佳子とどのような関係なのか情報が全くなかった。ので、何とも言えない。

レストランの前には、まだ高志が立っていた。

春人が近づくと、例の男に殴られた頬を痛そうにさすっていた。

「お互い、いい面の皮だな。」

高志が自嘲気味に言った。

どういう意味か図りかねていると、春人の沈黙を肯定と受け取ったのか、高志は続けて語りだす。

「おおよそ、あつちの男が本命だったんだな。

お前に負けないくらい顔の良い男だったぞ。

結局、お前はあて馬程度の存在だったんだ。まともにあいつの相手をして馬鹿を見たな。

全く、今回のお見合いと云い、家出と云い、あいつは人騒がせな女だな…。」

「家出？」

高志の言葉が引つ掛かり、春人が口になると、高志はしまったと言わんばかりの気まずい表情を見せた。

高志は感情が顔に出やすいようだ。

「こつちのことだ。なんでもない。

じゃあな。」

高志は追及を逃れるように、春人に背を向けてさっさと出入り口に向けて歩き出した。

もつと詰られると思っていたが、意外ほど呆気なく高志は去って行った。

最終的に佳子が別の男と消えて、春人は面目丸つぶれとなったし、高志自身は嫌味をすつきり吐き出して気が済んだのもあったかもしれない。

“ あつちの男が本命 ”

先程、高志の言った言葉が胸に刺さっていた。

佳子を最終的に連れ去った男の顔を春人は目撃していなかった。

高志が殴られた際に、彼が自在に操っていた妖怪の術が解けたらしく、春人は妖怪から解放されたが、すぐに佳子たちの後を追おうとしたところで、「すいません、お会計を！」と男性のスタッフに止められて足止めを食った。

財布から一万円札を取り出して、レジのカウンターに置いて釣りを貰わずに、急いでレストランを出たら、目の前で高志が床に座り込



んでいたのに驚いた。

慌てて周囲を見回すと、佳子が男に引つ張られてホテルから出てゆく後ろ姿を発見した。

周りの目を気にして普通に走って追いかけたが、結局間に合わなくて、速度を上げて彼らが乗った車は去ってしまった。

一瞬車体の横側に並んだ時に、後部座席を覗いたが、窓にスモークフィルムが貼られていて中の様子を確認できなかった。

色々と気持ちの整理がつかなくて、しばらく呆然とレストランの前に立っていたら、さつき春人を呼びとめたスタッフが中から出てきた。

「すみません、先程のお釣りなんですけど…。」

恐縮しながら、春人にレシートとお金を渡してきた。

この会計のやり取りがなければ、佳子たちに追いつくことが出来たかもしれないのに。

思わず眉間に皺が寄った。

「あ、あとですね、お連れ様の忘れ物がございまして…。」

春人の不機嫌な顔に気付いたのか、強張った笑みを浮かべながら、スタッフは女物の上着とバッグを春人の前に差し出した。

「これらは、いかがいたしましたでしょうか？」

「こちらで預かった方がよろしいですか？」

春人はそれらの物が佳子の物であることを思い出した。

彼女は隣の空いている席の上に、荷物を置いていた。

「いえ、私が彼女に返しておきますので。」

そう言って、春人は荷物を受け取った。

これを返すのを口実に、再び彼女と接触を図ればよい。  
春人は、そう考えた。

## 報告の電話

五月慶三郎さつきけいざぶろうは、自宅の一階の居間にいた。

本日は日曜日だったため、営んでいる道場は休みだった。特に急ぎの仕事もなかったため、久しぶりに家の中で家族と寛いでいた。

浴衣姿の慶三郎はソファの上に座り、その膝の上には一人娘なの陽菜ひが座っている

娘は1歳とまだ小さく、音の鳴る玩具を両手で持って、夢中になっ  
て遊んでいた。

可愛い盛りで、何をしていても見えていて微笑ましかった。

時計を見ると、2時半ば頃だった。例のお見合いは2時の予定で、  
今頃二人で会っているはずである。

性格にかなり癖のある義弟のことだったから、佳子と巧く会話をし  
ているかどうか気がかりだった。

そんな時に居間にあった電話が鳴りだした。

誰だろうと思ひ、陽菜をソファの空いているところに座らせて、  
受話器を取りに行った。

「もしもし、五月ですが。」

『あ、義兄さんですか？ 春人です。』

「春人か？」

「お前、お見合いはどうしたんだ？」

まだ三十分くらいしか経っていないのに、家に電話を掛けてくると  
はどういうことだ。

『それが、佳子さんが連れ去られてしまいました…。』

「連れ去られた？ 一体誰に？」

『分かりません。』

別々に二人の男が現れまして、一人目は一上高志だったのですが、二人目は顔を確認できませんでした。しかし、一上も知らない人物だったようなので、里の者ではないようです。その人に佳子さんを連れ去られました。』

その後、春人から更に詳しい状況を聞きだした。

一上佳子が抵抗をしなかった状況を聞くと、その男に連れ去られても、彼女に危険はなさそうだった。

その男と彼女の関係が気になるところだったが、ここで話しても推測にしかない。

「お前たちを出し抜いて、連れ去るとはその男も結構やるな。」

『はい。』

「ちなみにその男の車のナンバーは覚えているか？」

『はい、ナンバーは記憶しております。』

「じゃあ、ちょっと教えてくれ。所有者を確認してみる。」

春人から車の車体ナンバーを聞きだして、電話器の側にあったメモ帳に記した。

『とりあえず、これから戻ります。』

「ああ、気をつけるよ。」

電話での会話が終わり、受話器を本体に戻した。

その時、台所から妻の夕輝ゆづが家事を終えて、居間へと入って来た。出会った頃から変わらぬ美しさを備えた自慢の愛妻。

子供を産んでから、ますます女性らしい官能的な曲線を描いた体つきとなり、他愛もない仕草に色情をそそられる。

付き合ってから何年も経っているのに、自分を虜にして離さない。

今日は同居している親父おやじが、趣味の囲碁仲間の所へ出かけていて留守にしている。

娘の陽菜もそろそろお昼寝の時間だ。

さて、どうしようかな？

「春人のお見合いが終わって、これから帰ると連絡があつた。」

とりあえず、慶三郎は家族である春人の状況を夕輝に教えた。

夕輝は慶三郎の言葉を受けて、壁に掛けてあつた時計を確認した。

「もう終わったんですか？ 早いですね。」

夕輝は返事をしながら、足元までやってきた陽菜を抱きあげた。

「妨害があつたようだ。」

「里中に今回のお見合いの噂が広まっていましたしね。一上家の耳にも、もちろん入つたんでしょう。」

夕輝は一上家から妨害を受けてお見合いが中断されたと思っているようだ。

慶三郎が春人から聞いた話を夕輝にも伝えたと、ポーカーフェイスが常の妻にしては珍しく、考え込むように眉間に皺を寄せた。

「彼女とお付き合いのあった男性でしょうか。」

「どうだろうね。情報が無さ過ぎるから何とも。しかし、一上家の当主はどうも身边が賑やかだね。」

「そうですね。」

ふと陽菜を見ると、眠そうに大きな欠伸をしていた。

「そろそろお昼寝の時間かな？」

母親に甘えているのか、陽菜は顔を夕輝の体に押しつけていた。

「寝かしつけてきます。」

夕輝は陽菜を抱えたまま、居間の隣にある仏間に向かって歩いて行った。

慶三郎たち親子は、夜は自室の二階で就寝しているが、娘のお昼寝の時は仏間に長座布団を敷いて寝かせていた。一階だと目が届きやすいからだ。

「蒔いた餌に食らいついたか…。」

慶三郎は腕を組み、独り言を呟いた。

今回のお見合いの話を里の人間に話して噂を広めたのは意図的だった。

一上の本家と分家の本心を探るためだ。

一上当主としての佳子と顔を合わせたのは、今年の夏のことだった。

盆祭りの前に寄り合いがあり、そこでお目に掛かった。

彼女が当主に就任してから3年近く経ってからだった。

分家の主である一上元はじめに従うように現れた彼女。

病気の療養のために里へ顔出しが出来なかったと言っていた。先代が事故で亡くなり、しかも継いだばかりの娘は、病に倒れ、よくも不幸が続いたものだ。

地味な眼鏡をかけて、真面目そうでおとなしそうな印象の若い女性だった。

21歳だと聞いていたが、童顔なのか、それよりも若く見え、成人しているように思えなかった。

大きな声で偉そうに話す一上元の脇に、言葉少なに座っていた彼女は、華奢で気が弱そうな上に、分家に柔順そうだったので、あまり良い印象を持てなかった。

盆祭りの後、一か月くらい経った頃に、二木喜美子ふたつき きみこが仲介人として今回のお見合いの話を持ってきた。

正直驚いた。

喜美子の末妹の美智子は、一上の本家に仕える坂井正の嫁だ。

佳子本人に頼まれたと、喜美子自身が釣書とお見合い写真を持ってきた。

二木家は女系家族だったため、長女の喜美子が婿養子に今の旦那を迎えていた。

当主として集まりなどに喜美子は出席していたので、自分とは顔をよく合わせていた。

恰幅が良くて美人ではないが、笑顔の絶えない愛嬌のある顔つきをしている。明るく気さくな彼女は、険悪な雰囲気になりやすい集会でも、よく場を和ませてくれたり、宥めてくれたりと、大変ありがたい存在であった。

「一上家は親族としか結婚しないんじゃないですか？」

里の中で有名な話だったので、思わず尋ねると、喜美子は意味深な含みのある笑みを浮かべた。

「佳子さんは、分家とは結婚する気がないようですよ。」

奉納試合で優勝した五月家の息子さんが気に入ったみたいで。」

ああ、要するに春人の顔に一目ぼれしたわけだ。

慶三郎は全てを理解した。

春人の為に、一族の慣わしを蹴つ飛ばそうとしている彼女に少し好感を持った。

しかし、一上家と云うだけで胡散臭さがプンプンする。

そもそも、おとなしそうな彼女に分家に逆らうなどと恐れ多いことが出来るのだろうか。

一上の分家には嫌な思いを散々させられていたため、今回も揉め事になる前にさっさとお断りしても良さそうだったが、少し考えるところがあり、意見を改めた。

「ちょっと、本人にも確認したいので、お返事は待ってください。」

「おほほ、色よい返事を期待していますわ。」

佳子さんは、妹の美智子みちこの話ですと、亡くなった父親に似て温厚で優しい方だとお聞きしております。



お会いになるだけでも結構ですよ。よろしくお願いしますね。」  
裏を返せば、分家出身の母親の方は、温厚で優しくはないらしい。  
含んだ物言いに、苦笑してしまいそうになるのを堪えた。  
喜美子はよほど今回のお見合いを応援したいのか、話している最中  
は始終上機嫌で、佳子本人をお勧めしていた。

一上の分家は山代の里の中でも裕福で羽振りの良いことで知られて  
いた。

投資や商売がうまくいっているという話だが、妬みからか、あまり  
良くない噂もされている家である。

五月家に密告のように封書が届いたことさえあった。

大きい屋敷の切り盛りは全て一族だけで行い、他所の人間を決して  
雇い入れない。

屋敷は高い塀で覆われていて、外からは中の様子は伺い見ることは  
できない。さらに、その内部は警備として術により操られた妖怪  
つまり使鬼たちが多く配置されていて、不法な侵入を固く拒んでい  
る。

親族間で婚姻を繰り返し、決して内情を公にしない閉鎖的なやり方  
は、その噂に真実味を密かに与えていた。

その分家の子飼いの犬と化していた本家。

本家は分家の支配に完全に置かれていた。

山代の里とのやり取りもほとんど分家を通して行われているし、当  
主が出席する集まりにも、当主代理として分家の主が顔を出してい  
た。

その本家の人間が、何の脈絡も無しに五月家つちにお見合いを申し込む  
のは、分家の指図である可能性もあった。

どんな思惑にせよ、一上家によって弄ばれるのは御免である。

それにも関わらず、お見合いを一蹴しなかったのは、一上家に探り

を入れる絶好の機会だったからだ。

強固な城郭に、侵入の糸口を見つけた気がした。

お見合いの顔合わせだけで、結婚しなくてはならない道理はない。面倒なことになる前に断れと親父に言われたが、自分の考えを伝えるとき、“それで一上家の弱みを見つけられるのならば”と、了承してくれた。

とりあえず、喜美子に会ってみたいと返事をした。

お見合いの情報を噂として流して、当日に分家がどのような動きを見せるのか、調べることにした。

お見合いを申し込まれた春人に、諜報員としての役割を与えて、佳子の真意を訊き出すように指示を出した。

向こうが本気だった場合を考慮して、相手に期待させるようなことは口にするなと念を押しておいた。

外面の派手さとは裏腹に、春人は他人に関心が薄く、寡黙で一人であるのを好むタイプだったため、諜報員としては向いていなかったが、修行と思つて今回は送りだした。

別に失敗を許されない任務ではないし、情報を得られれば運がよいと考えていた。

意外にも、本人は今回の仕事に対してやる気で、“お見合い結婚のススメ”、“お見合い完全マニュアル”というタイトルの本を、部屋で真剣に読んでいる姿を見かけた。

その場から移動して声を殺して笑っていたら、通りがかつた妻に不思議な顔をされた。

春人は養子として受け入れられた五月家に対して、恩義を感じているのか、親父や自分から言いつけられたことを完璧にこなそうとするところがあった。そのせいか、今回の仕事も自分に足りないところを補おうと、方向性は若干間違っている気がするが、勉強しよう

としていたようだ。

他人に興味を示さなかった春人に、人付き合いに対して関心の目を向けさせることができて、義弟にとって良い方向に進んでいると思うと、少し嬉しかった。

これを機に人との接点を増やして、もっと多くの人と親しい人間関係を築いて欲しい。

お見合いに乱入してきた高志と佳子の会話から、本家と分家の対立関係が読めた。

一族の定め通り、結婚話を進める分家と、それに逆らう本家の佳子。彼女は本気で春人との結婚を望んでいるのだろうか。

それにしても、最後にやってきた謎の男のせいで、状況が読みにくい。

五月家はもとの血筋は絶えた家系だった。

跡を継がせるために、全く異なる血筋から後継者を選んだ。

それが親父だった。

自分にとっては祖父にあたる人は、他所から来た才能ある親父を養子にしたのだ。

ちなみに五月家の中で養子をとったのは、親父が初めてのことでない。それでも里以外の出身の者を迎え入れたのは初めてのことであった。

代々血統が続く一上家にとっては、それが面白くないらしい。

ことあるごとに他所者呼ばわりして、里の運営に当主として顔を出していた親父を見下していた。

親父の一上家に対する嫌悪感は、隠居後でも凄まじい。

親との関係が拗れた春人を五月家に養子として迎え入れた時も、“他所者が”と嫌味を言われていたのを思い出す。

慶三郎は三男であるにも関わらず、当主として据えられたのは、上の二人の兄の能力が、いまいちだったからだ。

遺伝する確率は高いが、親がそうならば、必ずしも子にも伝わるものではない。

五月家が絶えたのも、そういう事情があつてのことだつた。

それにも関わらず、一上家が長きに渡つて血と能力を維持しているのは、相当な尽力や犠牲を要しただろう。だが、それが五月家うちを貶めてよい理由にはならない。

奉納試合でも決勝戦前に、祭りの関係者を装つた男に騙されて春人が納屋に閉じ込められるという妨害があつた。顔を隠した親切な人に助けられて、幸いにも不戦敗にならずに済んだらしいが、これも一上家の嫌がらせに違いなかつた。

決勝戦の対戦相手は一上高志。一上家の人間だ。

今回のお見合いの件と云い、よほど妨害が好きなようだ。

佳子が忘れ物をしたので、夜にでも連絡をしてくれるように電話の留守番にメッセージを残したと春人は言っていた。

一上家の内情を探ってもらつたために、春人にまた頑張ってもらわなくてはならない。

慶三郎が一上家に探りを入れようと決めたきつかけは、一通の手紙だつた。

一上家の先代当主が亡くなって数日後に、五月家に封書が届いていた。

差出人がないため、用心しながら封を開けると、次のことが書かれていた。

“一上家は一の掟を破っている。一上健一”

けんいち

掟とは、里で順守しなければならぬ決まりごとだ。

いくつもあるが、その一つ目に“暗殺を生業としないこと”とある。それを破っているということは、一上家は密かに暗殺を請け負っているということとなる。

そして、一上健一とは亡くなった先代当主の名前だった。

何故うちにそのような手紙が届いたのか。

一上家に噂される一つに、そのようなことが無いわけではなかった。真実はどうであれ、故人の名前を使うとは、悪戯にしては非常に性質が悪いものであった。

だから、3年近く経った今でも、その手紙のことを覚えていた。

その一上健一の一人娘の、分家への突然の反旗。

そして、今回のお見合い話。

何やら不穏な気配がするのは気のせいだろうか。

## 報告の電話（後書き）

おまけ（R15）

慶三郎が物思いに耽っていると、娘の陽菜を寝かしつけた夕輝が居間へと戻って来て、ソファーにいた自分の隣に座った。

「これから買い出しに行くんですけど、今日の夕飯に食べたいものはありますか？」

いつも通りの無表情だったが、こちらに向ける眼差しは柔らかい。炊事は夕輝と春人で分担していたが、今日は義弟が外出していたので、妻が作る予定だった。

手を伸ばせば簡単に届く距離に最愛の妻がいて、隣に娘が寝ているとはいえ、この部屋には現在二人きりである。

「夕輝が食べたい。」

「え？」

夕輝を抱き寄せて、口付けた。

最初は唇を味わうように感触を存分に楽しむ。そして、調子に乗って舌を使って彼女の唼内を弄ぶと、彼女が抵抗して体を離そうとするので、そのまま体重をかけてソファーに押し倒して、上着の中に手を入れた。

「ああ、んあ、やっ…!」

夕輝の口から甘い吐息と共に、微かに抵抗する声が漏れた。

様子を見るために顔を彼女から離すと、夕輝は顔を少し赤くしながら潤んだ目で、慶三郎を見ていた。

戸惑いを含んだそれは、慶三郎の眼には可愛い以外の何ものでもない姿に映る。彼をますます煽っているとも知らずに、彼女は何とか彼の腕の中から逃げようとしていた。

「昼間っから襲わないでください、慶三郎様。お父様が帰ってきたらどうするんですか。」

「親父なら、まだまだ帰って来ないよ。」

「でも、誰かやってきたら…。」

「夕輝。」

強く口調で彼女を遮ると、夕輝は口を噤んだ。

「この3日間、陽菜を寝かしつけて、そのまま寝てしまったのは誰かな？」

夕輝の目が泳いだ。

「わ、私です…。」

「三日間、お預けを食らった旦那様が可哀想だと思わないかい？」

言いながら、夕輝の体に猛った己の分身を押し付けた。

その存在を感じたのか、夕輝は下半身を自分から逃げるように動かそうとした。

「も、申し訳ございません…。」

「ここが嫌なら、二階でもいいけど。」

「…はい。」

これまでの経験からか、夕輝はさして反論せずに慶三郎の提案に従って、二階へと移動を始めた。

その後、二階の自室で、愛妻を美味しく頂いたのは言うまでもない。夕輝はふらふらになりながらも、夕飯の買い出しに行こうとしたので、少し責任を感じて一緒に出かけることにした。

お昼寝から目覚めた陽菜を慶三郎が抱っこして、仲良く家族三人で家を出た。



## 謝罪の電話

佳子は時計を見た。

ちょうど夜の八時。

春人から教えられた電話番号は、市外局番が母の実家と同じだった。つまり、山代の里にある彼の自宅の電話番号を覚えてくれたのだ。お見合いをしたホテルから、あのまま帰ったとすれば、もうとつくに着いていておかしくない時間である。

緊張しながらダイヤルすると、呼び出し音が受話器から聞こえた。

『もしもし、五月です。』

落ち着いた若い女の人の声がした。  
誰だろう。

「夜分にすいません。一上佳子と申しますが、春人さんはいらっしやいますか？」

『ちよつと、お待ちくださいね。』

保留のボタンを押したのか、電子音のメロディーが受話器から流れる。

いつ音楽が止むのか、固唾をのんで待っていると、「もしもし、春人ですが。」という声が聞こえた。

「一上佳子ですが。本日は申し訳ございませんでした。」

とりあえず、開口一番謝った。

『…。』

春人が受話器の向こうで、黙っている。

沈黙が恐ろしいまでに気まずく、続けて何か話さなくてはと焦った。

「五月さんにとって失礼な状況になってしまつて…、御足労もおかけしたのに…、本当にすいませんでした。」

『…。』

まだ何も返事をしてもらえない。

いい加減、何か言っていたら、ありがたいのですが、針のむしろです。

姿が見えない分、とても話しにくい。

「あの、こちらの落ち度でしたので、今回のお見合いは、五月さんの方から二木さんへお断りのお話をさせていただきますか…？」

『あの、』

佳子が言い終わるや否や、ようやく春人が言葉を発した。

次の瞬間、お怒りの言葉が来ると思い、佳子は身構えた。

『あの、最後に現れた男は、誰なんですか？』

その声は、非常に暗くて重く、まるで怨念が籠ってそう、地を這っているような低音だった。

ひいひい！　すごく怒ってる！！

恐ろしさの余り、動揺した佳子は受話器を落としそうになった。

留守電の春人の声が落ち着いていたので、怒っていても今回も冷静な感じでやりとりをするのかと想像していたが、自分の見込みは甘かったようだ。

どのように返答しようかと迷った時に、『もしかして』と再び春人の声がした。

『佳子さんの恋人ですか…？』

春人にそう尋ねられて、如月の出現がそのように解釈されるのだと初めて佳子は気付いた。

言われてみれば、全く関係ない人がお見合いをぶち壊すはずもない。男女の関係にあるのだと、思われても仕方がないのに、佳子本人は全くそこまで頭が回ってなかった。

「あ、えーと、その…。」

如月のことをどのように話したらよいものか、悩んだ。

彼とは全然色っぽい関係にはないし、そもそも如月がお見合いに現れたのも、“意に染まぬお見合いに無理矢理参加させられたお嬢様を攫うナイト役”をやリたかつただけだと言っていた。

一応、友達？のような間柄。

恋人だと誤解させたままならば、完璧にこの縁談は終わりになって、佳子の胸のつかえが下りるだろう。

しかし一方で、恋人がいるのにお見合いを申し込んだ非常識な人間と思われたままだ。

ただでさえ、春人はものすごく立腹な様子なのに、心証が悪いままだと、バッグを取り戻す際のやり取りに支障が出てしまうかもしれない。

バッグをどうしても返してほしかった佳子は、結論を出した。

「違います。彼とはただの友人です。

恋人がいるのに、他の人にお見合いを申し込んだりはしません。」

『本当ですか？』

春人の声が少し明るくなった気がした。

最悪な状況は脱することはできたのだろうか。

「はい、信じてはもらえないかもしれませんが…。」

今回、佳子は正直に答えることにした。

理由がどうであれ、身边が落ち着いていない女との縁談は懲り懲りなはずだ。

これでお見合いは破談で終わるはずだ。ああ、本当に終わって欲しい。

せめて機嫌を少しでも直してもらって、忘れ物の話に入りたい。

『じゃあ、何故彼はお見合いに現れたんですか？』

すんなり信じてもらえるとは思わないが、追及の手は厳しい。

「私が意に染まぬお見合いを強いられていると、彼は思っていたようなんです。」

そういうことにしておいてもらおう。如月もそんなことを言っていたし。

『あ、そうなんですか！』

春人の声が、納得してくれたようで、晴れやかな調子に戻っていた。

もともと分家との結婚を迫られていたので、そちらとお見合いだと勘違いした如月が佳子を助けにきたのだと、解釈してくれたのだらう。

『それじゃあ、佳子さんは現在フリーなんですよね。』

「はい、そうですが。」

独り身であることを何故再確認してくるのか、気になったが正直に答えた。

フリーとはいえ、分家の高志との結婚を迫られている状況には変わりが無い。

『佳子さんがお暇な日って、いつですか？』

「基本的に水曜日と日曜日にパートは休みです。」

『それでは、今度の日曜日は空いていますよね？』

「はい。」

『また同じ時間、同じホテルで会いましょう。その時に佳子さんの忘れ物を持っていきます。』

「え？」

『来週の日曜日の2時ですよ。必ず来てくださいね。では、失礼します。』

佳子の返答を待たずに電話が切れた。

春人の強引さに、開いた口が塞がらなかった。

## 学校での尋問

お見合いから一夜明けて、春人がいつも通りに学校へ行くと、朝礼前に男のクラスメイトたちによって席を囲まれた。

「お見合いしたんだよね？ どうだったの？」

「一上のところとなんだよね？ 美人だったか？」

「何話したの？」

「結婚すんの？」

次から次へと矢継ぎ早に質問されるが、春人は誰とも目線を合わせずにマイペースに鞆からノートや筆記用具などを取り出して、机に仕舞っていた。

そして、鞆を机の横のフックに掛けると、ようやくクラスメイトたちに視線を向けた。

集まっている人たちは、春人と同郷の者たちばかり。

山代の里で噂を聞きつけて、真相を尋ねに来たに違いない。

春人が通っている高校は、近隣の地区にある家から一番近い公立学校だった。市町村合併により同じ市になったが、もともとは別の町にあった学校で、里以外の一般人も多く通学している。

「おはようございます。お集まりいただき恐縮ですが、プライベートな質問にはお答えするつもりはありません。」

春人は無表情のまま意見を述べた。

その途端、周りからブーイングの嵐が巻き起こる。

「えー、ちょっと、勿体ぶるなよ。」

「そうだよ、みんな気になってるんだよ？」

「少しくらい教えてくれてもー！」

春人は傍から見ても分かるくらい、大げさにため息をついた。春人の言葉遣いは、クラスメイトに対しては丁寧過ぎるものだったが、言われた彼らはいつものことなので、彼の様子を不審に思うこととはない。

他人とは距離を置きたがるため、学校の休み時間はいつも独りで本を読むか、人気のないところにいる春人。

愛想が少なく、会話をしても笑顔を見せることは少なかった。

口を開けば、誰に対しても丁寧な物腰と口調だが、春人は誰とも馴れ合おうとはせず、ため口を決してしない。

高校入学当時、春人の見た目の良さに惹かれて、多くの女子が彼と仲良くなるうと近づいてきたが、用もないのにまとわりつく彼女らを春人はバツサリと切り捨てたため、今では彼は観賞用として重宝されていた。

どうでもいい奴に邪魔されたくないというのが春人の本音。

顔だけは良いのに、人を寄せ付けない性格のため、陰で女子から「がっかり王子」と評されている。

「おはよう！ 朝礼始めるぞ。席につけ。」

どうやって彼らを追い払おうかと思いついたところ、タイミング良く担任の先生が教室の入り口から入って来た。

クラスメイト達は一斉に席に戻ってゆく。その様子は蜘蛛の子を散らすようだった。

お昼休みになり、春人は自分の席でお弁当を広げる。

毎朝5時に起きて春人は、家族の分の朝食と弁当を作っていた。

義母が13歳の時に亡くなり、それまでは手伝いの範疇だった家事



を春人はメインで行うようになった。最初のうちは慣れない作業で、拙いところが多くみられたが、今では一端の主婦に負けなくらいの腕前になっていた。

春人が一人食べていると、購買でパンを買ってきた数少ない春人の友人の山村和樹やまむつりかずきがやってきて、春人の前の席が空いていたので、勝手に借りて腰を下ろした。

「やつほー、春人、元気してた？」

山村は明るい調子で気さくに春人へ話しかけてきた。

その手は忙しくなくパンの袋を開けている。今日は焼きそばパンを買ってきたようだ。机の上に置かれた白いビニール袋の中には、他にもパンがいくつか入っている。

山村の格好は、短めの黒い髪に、型どおりの詰め襟の制服姿。

春人同様、真面目な高校生の姿だった。

「いつも通りですよ。」

愛想はないが、山村にきちんと応答する春人。

山村とは昔からの付き合いだった。

彼の明るくさっぱりとした人格のお陰か、彼に対しては春人の対応は穏やかだ。

彼もまた同じ里の出身だった。

山村はパンを食べながら、春人へ話しかける。

「いやー、お前が相手にしないから、俺に追及の矛先が向かって大変なんだよね。」

「和樹も相手にしなければいいんですよ。いずれ興味を失います。」

春人が素っ気なく言うと、山村は苦笑した。

春人は休み時間中まで好奇心旺盛な人達に囲まれていたが、春人自身に全く隙がなかったため、彼といつてもご飯を食べている山村へ調査の手が及ぶようになってたのだ。

「それまでが大変なんだって。

それにしても、お前が女と談笑する様子って想像つかないんだけど。

マジでお見合いしてきたの？」

「ええ、まあ、それは本当です。」

「俺は相手の女に同情するよ。

どうせ、バツサリ振って来たんだろ？」

「...。」

春人が沈黙した。

“当たり前です”と即答してくると思っていた山村は、彼の反応に戸惑った。

そもそも、お見合いに出席しているという行動自体が、山村がよく知る春人という人格の枠から外れているのだ。

「もしかして、訳あり？」

山村が小声で尋ねると、春人が小さく頷いた。

そのせいもあって、春人がまったく情報を漏らさないのかと、山村はようやく察した。

「ハル、あたしも混ぜて〜。」

甘えた声を出しながらやって来たのは、大橋里香おおはしりかという女だった。目立たない程度に茶色に染めて、毛先に軽くウェーブがかかったセミロングの髪。

顔に掛からないように、髪の一部を後ろで留めていた。

化粧をしてピンクの艶のある厚めの唇、ラインで縁取りされた大きめの目元。

ふくよかで、一目見て分かるほど大きな胸部と臀部。

指定されたセーラー服を着用しているが、スカートは非常に短くなつており、むつちりとした膝と太もが見えていた。

見た目は少しぼっちゃりしているが、今どきのなかなか可愛い女である。

「女子は女子同士で群れてください。」

眉間に皺を寄せた春人が追い払っても、大橋は「差別はんたーい。

キャハハ」とテンション高めに言い返して、空いていた春人の隣の席に足を組んで座った。

大橋の視線は春人のみ注がれていて、隣にいる山村は視界にも入れず完璧な無視であった。

「もー、せつかくやってきたのに、ハルってば冷たーい。」

「誰も呼んでいませんから。」

春人は言いながらも、弁当の中身を掻き込むように口の中へ入れていく。ご飯を食べるペースが急速に上がった。

山村は大橋から視線を反らして、気まずそうにパンを食べていた。

大橋のスカートが短いため、そこから覗く足の付け根の見えそうな際どさが、目の毒だからだ。

男子からの視線を狙っているとしか思えない。  
春人の所へやって来た大橋は手ぶらだった。  
お昼ご飯と一緒に食べる気はなさそうだった。

「ハルつてば、優しいよね。」

春人は大橋の言葉に何も返さない。

大橋とは会話が通じないと判断したのか、だんまりを決め込んだようだった。

「わざわざ一上の人間に会ってあげるなんて。

もしかして、彼女に同情して思い出作りに協力しようと思ったわけ？」

春人は無言のまま弁当を食べ終わり、弁当箱を片付け始めた。

素早い手つきで風呂敷に包み、机の横に掛けてあった鞆を取って仕舞いこむ。そして、また鞆を元の場所に戻した。

春人は立ち上がった、山村に視線を送ると、「トイレに行ってきた。」と伝えた。

「おうよ」と山村は答える。春人が教室から出ようとする、慌てて大橋も立ち上がった後を追う。

「ちょっと、ハル待つてよ。」

「トイレまでついて来ないでください。」

大橋にそう言い捨てて、春人は廊下に出る。すれ違う人とぶつからないように速度を上げて小走りすると、いつものように大橋を撒くように逃げ出した。

大橋に纏わりつかれるようになったのは、夏の盆祭りの後だった。

奉納試合で一目注目を浴びた春人に目をつけたらしい。同郷で親戚同士だったが、それまではお互いにすれ違っても口も利かなかつたのに、手の平を返した態度である。

可愛い容姿を活かして、色んな男との浮名を流していた彼女だったが、次のターゲットは春人になつたようだ。

今のところ、彼女の辞書に“諦める”という文字は見当たらない。

日中はレジ打ちのパートに出かけて、夜は内職という生活を続けて一週間。

春人との約束の日がやってきた。

季節の変わり目のせいか、昨日から少し風邪気味で軽く咳が出ていた。

昔から体調を崩すと、喉に症状が出やすかった。

常用している薬を服用して、咳を抑えていた。

昨夜、母から再び電話があって話をした。

呼び出し音に急かされて、電話番号を確認せずに反射的に佳子は受話器を取ってしまったのだ。

母は佳子の声の不調にすぐに気づき、意地を張って無理をするからだと批難した。

そして、お見合いの件にも触れた。

「佳子さん、貴女は同情されているだけなんですよ。」

母の声は、妙に優しく感情に訴えるようだった。

「一目惚れをして一族を敵に回してまでお見合いを申し込んだのに、会いもしないのは不憫だと思われたんですよ。」

貴女はただ哀れんでもらっただけなんです。優しくされても勘違いしては駄目ですよ?」

また、五月の四男坊は、顔だけの男だと母は貶していた。

「別れ話がこじれているのか、最近では学校で可愛い女の子に追い

かけまわされているんですよ。あんなに顔が良いのだから、女性関係は相当荒れているのね。佳子さんはあの男の顔にだまされているだけなんですよ。いい加減、目を覚ましてちょうだい。」

一方で、佳子を責めた。

「高志さんを殴ったあの男は誰なんです？」

まさか、家出中にあの男と出来ていたなんて言わないでしょうね？ それにしても何故か里中に今回のお見合いの話が知られていて、私は恥ずかしくて表も歩けないのよ。高志さんにも、申し訳なくて顔も合わせられません。佳子さん、お爺様や高志さんにきちんと謝罪しなくてはなりませんよ。」

滅多に会わない連中に好き勝手言われようと、正直そんなことどうでも良かったし、何故祖父や高志に謝らなくてはならないのか分からなかった。勝手に結婚相手として決めたのは、そちらだった。佳子は一度も了承した覚えはない。

「破談にはまだなっていないようですけど、時間の問題でしょう？ もし終わったら、高志さんとの縁談を進めますよ。また貴女に変な真似をされては困りますからね。」

…実は花嫁衣装はもう決まっているのよ。ドレスもいいけど、やっぱり白無垢が一番ね。」

声を潜めて笑う母に、佳子はめまいを覚えた。まだ諦めていなかったのか。

しかも、状況は悪い方向へと進んでいる気がする。

言いたいだけ言わせて、一通り話を聞き終えてから、「謝るつもりもないし、折れるつもりもない。」と断言して電話を無理矢理終了

させた。

佳子の心に重りがぶら下がったようだった。母の言葉は呪いのように佳子を蝕む。

再び佳子は電車に揺られて、前回も訪れたホテルに足を運んだ。駅から徒歩5分くらいのところにある。

今回はお見合いではないので、少しカジュアルな格好をしていた。髪は下したままで、柄の入ったブラウンのチュニックに、厚手の黒いタイツを着て、茶色のロングブーツを履いていた。

外を歩くのに寒いので、ダークグレーのトレンチコートを上から羽織っている。

バッグは肩から大きめのトートバッグを肩にかけていた。返してもらった荷物をこれに入れて持って帰るつもりだった。

春人から荷物を受け取ったら、すぐに家に帰って体を休めよう。そう佳子は考えていた。

佳子がホテルのロビーに向かうと、「佳子さん。」と声を掛けられたので、そちらの方を向くと、すでに先にいたと思われる春人の姿が目に入った。

カーキのブルゾン、黒いストレートなボトムスを春人は着ていた。彼も前回と比べて、プライベートに近い格好をしている。二度と会うとは思わなかった端正な顔。

彼の両手は空いていて、何も持っていないかった。

佳子の私物はどうしたのだろうか、心配になった。

「五月さん。」

そう言いながら、佳子は足早に春人に近づく。

「わざわざお越しいただいてすみません。」



荷物を送ってくれた方が自分としては楽だったのに。

あんな強引に落ち合う約束を取りつげなくも良かったのに。

母との電話での一件や、体調不良もあって、佳子の機嫌は著しく悪かった。

今日はうまく笑えなかった。

「こちらこそ、すみません。」

春人は相変わらず丁寧な物腰だった。

「荷物は車に置いてあるので、一緒に来てもらえますか？」

「え、そうなんですか？」

「はい、車は地下の駐車場に停めてあるので、案内します。」

春人は言いながら歩き始めた。

置いていかれては自分の荷物を取り戻せないの、佳子は慌ててついてゆく。

春人の歩みは、コンパスが佳子より長いだけあって早い。

佳子は小走りをしなくては、彼のすぐ後ろにいられなかった。

どうしてロビーまで持って来てくれなかったのか。

歩くペースを合わせてくれてもいいのに。

春人の手際の悪さと気遣いの無さが、佳子を苛立たせる。

ゴホンと咳払いをした。

春人はそれに気付かなかったのか、後ろを振り向かなかった。

エレベーターで地下に行き、春人が乗って来た車に辿りついた。

5人乗りの白い普通乗用車だった。

春人は運転席にキーを差し込んで、ドアを解錠する。

そして春人はドアを開けながら、後ろにいた佳子を振り返り、「どうぞ佳子さんも乗ってください。」と指示してきた。

そう言われても佳子は戸惑った。

わざわざホテルから外へ出るために、そのちょっとした距離を車で送ってもらふ必要を感じなかったからだ。

「あの、荷物を貰ったら、ここでお別れして結構ですよ？」

佳子が乗車を遠慮してそう言うと、春人は何故か困ったような表情を浮かべた。

佳子は自分が何か不味いことを言ってしまったのかと、不安になった。

「前回みたいに邪魔が来ては困るので、ここから移動したいんですが協力お願いします。」

佳子は高志のことを思い出した。

彼はどこからかお見合いの情報を聞きつけて、佳子の妨害をしにやってきたのだった。今回も現れないとは限らない。

「分かりました。よろしくお願いします。」

佳子は車の前方を通過して、助手席側に移動した。そして、ドアを開けて乗りこむ。

春人は無言で車の運転を始めて、二人を乗せた車はホテルから出発した。



## 春人と。 2

春人が運転する車は、道路の流れに沿って一般道を走っていた。車内の会話は少なかった。

春人から話題を振ってくることはなく、佳子が話しかければ答えてくれるだけだった。

もともと喉の調子が悪く、声を出すのが辛かったのと、色々あって憂鬱な気分だったため、佳子は気を遣うのを早々に諦めていた。

佳子が口元を押さえて軽く咳をすると、春人が「風邪ですか？」と尋ねてきた。

「そうなんです。季節の変わり目って体調を崩しやすくて。」

「熱はないですよね？」

「はい、咳だけなので、大丈夫ですよ。」

「寒かったら言うてください。温度調整しますから。」

「はい、ありがとうございます。」

ホテルを出てから、車はずっと走っていた。

腕時計を見ると、2時23分を指していた。

道路標識の案内を見ると、佳子にとっては全く見知らぬ方面へと進んでいる。

佳子は目的地について、まだ何も聞いていなかった。

「あの、どちらへ向かっているのですか？」

「あまり遠いところだと、帰るのに困るのですが。」

「帰りはちゃんと送りますから大丈夫ですよ。  
ちなみに海に向かっていきます。」

「海ですか!？」

佳子は春人の答えに心の底から驚いた。  
夏ならまだしも、こんな冬になろうとしている時期に海へ行くなんて。

水に入るのは考えられないから、美味しい魚介類でも目当てに行くのだろうか。

「そうです。あと30分くらいで着きますよ。」

ちなみに佳子は海へ行ったことが無かった。  
テレビの映像でしか、海辺を見たことがない。  
子供の頃に亡き父と居間でテレビを見ていたら、「海へ行ってロクな目に遭わなかった。」と父が苦々しく語っていたので、佳子は海に対して良いイメージを持っていなかった。

道なりに走っていると、そのうち「干物あります」などの看板を掲げた個人経営のお店などが目につく様になった。

釣り具やサーフィンなどの海関係のお店や、古びた定食屋が所々並んでいた。

佳子たちは海岸沿いへ向かい、砂浜が目の前に見えだすと、自由に止められる駐車場がたまたま見つかったので、そこに車を置いて、外へ出た。

需要の無い季節のせいか、人の姿はほとんどなかった。

今日の天気は曇りだった。

海岸から強い風が吹き寄せて来て、着込んでいても肌寒く感じた。佳子は開いていたコートのボタンをきっちり閉めたが、それでも両腕を体に回して、これ以上熱を奪われないようにした。海から押し寄せる波は、空と同じくどんよりとした灰色だった。春人に続いて、堤防を二人で歩く。彼は両手をブルゾンのポケットに突っ込んで歩いていった。砂浜に降りる階段があり、春人がそこから下へと進むので、遅れながら佳子もそれに従った。先に砂浜まで軽やかなテンポで辿りついた春人は、後ろを振り返って佳子と距離が離れているのに気付くと、立ち止まって追いつくのを待ってくれた。

打ち寄せられた漂着物や、花火をしてそのまま捨てられた残骸など、色々なゴミで砂浜は溢れていた。

意外に汚れていて、佳子は驚いた。それらを避けながら、春人と波打ち際に近づいた。

ブーツで濡れた砂に足跡をつけると、寄せてきた波が綺麗に消してくれた。

引いてゆく波と寄せてくる波同士がぶつかり合い、白い泡が生じていた。

テレビでは見られない様子を初めて見た。耳を占め尽くす波の音。

髪が強風で煽られて、視界を遮るのを手で押さえていた。

佳子たち以外、人はいなかった。

遠くを見渡すと、一面に広い海が広がっていて、地平線が見えた。寒々しい色の海と空。

まさかいきなりこのような景色を見ることになるとは思わなかった。しかも、男の人と二人きりだなんて。

見目の良い男の人と一緒に、これがお互いに好感触な状況なら、ウキウキな心境にでもなるのだろうか、現実には甘くない。

彼は別に自分に好意があるわけでもない。

“同情”という母の言葉が頭の中を霞めた。母の言葉がどこまで本当なのか、佳子には判断のしようがなかったが、春人が自分に気が無いのは当然のこととして受け取っていた。目の前に広がる、ただ寒いだけの冬の海岸なんて何の感動も佳子には与えなかった。心までも冷えそうだった。

春人は佳子から離れて、波打ち際で波と追いかけてっこをしていた。軽やかな足取りで砂浜を駆ける姿は、童心に返ったようで元気そのものだった。

横顔のすつきりと通った鼻筋が綺麗で、思わず見とれてしまう。

「海へ来たのは初めてです。」

佳子が波音に負けないように大きな声で話しかけると、春人はちらりと視線を佳子に向けた。

春人は佳子の方へと駆け寄り、側まで来て立ち止まった。

「私ですよ。」

春人は少し嬉しそうに笑う。

その素敵な笑顔は反則だと思いつつ、うっかり頬が熱くなる佳子は彼から視線を反らした。

一人称が“私”だなんて、堅苦しすぎ。

別のことを考えながら、佳子は冷静を努めた。

私が春人のことを好きだと、彼が勘違いしているから、彼は自分に気を遣っているだけだ。

今回の遠出は、きつと可哀想な私のための思い出作りなのだろう。

少しだけ甘い夢を見せて、期待をさせつつ、傷つけないようにお断りをする。

今後の彼の行動予定が佳子には読めてきた。  
如月が言っていた男女の機微について、自分も分かってきたものだと、佳子は皮肉気に思った。

「寒いので車に戻りませんか？」

そろそろ寒さも限界だったので、春人の言葉に佳子は一も二もなく頷いた。

二人して波に背を向けた時だった。

「ヨシコ、ナニカクル。」

佳子の足元から声があった。

咄嗟に辺りを見回すと、波打ち際から緑がかった太い紐状の何かが、佳子を目掛けて物凄い勢いで伸びてきていた。

あっという間に佳子の左のブーツに巻きつき、強力な力で海の方へと引っ張るので、バランスを失った佳子の体は砂の上に転倒した。海の方へと佳子は引きずられる。

「佳子さん!!」

「翔影、防御して!!」

春人と同時に佳子は叫んだ。

佳子の体の下から黒い流動性のある物体が噴き出るように発生して、黒い膜状になって佳子自身を包み込む。そのおかげで全てから遮断されて、巻きつく物体は佳子から切り離される。  
佳子の体は静止した。



佳子を襲ったものは、切り離されてもそのまま海の中へと戻ってゆく。

その間に、佳子は体勢を持ちなおして立ち上がる。

「マダイルヨ。」

「一旦防御を解除して、近づいたら攻撃して。」

「ウン。」

敵は海の中へ全て消えて見えなくなったが、まだ警戒が必要らしい。翔影と呼んだのは、いつも佳子の足元にいる影のような妖怪だった。黒い膜は溶けるように上から無くなると、佳子の足元に集まり、ゆらゆらとその周りを警戒するようにアメーバのように動きまわっていた。

その際に佳子はしゃがみ込んで指で砂浜に絵を描いた。  
落書きのような魚の絵だ。

「出できなさい。」

佳子が言うと、魚の絵が鈍く光り出して、そこから何か白いもやの様なものが出てきたと思ったら、どんどん大きくなって巨大な魚になっていた。

大ききならば、全長は大人の人間くらいあった。

キラキラと表面を覆うところが輝き、一匹の立派な魚は、宙に浮かびながら口をパクパクさせていた。

「犯人を探してきて！」

佳子がそう言い放つと、それは弧を描くように飛び跳ねて、海の中へ飛び込んで行った。

しばらくの間、ただ立ちながら待っていると、先程潜っていた魚が再び海から飛び跳ねて戻って来た。

佳子の前に魚はぺつと何かを吐き出してきた。

砂の上に転がったそれは猫の大きさくらいの海草の塊のようだったが、様子を見守っていると、それはのっそりと動きだした。

昆布のような海草がゆっくりと起き上がる。

ちょうどバランスの良い位置に海草でできた腕と足のようなものがあり、それを使って本体部分を持ち上げていた。

ちらりと振り返り、顔のようなものを佳子たちに向けたと思ったら、急に素早く動いて一目散に逃げようとした。しかし、春人がそれを上回る速度で動いて、足でそれを踏みつけた。

「んぎゃー！」

春人の足の下から、何か潰れたような声が漏れた。

「五月さん、ナイスです！」

佳子は思わず拳を握りしめて感心した。

「そのまま踏んでおいてくださいね。」

そう言いながら、佳子は海草の妖怪に近づく。

春人に踏まれた妖怪は、手足のような海草をじたばたさせていた。

「あなたが私を襲ったのね？」

佳子が話しかけると、妖怪の動きがぴたりと止んだ。

「…。」

春人に踏まれたままの妖怪は何も答えない。

「五月さん、もっと踏みしめてください。」

佳子の言葉に従って、春人の足に力が入り、ぐりぐりと砂に押しつけられるように妖怪は踏みしめられた。

「ぎゃー！ 止めてー！」

再び、手足をばたつかせた。

春人の足の周辺で、4本の海草がばさばさと舞うように騒がしく動いている。

「あなたがやったんでしょ？」

「そ、そうだー！」

妖怪が白状したので、春人の足の動きが止まった。

「どうしてあんなことをしたの？」

「楽しいから。」

「あなたは楽しくても、私は楽しくないわよ。いきなり引っ張るのは駄目よ。」

「だって、そうしないと海の中に来ないじゃないか。」

「陸の生き物は、水の中へいきなり引きずり込まれたら、大変な  
よ。」

「あなたもこのまま天日干しにされたら困るでしょ？」

「うっ…！」

「もうしないって約束するなら解放してあげるわ。」

「するする。」

本当に反省しているのか、軽いノリで妖怪は答えた。  
そんな様子に佳子のため息をつく。

「じゃあ、名前を教えなさい。」

「海塊かいがいだ！」

妖怪の名前を知ることが重要だった。  
術的な意味合いを含み、相手の名を認識するということは、  
対象ターゲットとして把握しやすくなる。

「海塊ね。」

よく聞いて。二度目はないわよ。もし約束を破ったら、「  
待ってください。」

今まで、事の成り行きを黙って見守っていた春人が、佳子の言葉を  
遮った。

「今年に限って、この海で何度も海水浴客が遊泳中に足を引っ張ら

れたのですが、その犯人も海塊だったんですか？」

「…。」

海塊は何も答えない。

「あなた、他の人にも同じことをしていたの？」

「うん。」

佳子が尋ねると、海塊は素直に答えた。

「それももう止めるわね？」

「うん。」

「約束を破ったら、…鍋の出汁用に煮込むわよ。」

佳子のドスの籠った脅しに、海塊は「ひいつ」と声を上げて慄いた。

佳子は目だけで春人に合図を送った。

春人がそれに気付いて海塊の上から足をどけると、それは「もうしましえーん！」と叫びながら、ものすごい勢いで海の中へ戻っていた。

春人と。 2 (後書き)

そろそろお鍋の時期ですし、昆布の出汁、美味しいですよ…。

### 春人と。 3

ブーツに巻きついた緑がかった紐状のものは、昆布などの海藻が束になって出来た物だった。

佳子はぬめぬめして気持ち悪いそれを手でブーツから取り除くと、砂浜の上に捨てた。

佳子は体についた砂を落とすために自分の服をあちこち叩いた。

春人は佳子を上から下までじっくりと観察していて、まだ砂が落ちていない個所を指し示して教えてくれた。

「全部落ちたかしら？」

「まだ髪に付いてますよ。」

春人が佳子の前に立ち、手を伸ばして髪を撫でるように触れてきた。

佳子は春人に任せて、彼が頭を確認しやすいように俯いた。

春人が手を動かして髪を動かすと、砂の粒子がぼろぼろと落ちていくのが、視界の端に映った。

倒れる際に眼鏡を庇って、顔を咄嗟に横へ向けたため、髪の毛が犠牲になったようだ。

何度か春人の両手が髪を梳くように動いて、砂を落とす作業を続けてくれた。やがて、髪全体を整えるように指が動いているのがわかった。

ところが、そのうちに春人は一房髪を掴んだと思うと、指でいじり始めているようだった。

砂を払う様子ではなくなっていたので、「終わりましたか？」と尋ねながら、佳子が顔を上げると、春人と目が合った。

春人の綺麗な瞳が大きく見開いたと思ったら、急に目を泳がせて拳

動不審となり、慌てて佳子の髪から手を離して、後ずさった。そんな彼の不自然な反応に、何事かと怪訝に思う。そういえば、前回のお見合いの時も、彼は目が合った時に同じように視線を泳がせていた。

「あの、車に戻りませんか。」

佳子は背筋がぞくぞくと寒くて、春人のことより自分の体調の方が心配だった。

風邪を悪化させてしまったら、パート勤めが厳しくなる。それでなくても生活は貧しいのに、休んでしまったらその分の賃金は貰えない。

「そうですね。」

春人も賛同してくれたので、二人は来た道に戻っていった。

車に乗り込むと、春人は車のエンジンを掛けてエアコンの暖房を強くしてくれた。

車の中は外の強風に吹きさらされていない分、体温がこれ以上奪われずに済んでいたが、暖房が効き始めたばかりだったため、冷えた体はなかなか温まらなかった。

「佳子さんのおかげで、仕事が楽になりました。ありがとうございます。」

「何の話ですか？」

春人の方を向くと、彼は真面目な顔をしていた。

「さっきも言った通り、あの海岸で遊泳中に足を引っ張られるとい



う事故が多発して、里に調査依頼が来たんですよ。今回、五月家が担当になりました。

ちょうど待ち合わせ場所に近かったので、調査の前に周りの状況を下見しようと思って、来てみただけだったんですが、まさかあなるとは思いませんでした。」

「はあ、そうだったんですか。」

それで冬の海岸にわざわざ来たわけだったのか。

佳子はとってみれば寒さで震えるし、砂まみれになるし、踏んだり蹴ったりだった。

目の前にある整った顔を、恨めしく見た。

「良かったですね。」

嫌味を込めて言っても、春人は佳子の内心に気付かないのか、「はい。」と答えただけで、まるで効いていなかった。

「しかし、いきなり砂浜にいた佳子さんを襲ってくるとは思わなかったんですよ。」

全て海の中で被害に遭ったとしか聞いていなかったのだから。

「今の時期の海には海水浴客はいませんし、あの妖怪も退屈だったのでは？」

佳子は、はぐらかすような回答をした。

実は、佳子にとって妖怪の類にちよっかいを出されるのは、良くあることだった。

恐らく、あの海塊は佳子に気付いて、わざわざ砂浜まで手を伸ばしてきたのだろう。

今回は佳子にとってみれば迷惑極まりない行為だが、相手からすれば佳子にお近づきになりたくて、気を引くためのアプローチだったのかもしれない。

興味を持たれるのは良いが、その方法が時には危険な場合もある。妖怪には人間の都合を考えてくれない連中が多い。

今回も下手をすれば、海の中まで引きずり込まれるところだった。

佳子が極寒の海に沈められても、相手は困らない。

話してみれば好意的な妖怪たちも、人間とのやりとりや接し方を知らなくて問題を起こすことがあるのだ。

佳子は自分の力をそう云った連中から身を守ったり、云う事を聞かせる為にしついたりする以外、ほとんど使ってこなかった。

そう云った佳子の込み入った事情を、どう受け取られるか分からない初対面に近い人間にべらべらと開けっ広げに話す程、警戒心が無いわけではない。

「そういえば、佳子さんは先程力を使っていましたけど、絵を描く必要はいつもあるんですか？」

佳子にとっては都合の良いことに、春人は話題を変えて振って来た。

「まあ、そうですね。何か媒体がないと具現するのは難しいんです。」

本当は実際に絵を描かなくても、頭の中に何を作りたいか描くだけで出来るのだが、一族の誰もそれを出来た者がいないようなので、佳子はわざと周りに合わせていた。

子供の頃に師であった父に、そうしろと言われたのだ。

誰も到達できなかった領域に達したと分家知れば、親族婚にまずまず拍車がかかる恐れがあった。それによって、佳子が不幸な目に遭うかもしれないと、父は危惧したのだ。

佳子の具現化の能力は、桁はずれらしい。

佳子が父に褒めて欲しくて力を振った時、父はそれを見て言葉を失くし青ざめていた。

“血の妄執が実を結んだ、最高傑作だ”と、恐ろしいものを見るかのような目つきで、大好きな父が自分を映していた時は、今でも思い出したくないくらいショックな出来事だった。

それ以降、佳子は力を見せびらかすような真似は止す様になった。修行の時に、父と同じようなレベルで、真似ををしていれば、父はいつも通り変わらずに接してくれた。

一族の慣わしにより、女が表だって力を振るう機会がほとんどなかったため、佳子の能力について父以外に勘付かれることは、今まで無かった。

宝の持ち腐れだと佳子自身は思っていたが、復讐を望んだ時に、自分の力が何よりも役に立つと気付き、佳子はこのために自分は優れた力を授けられたのだと、天啓にうたれたかのように悟ったのだ。自分の最大の切り札だった。自分は敵にも過小評価されて見くびられているはずだ。

実行の日に備えて、経験を補うべく密かに技を磨いていた。

「奉納試合で一上高志が何か紙を出して、力を使おうとしていたので、どうしてだろうと思っていたのですが、そう言うことだったんですね。」

奉納試合では、高志が能力を使う前に、春人の先制攻撃により、高志が場外に押し出されて、開始後1秒も経たないうちに試合が終了していた。

決勝戦にも関わらず、あまりにも呆気ない幕引きに、何が起ったのか認識できなかった観客たちは、試合が終了して春人がお時儀を下がっても、雰囲気盛り上げるタイミングを逃してしまった。その後、会場内に気まずげに拍手が疎らに鳴り響いていたのを覚え

ている。

春人は勝つことのみに専念していて、空気を読まず、祭りの会場を盛り上げようと云う気持ちは全くなかったようだ。

「里では一上家の能力は知られているんですか？」

「はい。具現能力は有名ですよ。」

巻物から妖怪を呼びだして、修行用の相手にするんですが、それは一上家が作っているんです。」

「そうなんですか。初めて知りました。」

修行の一環として、自分の作ったものを紙などの媒体に閉じ込めてそれを第三者が利用できるようにする、という工程を父の監視の元で行ったことがあった。

具現の能力と、術的な能力を使った応用作業だった。きっとそれを活用して、巻物を作っているのだろう。

「佳子さんも作れますよね？」

「ええ、まあ、修行用のは作ったことはありませんが、やればできると思えますよ。」

「なるほど。」

春人の目が怪しく光ったのに、佳子は気付かなかった。

佳子は今日の本題のことをいつ切り出そうかと考えていたのだ。

「あの、ところで、私の忘れ物はいつ渡してくれるんですか？」

「心配しなくても、お別れするときにはちゃんと渡しますよ。今日は最後まで一緒にいて欲しいんです。」

含みのある言い方に、佳子は反論できなかつた。

つまり、佳子が途中でいなくならないように、人質みたいに預かっている、春人は言いたいのだ。

信用されていないのだと思うと、内心面白くなかつた。

佳子は春人から顔を背けるように、景色を見る振りをしてドアの窓へと首を動かした。

駐車場は防波堤の側にあつた。

佳子の目の前には、コンクリートで作られた人工的な防壁が、横一列に広がっていた。

「佳子さんに聞きたいことがあるんです。」

「なんででしょう。」

話しかけられても、振り向かずに返事をした。

「どうして私にお見合いを申し込んだんですか？」

「え？」

今更、それを尋ねられるとは思わなかつた。

佳子が目を丸くして春人を振り返ると、彼も自分を見ていた。視線が交わつたと思つたら、彼の方が気まずそうに先にずらした。

「噂では、その、佳子さんが私を、一目で気に入ってくれたと聞いているのですが…、本当なんですか？」

照れ臭そうにこちらの様子をちらちらと伺いながら、話すその様子に佳子は力チンと頭にくるものがあった。

どうしてわざわざそんなことを尋ねてくるのか、春人の神経を思わず疑う。

これから振る予定のくせに、私が抱いていると思ひ込んでいる恋心でも聞きたいともいうのか。

佳子は朝から不機嫌だったのに加えて、今日の春人の様々な仕打ちに腹を立てていた。

だから、普段なら他人に絶対言わないであろう皮肉の一つでも言ってやって、春人の綺麗な顔を歪ませたくなった。

「いいえ、たまたま貴方が奉納試合で優勝したからですよ。」

お見合い相手は誰でも良かったんです。分家の人間じゃなければ。

┌

春人の目が大きく見開いて、驚愕の表情を見せた。

春人と。 3 (後書き)

佳子の中で春人株が大暴落中です。

「私が優勝したからですか？」

驚いた表情を張りつかせたまま、春人は質問を投げかける。

「そうです。母親と約束していたんですよ。

優勝した人とお見合いするって。」

ちなみに、申し込んだらすぐに破談になると思っていたんですけど、心の中で、そう佳子は毒づいた。

「そうなんですか…。もしかして、試合前に妨害があったのは…。」

春人は視線を上に向けて、何か思い出しているようだった。

奉納試合の時に何者かが春人を納屋に閉じ込めた件は、佳子も知っていた。

「分家の仕業かもしれないですね。

配下の者に分家の対戦相手を見守るように指示していたのですが、案の定、貴方は妨害に遭ってましたね。

助けられなければ、貴方は不戦敗になってましたよ。」

家来の正によって、春人は助けられたのだ。

当の正は、面が割れたら都合が悪いことがあるかもしれないと、的屋で買った特撮ヒーロードラマの主人公のお面を被って、助けに行ったのだ。

その時の正は、まさしく正義の味方だった。



そのお面は今では、正の一人息子の正太郎の手に渡って、ごっこ遊びで使われている。

「はあ、つまり、顔で選んだ訳ではなかったんですね。」

そこ、念を押すところですか！？

そんなに自分の顔にプライドがあったとは、佳子は驚きを通り越して呆れた。

「ええ、そうなんです。ちなみに顔も知らずにお見合いを申し込んだんです。」

試合の時に、遠くで全然見えなくて。この眼鏡、度が合ってなくて弱いんです。」

「私の顔も見えてないんですか…。」

春人は呆気にとられ、口を閉じるのを忘れて、途方に暮れた表情をしていた。

どこか間抜けな感じがするその顔は、佳子を非常に満足させた。

「だから、私に対して同情や哀れみは無用ですよ？」

さっさと振って、バッグと上着を返してほしい。

佳子は声を大にして言いたかった。

春人はしばらく固まったままだった。

やがて、ぎこちなくではあったが、よろよろと動きだして、春人はハンドルを両手で掴んで、額をそこに当てて俯くと、そのまま何も言葉を発しなかった。

もしかして、やり過ぎたか。

落ち込んだような春人を見て、佳子は少し焦った。

佳子が見守る中、黙ったまま一向に動かない春人。

佳子が心配して何か声を掛けようとした時、おもむろに春人は顔を上げた。次に、ギリギリと音を立てそうな、まるで油の切れたカラクリ人形のような、荒い首の動きで佳子の方を見た。

春人が纏う雰囲気、先程までの平常のものとは異なり、様々な感情が怪しくうずまいていようだった。

「佳子さんの言いたいことは、その、大変よく分かりました。」

何か奥歯に物が挟まったような言い方だった。

「そ、そうですか…。」

佳子を見る春人の眼力は、危うい何かを持ち合わせていて、佳子は無意識に気圧された。

佳子は何か悪いことが起きそうな予感がした。

「しかし、そういうことなら、私と婚約しましょう。」

春人が重々しげに話すその内容に、佳子は自分の耳を疑った。

「ごんにやく?」

佳子は思わず聞き返す。

何か、変な単語が聞こえた気がした。

「違います、婚約です。」

「今夜食う?」

「イントネーションが違いますよ。婚約です。結婚の約束です。」

「けけけけけ」

動揺のあまり、思いつきり噛んでしまい、結婚の“け”の字以降の単語が続かなかった。

「笑い声が恐いんですが。」

「笑っていません!」

結婚って、どうしていきなりそういう話になるんですか!??」

春人の真面目な突っ込みに、佳子はむきになって抗議した。

「佳子さんは誰でも良かったと言っていましたよね?

なら私でも別に問題ないんじゃないですか?」

「そういうことじゃなくて、五月さんの方に問題があるんじゃないんですか?」

そもそも結婚なんて考えてないでしょ?」

「そうですね。今すぐは無理です。学生ですし。」

「いえいえ、そういう問題じゃないでしょ?」

私なんかと結婚する気なんですか?」

「私は、最近ストーカー被害に遭っているんです。」

「は？」

春人の話が全く脈絡のない方へ行ってしまう、ついていけなかった佳子は怪訝な表情を隠しもしなかった。

「だから、私に婚約者が出来れば、ストーカーも付き纏うのを諦めてくれるのではないかと思っっているんです。

貴女も私との縁談が終われば、フリーに逆戻りじゃないですか。そうなったら、分家の高志から猛攻撃が来るんじゃないんですか？」

佳子は息を飲んだ。

お見合いの現場に駆け付けた高志や、昨日の母の電話を思い出す。

あの調子なら、母たちが破談になったと聞きつけた瞬間、恐ろしい展開が待っていていそうな気がした。

背筋に冷たいものが走る。

佳子は息を飲んで、春人を見据えた。

「…それって、取り引きってことですか？」

「そう思っていただけで、結構です。貴女にとっても悪い話ではないと思うんですが。」

今まで無意味なお見合い話を終わりにしようと躍起になっていたが、春人の提案を受け入れて、お見合いの話を進めて、敵を欺くのも手かもしれない。

父がいない今、一上家の中で佳子は孤立無援だった。

母の暴拳を防ぐ、拒絶以外の有効な手立てが、今のところ佳子には見当たらない。

佳子が気のないことを先程明らかにしたのだから、彼も話の流れ的

に本気の婚約と言っているわけではない。

春人が言っているのは、要は“なんちゃって”という偽りの関係だ。そこまで警戒するものではない。

双方に都合のよい話、それだけだ。

「そ、そうですね。婚約つていうことで、とりあえずそれでお互いの敵を騙して、問題が片付いたら別れましょうね。」

春人はにやりと笑う。

悪だくみが巧くいったような腹黒さを彼から感じるのは気のせいだろうか。

そう思い、佳子は少し不安になったが、口から出た言葉はもう取り消せない。

「了解です。それでは、佳子さん、これからよろしくお願いします。」

春人が握手を促すように、手を差し伸べてきたので、佳子も恐る恐る手を差し出してその手を握った。

二人の利害が一致して、契約が成立した瞬間だった。

春人の手から伝わる体温は、とても温かかった。

その温かい手に親しみを覚えて、さっきの春人の不審な様子は、自分の見間違いだと思い直そうとした。

幸先が悪いのは、嫌なものだ。

それで再確認するために彼の顔を見つめた瞬間、彼の口の端は上がっている、目が笑っていないことに佳子は気付いた。気付いてしまった。

彼の手を取ったのは、得策だったのか、早計だったのか、その時の

佳子にはまだ分からなかった。

春人と。 4 (後書き)

春人、壊れました。

話し合いが終わり、春人は車を発進させて、来た道に戻っていた。佳子たちが待ち合わせに使った場所へと向かっているのだろう。

車の中で我慢できずに咳込んでいると、「大丈夫ですか？」と春人に声を掛けられた。

発作のような咳が治まってから「うるさくて、ごめんなさい。」と佳子は謝った。

車内の暖房が効いてきても、体の悪寒は無くならなかった。

コンビニに途中で寄った時に、春人に付き合ってくれたお礼だと温かいココアを奢ってもらって飲んでみだが、全然温まらなかった。体調が急速な勢いで悪化しているのを感じていた。

頭は酷くぼうつとして、ほとんど考えられなくなっているし、なにより体がだるくて仕方が無い。

もしかしたら、熱が出てきたのかもしれない。

余計なことを春人に言っ、心配を掛けてしまうのも申し訳ないので、黙っておくことにした。

「エアコンの温度上げてもらっていいですか？」

佳子をお願いすると、すぐに春人は手前の調節レバーを動かしてくれた。

その途端、空調の入り口から温かい風がより強く吹いてきた。

「寒いんですか？」

「そうなんです。すみません。」



春人が運転する車が、赤信号に引つ掛かって、停止した。その時に春人は左手を遠慮がちに佳子の顔の方へ伸ばしてきた。

「少し、失礼しますね。」

春人は佳子の返事を待たずに、額に手の平を当てた。

先ほどとは異なり、彼の手の方が冷たく感じた。すぐに彼の手は離れる。

「熱があるんじゃないんですか？」

春人は心配げな表情をした。

「そうですね？ 五月さんの手が冷たすぎるだけですよ。」

佳子は気を遣われたくなくて、誤魔化そうとした。

春人は自分の額にも手を当てて、体温を確認していた。

「やっぱり、私より熱いですよ。」

私の平熱は六度五分くらいなので、それ以上は絶対にありません。」

意外に高い体温に佳子は驚いた。佳子の平熱はもつと低い。

「そうですね？

でも、あとは電車の中で座って帰るだけですから大丈夫ですよ。」

車はもうすぐ佳子たちが待ち合わせた街に到着しようとしていた。見覚えのある風景が目に入って来ていた。

「佳子さんの家まで送りますよ。」

電車だと途中で歩いたりしなくてはいけないから、大変じゃないですか。」

「五月さんの家とは逆方面ですし、五月さん自身が帰るのが大変になってしまうので、結構ですよ?」

佳子の家から里まで3時間くらいかかるのだ。

春人が佳子を家まで送って、それから帰宅するとしたら、とんでもない時間を運転することになる。

運転初心者なのに、長時間運転をしてしまったら、疲労の為に注意力散漫になり、事故を起こしてしまうかもしれない。

「でも、放っておけません。」

「五月さんがそこまで気をかける必要はないと思いますよ。お気持ちだけで十分です。」

「佳子さんは長い間療養していて、病気が快復したばかりじゃないですか。」

それなのに、私が連れまわしてしまったために体調を崩させてしまって、そのまま放置して帰ったら、気になって運転どころじゃありません。

この時期の海辺があんなに寒いとは思っていませんでしたよ。本日は、申し訳ないことをしました。」

佳子の3年近くの家出による不在を、一上家では表向きには病気とということにしていた。

そのことを春人は言っていたが、ここまで心配されるとは思ってもみなかった。

「五月さんに会う前に風邪をひいていたんですから、本当に気にする必要はないですよ？」

本当のことを言える状況ではなかったため、訂正はしなかったが、佳子は春人の主張を受け入れなかった。

きちんと今日の不手際を謝ってくれたから、佳子は少し溜飲が下がったため、そこまで彼が自分に対して尽す必要はないと思ったからだ。

「佳子さん、諦めてください。もう決定事項です。」

しかし、春人も負けじと言い返すというか、断言をしてきた。

ここまで強く相手に言い切られて、佳子はこれ以上の抵抗は無駄だと悟った。

春人は強引だ。

そもそも、今日の約束も一方的に取り決められたし、海へ向かったのも春人の独断だった。

きっと佳子がこれ以上何を言っても、話し合いは平行線のまま終わり、結局は運転する春人の思う通りになるだろう。

「分かりました。申し訳ないですが、よろしく願います。」

最終的に佳子が折れた。

それでも結果的には、今回の春人の申し出は正直ありがたかった。このまま座っているだけで、家の前まで連れて行ってくれるのだから、体は楽で消耗を最小限に抑えることができる。

「着くまで寝ていていいですよ。あと、これ。」

そう言いながら、春人は再び信号で止まった時に、自分が着ていた

ブルゾンを脱いで、佳子に渡した。

「どうぞ使ってください。少しでも温かくしてください。」

「ありがとうございます。」

佳子は差し出された上着を受け取る。まだ真新しそうなそれは、佳子も知っている有名なメーカーのロゴが印字されていた。

彼の好意を無下にするのも悪いと思い、上半身にかけてさっそく使った。

春人の香りというか、全然馴染みのない異性の匂いがして、否応なしに佳子は彼を男性だと意識せざる得なかった。

なんか、変に緊張する…。

佳子は偽りとはいえ、婚約してしまったのだ。

隣にいるのは、その相手。

こうして優しくされると、何だか急にそわそわとして居心地の悪い気分になった。

こういう状況って、苦手だわ…。

朦朧とした頭からは、この場に適した話題が全く思い浮かばなかった。会話が進みそうもない現状では、春人のお言葉に甘えて佳子は寝ることにした。

目を瞑ると、心地よい揺れもあってか、すぐにうつらうつらとしてきた。

そんな佳子の様子を、春人は盗み見るかのように観察していた。

佳子の体調を案じて、気遣いが浮かんだ春人の眼差しに、目を閉じ

ていた佳子が気付くことはなかった。

佳子は夢を見ていた。

父が運転する車で一緒に外出していた。

助手席には自分が座り、後部座席には母と女中が座っている。

里へと続く山道を通っていて、代わり映えのない緑の景色がガラス越しに映っている。

カーブを通るたびに、遠心力で体が揺られて、振り回される。

自分が子供の頃の記憶で、長時間のドライブに飽きて辟易としていた。

「ねえ、お父様。どうして里では屋敷から出てはいけけないの？」

佳子、つまらないなあ。」

「そんなことを言うものではないよ。

あそこの家では、佳子はとても大事なお姫様だから、危ない目に遭わないように大切に守っているんだよ。」

「うちでは普通に外出しているのに、変なの。」

佳子の言い分に父は苦笑しつつも、父はそれでも弁解した。

「里にはうちとは違って色々な人や妖怪がいるから、危ないんだよ。」

「ふーん。」

父の話す内容が、その時は小さかった為によく理解できなかったが、駄々をこねても父が屋敷の外へ連れ出してくれないことを悟り、佳子は愚痴を言うのを諦めた。

しかし、今の佳子は知っている。

父が退屈な佳子を気遣って、「お母様には内緒だよ。」と、夜中にこっそりと屋敷から連れ出してくれるようになったことを。

車の中では、後ろに母がいたために、その時は佳子を諷めることしかできなかったのだ。

分家では、用もないのに気軽に外出をすることを禁じられていた。外遊びは、屋敷の庭でするしかなかった。

父との夜中の散歩は、子供だった佳子には刺激的だった。

父の言う通り、里には色々な妖怪がいて、子供の佳子のために色々相手をしてくれた。

いつしかこの為に、里への帰省を楽しむようになった。

やがて、佳子たちを乗せた車は、分家の屋敷に着いた。

やっと体を動かせると、佳子は車の中からいち早く降りた。

後部座席から降りた女中が、トランクから荷物を出している。

母に促されて佳子は屋敷に足を向けるが、父の姿が側でないことに気付き、後ろにある車を振り返る。

車内に父がまだ残っていた。

「お父様、どうして降りないの？」

佳子が窓越しに父の姿を伺うと、父は目を瞑って首を傾けて上半身をドアに凭れていた。

良く見ると、頭から血を流している。

佳子は息を飲んだ。

その瞬間、車全体を包み込むように、周りから火の手が上がる。佳子は自分に迫りくる炎の勢いに驚いて、思わず車から身を引いた。

「お父様!!!」

佳子は声の限り叫んだ。

火の海に包まれる最愛の父。

気付いたら、佳子がいるところは分家の屋敷ではなく、森の中だった。

森の木々の間に挟まるように、崖から落ちていた父の乗用車。ガソリンに引火したのか、大きな音と共に車は爆発を起こし、無残な姿へと変えてゆく。

黒い煙が空へと舞いあがっていた。

佳子の目の前で起こる惨劇。

佳子は恐怖のあまり、声も出せなかった。

その時、後ろで狂ったような嗟い声が出た。

佳子が後ろを振り返ると、真っ黒なお面を被った男が一人立っていた。

着ている洋服も全て真っ黒で、頭髪も黒色で、まさしく黒ずくめだった。

彼が全身を使って大声で嗤っている。

更に彼の後ろに大勢の人が立っている。それは佳子が見知った人間たち。

彼らも同様に気が触れたように嗤い続けていた。

耳を覆いたくなるほどの激しい嘲笑が、佳子を襲う。

佳子はその異常なまでの光景に、心の底から震えあがった。

裏切り者。



憎しみが籠った彼らの目には、燃え盛る炎が映っていた。

佳子は悪夢から目覚めた。

心臓が破裂しそうな程、大きく脈打っていた。

呼吸は荒くて苦しく、さらに暑苦しかったため、佳子は思わず着ていた服の胸元に手をやって、大きく開いた。

何度か襟口を動かして空気を入れると、つかの間のことだが、それが体を冷やしてくれた。

燃えるように熱い体は汗まみれだった。

佳子が目を開けて周りを見ると、見慣れた天井が目に入った。

自分のベッドの上で、佳子は横たわっていたのに気付いた。

佳子が身動きすると、額の上から何かが落ちた。

濡れたタオルが置いてあったらしく、顔の横に落ちてきた。

髪の毛が汗で額に張り付いていて、その感触が気持ち悪くて気になったため、鉛のように重い腕を動かして、髪を退かした。そのついでにタオルも拾い、頭上にあるベッドの棚に手を伸ばしてそれを置いた。

一体いつ帰宅して自分の布団に入ったのか、まったく記憶が無かった。

そういえば、夢うつつで誰かに運ばれた気もしないではないが、さっきの夢の印象が強すぎて、記憶が定かではなかった。

家の中はとて静まり返っていた。時を刻む時計の音だけが、室内に鳴り響いていた。

窓から入る光はなく、すでに暗い。

佳子の部屋の照明は、豆電球だけが点いていた。

眼鏡をしていなかったため、壁に掛けられた時計の針は見えなかったが、すでに夜になっているようだった。

春人は佳子を送った後に、自分が目覚めるのを待たずに、きつとすぐに帰ったのだろう。

ここから帰るのに長時間かかるので、明日の通学に備えて長居はできないはずだ。

後で春人に電話をかけて、送ってくれた礼を言うついでに、詳細を訊いてみようと思った。

それにしても、身体が熱かった。

咳の発作が突然起こり、咽るように咳込んだ。

仰向けになったままだと、呼吸が苦しくて、思わず上半身を横にして俯き加減に体を傾けた。

痰の絡みが酷かった。

家にあつた薬を飲まなくては、治るものも治らないだろう。

そう思い、だるい体に鞭を打つように叱咤して、上半身を起こした。自分の姿を見下ろすと、外出していた時の格好のままだった。

汗で濡れて湿っており、肌に張り付いて気持ち悪かったため、起き上がるついでに服を着替えようと思った。

始めにチュニツクを脱ぎ、下に着ていたキャミソールが見えた。それも脱ぐとブラとショーツのみの姿となる。

下着まで汗で濡れて気持ち悪かった。迷うことなく全て脱いだ。そして、ベッドから降りて、重力に負けそうな体を、気力を奮い立たせて動かす。

目的地はすぐそばのタンスだった。たった少しの距離が、今の佳子にはとても煩わしかった。

深呼吸をしつつ、タンスの引き出しに手を掛けた瞬間、自室の外か

ら人の気配がした。

「だれ？」

驚いて佳子が声を掛けたのと同時に、部屋の引き戸が開いた。

慌てて佳子は両手で身体を隠して、入口に背を向けた。

首だけを向けて確認すると、居間から漏れる明かりを背景に、立っていた人物は予想外にも春人だった。

佳子と目があった春人は、視線を佳子の顔から一瞬だけ下へ向けると、戸が外れそうなほど物凄い勢いで引き戸を閉めた。

「えーと…。」

以前にも同じような目に遭った気がする。

しかも今回は素っ裸ですか！

佳子の顔が燃えるように熱かったのは、きっと風邪だけのせいではないはずだ。

春人と。 7 (前書き)

今回の話に、暴力的なシーンがありますのでご注意ください。

佳子はトレーナーと綿パンというルームウェアに着替えた後に、机の上に置いてあった眼鏡に気付いて掛けると、居間へと顔を出した。そこには春人がいて、珍妙な面持ちで畳の上に正座していた。整った彼の顔に不似合いな白い詰め物が、片方の鼻の穴に差し込まれている。

春人は佳子の姿を捕えるや否や、慌てて土下座をした。

「申し訳ございません。」

決してやましい気持ちがあつたわけではなく、物音がしたので心配になつて様子を見に行つただけなんです。」

ここまで潔く謝られると、佳子は怒る気力がぼろぼろと崩れ落ちるようにならなくなっていった。

もともと熱で怒るだけの体力がないのに加えて、目が覚めるまで待つていてくれた春人に対して感謝の気持ちが芽生えていたからだ。見られたと云つても一瞬だけだったし、前回と同様に事故の様なものだ。それに、怒りというより恥ずかしい感情の方が、占める割合がもともとから大きかった。

「あの、土下座は結構ですから、頭を上げてください。」

佳子がそう言うと、恐る恐るといった風体で、春人は面を上げた。鼻の詰め物のせいで、その姿は滑稽に映った。

思わず笑いそうになるのを何とか堪えて、「怒っていませんから。」と付け加えた。

その言葉に春人は安堵した表情を浮かべる。

「その鼻、どうしたんですか？」

「…ちよっと出血してしまったので。」

鼻を手で押さえつつ、気まずそうに春人は答えた。

佳子が居間にある時計を見ると、8時近くを針は指していた。どうやら長い時間、意識を失うように寝ていたようだ。

「あの、色々とお手数おかけして申し訳ございませんでした。もう遅いですし、五月さんは帰られた方がいいですよ？」

今から帰っても春人が自宅に着くのは、11時頃になってしまう。帰路へ向かう彼のこれからの労力を考えると、大変心苦しかった。

「私なら大丈夫ですよ。あの、失礼ながら佳子さんが寝ている間に勝手に電話を使わせてもらって、実家へ遅くなる旨の連絡をしましたので。」

「そうだったんですか。ご家族は心配されていませんか？」

「自分は男ですし、心配無用です。家族とえば、あの、佳子さんは母親と一緒に住まわれているんですよ？」

今日は外出されているんですか？」

里に帰っている母の存在を佳子は思い出した。

母の帰省は、里の中ではそれほど広まっていないらしい。

春人は母の里帰りを知らず、まだ一緒に暮らしていると思っていた。

「いいえ、母は実家に帰っています。当分帰ってきません。」

「それじゃあ、今はお一人で住まわれているんですか？」

「そうです。」

「そうでしたか、それでは体調不良の時は大変ですよね。」

春人は言いながら、正座をしていた足を崩して、立ちあがった。

「佳子さん、何か食べられますか？ 少しでも口に入れて、薬を飲んだ方がいいですよ。」

台所をお借りしてお粥を作ったんです。あと、口当たりの良いものと思つて、ゼリーやスポーツ飲料、リンゴも買っておきました。

風邪薬も無かつたら困ると思つて買ってみたんですが、大丈夫でした？」

「そ、そうなんですか？ わざわざすみません。」

佳子は春人の心尽くしに、感謝を通り越して恐縮した。

「何か食べられますか？」

「はい、せっかくだのでお粥をいただきます。」

重い体を動かして台所へ行こうとしたら、春人に止められた。

「佳子さんは休んでいてください。私が用意しますので。」

「で、でも、」

「辛そうじゃないですか。ベッドで寝て待っていてください。」

「は、はい…。」

春人との何度か目のやり取りで、春人が絶対に折れることがないと悟っていた佳子は、早々に従うことにした。

そもそも遠慮から来る抵抗だったので、風邪ひきの状態では、春人に素直に甘えても罰はあたらなうだろう。

春人は台所へ向かい、佳子は自分の部屋に戻ると、照明から垂れ下がっているひもを何度か引いて全灯に調節した。

ベッドに横になろうとした矢先、何やら屋敷の中で複数の怒鳴り声が聞こえてくる。

「おのれ、またきたな、ろうぜきものめ。」

「台所は俺たちの縄張りなんだぞ。」

「出ていけー!!」

そして、鳴り響く激しい物音と足音。

ガタンガタン。

ゴンゴン。

「ギャー!!」

響き渡る絶叫。

「ヒイ! やめて! お助けください!」

泣きながら制止を求める声があった。

一体、何が起きているのだろう。佳子は胸騒ぎがした。

聞こえてくるのは、屋敷で佳子がいつもお世話になっている妖怪た



ちの声だった。

一人暮らしをするようになって、今まで自分がいない時に、妖怪屋敷と化した我が家に他人を入れたことがなかったので、家に居付いている妖怪たちがどのような反応を起こすのか、全然想像もつかなかった。

佳子の意識がないうちに、家の中を好き勝手に使う春人を、敵だと妖怪たちは見なしてしまったようだ。

自分しか騒ぎを収められる者はいないと思い、よろめきそうになりながらも、壁伝いに歩いて台所に顔を出した。

春人は調理場に立っていて、入口に背を向けていた。

そのため、佳子が台所に来ているのに気付いていないようだった。

何匹かの妖怪が壁に張り付くようにして震えており、台所の中央で一匹だけびくびくと痙攣しながら倒れていた。

それはいつも佳子がよくお世話になっている調理人のシロだった。

「シロ！！！」

佳子は慌てて駆け寄って、シロの元へ膝まずいた。

「よしこさま…。もうしわけございません。こんなありさまでは、ごはんを、つくれません…。」

途切れ途切れに話すシロは、今にも事切れそうだった。

細い腕の先には、愛用しているおたまが握られていた。もう片方の手には、包丁が握られている。

あまりにも物騒な品物に、佳子は一瞬ぎよつとしたが、シロの話す内容の重大さの前では些末なことであった。

「そ、そんな！ シロがいなかったら、誰が私のご飯を作るとい

の!？」

佳子にとっては死活問題だった。

自分で調理すると、何故か食材が消し炭のようになってしまつことが多かった。

佳子の知る限り、妖怪で人間の食べ物を作れるのはシロしかない。

「佳子さん、どうしてここに？」

春人が驚いたように後ろを振り返って、佳子の姿をとらえていた。

「騒ぎがあつたから、心配になつてきてみれば、シロをこのような目に遭わせたのは五月さんなんですか？」

「包丁を持って襲つてきたのは、そいつですよ？」

佳子の非難の視線に、春人はたじろぎながらも弁明をしてきた。

正当防衛だと言いたいのは分かるが、何も瀕死になるまで痛めつけなくてもいいではないか。

「よしこさまに、ふらちなまねまでして…。」

シロが恨めしげに春人を睨みつけながら、聞き捨てならないことを言った。

「不埒な真似？」

思わず訊き返すと、シロは倒れたまま「そうなんです!」と手に持ったおたまを春人へ向けて、一際大きき声を張り上げた。

「いしきのないよしこさまに、あろうことか、こいつは、グハツ！  
！」

シロの頭部に、目にも留まらぬ速度で鍋の蓋が飛んできた。ぼろ布を被ったシロの額と思われる部分に、蓋の縁の部分が縦方向にめり込んでいる。

「キヤー、シロー!!」

シロが、ガクリと力尽きた。

叫ぶ佳子の目の前で、糸が消えた操り人形のように、シロの体が支える力を失ってピクリとも動かなくなった。

シロが持っていたおたまと包丁が、手からこぼれてぼとりと床に落ちる。

そして、シロの頭に食い込んでいた鍋の蓋が、落ちて床の上をごろごろと転がり、やがて蓋さえも力尽きたように止まった。

佳子は蓋が飛んできた方向を見ると、春人が顔色悪く立っていた。

「す、すいません、慌ててしまい、持っていた鍋の蓋を、間違えて飛ばしてしまいました。」

「そ、そんな…。」

シロが倒された事実には、佳子は動揺して言葉がうまく紡ぎだせない。思い出すのは、シロと過ごした短かった日々。

舌つたらずな話し方や、大きさが子供くらいで可愛らしく、自分に献身的だったため、比較的目をかけていた妖怪だった。

佳子の目から涙がこぼれた。

「可哀想に…。」

大好きだった台所で、よりによって鍋の蓋で止めを刺されるなんて。

「酷いわ、何も殺さなくてもいいんじゃないですか…。」

佳子は目元を袖で押さえながら、春人を責めた。

「ま、待ってください！ こいつはまだ死んでいませんよ!？」

「まだ消えてないじゃないですか。」と、春人は慌てた様子でしゃがんで膝をつく、床に座り込んでいる佳子のもとへと近づいた。

「え、そうなの？」

僅かな希望の光が見えた佳子は、死んだように動かないシロへと視線を向けた。

「はい、気を失っているだけです。しかし、受けたダメージによりしばらくは使い物にならないかもしれません…。」

「それは困ります。うちではシロしかご飯は作れないんです!」

心苦しそうな表情をした春人を佳子は見詰めた。

そもそも、どうやって慌てたら、凶器のように鍋の蓋が飛ぶと云うのだ。

ああ、これから私のご飯はどうすればよいの…。

「佳子さん、申し訳ございません。それでしたら、私が責任を取ります。」

春人はまた正座をして、佳子に謝罪してきた。  
真剣な面持ちをした春人の顔が、差し出す様にずいっと佳子の方へと近づいてきた。

「せ、責任？」

整った顔の春人の勢いに押されて、思わず佳子は身を引きつつ、訊き返した。  
春人が何を言わんとしているのか、佳子には皆目見当がつかなかった。

「そうです。佳子さんのご飯は私が作ります。」

「え？」

はっきりと言い切る春人を、佳子は目を点にして見つめた。  
間近に迫る顔にある鼻の白い詰め物は、何度見てもとても不似合で滑稽だった。

「この妖怪が佳子さんのご飯を作っていたのなら、私が代わりに用意します。」

「何をおっしゃっているんですか？

五月さんが毎日のご飯を用意できるわけ無いじゃないですか。」

春人と佳子の家はすごく遠い。

近所ならともかく、車で片道3時間もかかる距離なのに、毎日のご飯を用意するなど無理な話だ。

それに男性の春人が、料理をできるとは思えなかった。

「毎週、佳子さんの家にお邪魔して、一週間分のおかずを作って冷凍保存しておきます。」

佳子さんにはレンジで温めていただく必要はあるかもしれませんが、できる限りのことはいたします。」

「五月さんが毎週来て料理するんですか!？」

とんでもない話に佳子は肝を潰す思いがした。

毎週会おうとしたら、一体どんな出来事に彼のペースによって巻き込まれるのか想像もつかなかった。

今日だけでも、色々と酷い目に遭っていた気がする。

美形は如月だけで十分な気がする。しかも同じ美形でも、スマートで気遣いの行き届き、落ち着いた雰囲気の彼とは違って、春人は色々どこか慣れない感じがして、一生懸命な感じがした。

「そうです。ちょうど婚約しましたし、毎週のようにお会いしても

外聞的には問題ないでしょう。」

しれっと当然のこのように、とんでもないことを話す春人を、この時は信じられない思いで見つめた。

「そ、そんなの、五月さんに負担が大きすぎます！」

確かにシロがこのような目に遭って困りますが、毎週のお休みを私の為に使っていたたくわけにはいきません。」

せつかくの休日なのに、自分の気が休まらなそうだった。

「シロが治るまでの限定的なものですし、大丈夫ですよ。」

ちなみにシロは五月家<sup>うち</sup>で預かって治療いたします。里には妖怪に詳しい人がいるので、診てもらおうと思います。」

シロのことを想うと、この春人の提案は素晴らしかった。

妖怪とはいえ、きちんと診てもらえるならば、とても有難かった。

「そうですね。専門の方に診ていただけなら、安心ですね。シロの身柄は五月さんへお任せします。」

ですが、パートが休みの日は、私は内職をしなくてはならないので、五月さんに訪問していただいても、なかなかお相手が出来ないんですよ。そちらの方はご遠慮したいんですが。」

もっともらしい理由をつけて、はっきりとお断りしてみた。

今までの経緯を思い出すと、彼がこれしきのこと諦めるとは思えなかったが。

「大丈夫ですよ。お伺いしても家事をしているだけだと思うので、お客様みたいに対応していただかなくても結構です。佳子さんは自

由に過こしていてください。」

案の定、春人は佳子の言い分を物ともしなかった。

「でも、毎週往復6時間は辛くないですか？」

佳子はさらに食い下がる。

「元はと言えば、私のせいでシロが負傷したので、自業自得です。ですから佳子さんが気になさることではありません。シロが治るまでの話ですし、大丈夫ですよ。」

「でも、ガソリン代とかかかって大変じゃないですか。」

佳子はなんとか踏ん張った。

「そうですね、それじゃこうしませんか？」

佳子さんには巻物を作っていたただきたいんです。」

「巻物？ えーと、修行用のですか？」

佳子は浜辺の駐車場での会話を思い出した。

一上家が修行用の巻物を作っていると、春人は言っていた気がした。

「そうです。」

実は、ほとんどの巻物の妖怪は制覇してしまつて退屈だつたんですよ。

だから、一上家の当主としての実力を思う存分発揮した超難関の敵を作つて欲しいんです。」



佳子は風邪のために頭がぼうつとして、だんだんと言い訳を考えるのが、辛く面倒臭くなってきた。

「そうなんですか…。修行用の巻物を作るのは初めてなので、ルールとか色々とお聞きしなければならいんですが、それでもよろしいんですか？」

「はい、喜んで。楽しみにしていますよ。」

結局、佳子は話し合いで負けた。

心の中で、色々諦め気味にフツとため息をついた。

シロが治るまでの辛抱だから、多少のことには目を瞑ろうと佳子は思った。

「そういえば、シロが最期に言っていた不埒な真似って何だったんですか？」

佳子が話を戻すと、交渉に勝利して機嫌の良さそうだった春人は、一瞬にして具合の悪そうな表情をした。

「覚えていたんですか。」

春人は視線を佳子からずらして、眉間に皺を寄せながら気まずそうに呟いた。

「そもそもシロが話すのを止めさせるために、口封じとして攻撃したんじゃないですか。」

「口封じなんてとんでもない。あれは不幸な事故ですよ。それに…、私は何もしていませんから。」

佳子さんのコートを脱がせただけです。何か誤解になりそうなくとをあの妖怪が口にしようだったので、止めようとしたら、手が滑って持っていた蓋が飛んで行ってしまったんです。

嘘だと思ふなら、他の妖怪にも訊いてください。」

「本当なの？」

佳子が真横を向いて、壁際にいる妖怪たちに尋ねると、皆一様に佳子の目の前にいる春人に視線を釘付けにして、恐怖で強張った表情で、がくがくと首が落ちそうなくらい激しく何度も頷いていた。そんな彼らの様子に腑に落ちないものを感じつつも、誰も否定をしなかったので、これ以上の追及はしつこくなつて不愉快なものになると思い、諦めた。

「そうなの…。五月さんには色々とお世話になってますし、とりあえず信じますね。」

「はい、ありがとうございます。」

それでは佳子さんは部屋でお待ちください。」

春人は安心したように頬を緩めると、軽やかな動きで立ち上がり、佳子のために手を差し伸べてくれた。

佳子は少し躊躇った後にその手を取ると、春人によって引き上げられて立ち上がった。

しかし、引っ張られた力が強かったのか、身体がふらついてしまい、勢い余って春人の胸元へ飛び込む様な形で、抱きついてしまった。

「あ、ごめんなさい。」

春人の体に顔をぶつけて眼鏡がずれてしまった佳子は、眼鏡の位置

を直そうと手を添えつつ、慌てて離れようとしたが、それは叶わなかった。

春人にいきなり両手で抱きしめられたからだ。

離れようとした佳子の体が、今度はぎゅうつと頑丈な両腕で捕らわれて春人と密着する。

直に触れ合う身体から、春人の逞しい男性の体つきが感じられて、佳子の胸中が落ち着かなくなってざわめく。

そして、「佳子さん。」と思いつめたように頭上から自分を呼ぶ声。

突然の切なげな声に、佳子の鼓動は跳ね上がった。

「あの！ ゲホゲホ！！」

佳子は驚いて思わず悲鳴に近い声を出してしまったとたん、痰が絡まり咳込んでしまった。

佳子の異変に気付き、慌ててすぐに春人は佳子の体を開放してくれて、遠慮がちに背中をさすってくれた。

彼の優しい手つきに、どこか心の奥で安心を覚える。あまりの咳込み具合に呼吸が苦しかった佳子は、身体をくの字のようにならなうに前かがみになって、自分の口元を押さえた。

「大丈夫ですか？」

体調を気遣い、心配そうな声で春人は尋ねてくる。

「はい、すいません…。」

やっと咳が落ち着いたところで、佳子は荒く呼吸をしながら、何とか答えるのがやっとだった。

苦しみの余り、目には涙が浮いていた。

「さつきは、驚かせてすいません。」

「いえ…。」

どこか落ち着かなさを感じて、佳子は彼の目を見ることができずに、俯いたままだった。

春人が先程抱きついてきたのは、佳子を驚かすためだったのだろうか。

そういう単純な遊び心が理由であって欲しい、佳子はそう思ったかった。

彼が自分に思いを寄せている可能性はゼロに近いが、万が一そういうことがあると、佳子は困るのだ。

今の自分は、誰に対してもときめくつもりはない。無駄に心を揺さぶらないで欲しかった。

妖怪たちはいるが、家の中で男女二人きりなのに、いきなりあんなことをされたら、誰だって変に意識してしまうではないか。

そうでなくても、春人は見とれるくらい綺麗な顔をしているのだから、周りにどんな影響を及ぼすのか、もっと自覚を持って欲しい。

その後、気まずい気持ちで自室に戻った佳子は部屋で大人しくベッドに横になって待っていた。

春人がお粥をお盆に載せて持って来てくれて、それをいただいた後に用意してもらった薬を服用した。

甲斐甲斐しく春人に世話してもらうと、父が生前に風邪をひいた佳子を看病してくれた情景を思い出し、少し鼻の奥がツンとした。

その後、横になると薬が効いたせいか、すぐに寝てしまった。

春人の帰りを見送ることができなかったが、彼は佳子の部屋を出る際に、食器を片づけたら勝手に帰るから気にしないようにと言い残

していた。

目覚めると、月曜の早朝だった。体は昨日より楽になっていたが、熱を測るとまだ微熱があったので、仕方なくパートは休むことにした。

家の中には、寝ている間に春人がとつくに帰っていて、妖怪以外誰もいなくなっていた。

春人が約束通りに連れ帰ったのか、シロの姿も見当たらない。

居間の食卓の側に、佳子が昨日使っていたバッグと、先週忘れて行ったバッグと上着が置いてあった。

バッグの中を見ると、キャッシュカードが入った財布、スケジュール手帳などが記憶通りきちんとバッグに入っていて、何も紛失していないようだった。

これで現金を銀行からいつでも下ろすことができる。特に急ぎでお金が必要ではなかったが、手元に無いのは心許無かった。

彼が居る時の我が家は、何だか落ち着かなくて賑やかなものだったが、逆に居なくなったら静かすぎて、少し寂しい気がした。

晩秋の朝は、そうでなくても冷え込んでいる。

ストーブを点けなくてはと思い、病気の体に鞭打って動きだした。

昨晚は、春人が色々と甘やかしてくれたから、病気の身としては、とても頼りがいがあった嬉しかった。

しかし、あんなに春人が尽してくれたのは、自分のせいで風邪をひかせてしまったと思いきんでいたからだ。

誤解をしてはいけない。あれは、ただのつかの間の優しさなのだ。父がいた頃は、当たり前前に与えられるものだったのに。

無くしてから分かる、大切だったもの。

佳子との貧しい暮らしと、自分の欲望を満たす生活のどちらを取るかと言われた母は、迷わず後者を取った。

母にとって大事なのは、佳子ではなく自分自身だった。

予想していたとは云え、その事實はやはり辛かった。佳子を本当に大事に思ってくれたのは、亡くなった父だけだ。

心に宿る一抹の寂しさは、病気のせいで気が弱くなっているせい。  
佳子は枯れ葉舞い散る庭を窓際で眺めつつ、そう考えることにした。

春人と。 8 (後書き)

次は慶三郎の出番です。

## 春人の帰宅（前書き）

慶三郎視点です。

Rなおまげが後書きにあります。  
興味のない方はスルーしてください。



## 春人の帰宅

春人が一上佳子の家から長時間かけて帰宅してきた。

いつものこの時間帯なら、とつくに消灯している玄関の明かりは点けっぱなしにしておいて、春人の帰りを待ち構えていた。

既に就寝している家族を起こさないように気遣ってか、静かに鍵を解錠して玄関の戸を開ける音が響いてきた。

すぐそばにある居間から、義兄の慶三郎は玄関の方へと顔を出した。昨日買ったばかりの上着を着込んでいた春人の姿が見えた。

「春人、御苦労様。」

静まり返った家の中だったので、慶三郎は自然に小声で話した。

慶三郎の格好は、いつでも寝られるような寝間着姿だった。

「待っていてくれたんですか、すみません。」

お辞儀をしながら、春人も同じように小声で返事をした。

「指示しておいて、先に寝るわけにはいかないだろう？」

一上家の内情を探れと命令を密かに春人に下していた慶三郎は、今回は上司として部下の春人の帰りを待っていたのだ。

春人は開けた時と同じように静かに玄関の戸を閉めると、靴を脱いで上がり、上着を脱ぎながら手を洗いに行った。

慶三郎が居間のソファに座って待っていると、上着を手にした春人がやってきた。

小さな音でテレビの電源がついていたのを、慶三郎がリモコンで消

した。

「さて、さっそくだが、簡単にどうなったか聞かせてもらおうか？」

「はい。」

居間にある食卓の側に正座した春人は、簡潔に今日の出来事を報告する。

「婚約しただと？」

「思い切ったことをしたな。」

慶三郎はほくそ笑んだ。

恐らくやり過ぎだと、咎められる覚悟をしていたのだろう。春人は肩すかしを食らったように、意外そうな表情を見せた。

「お前が進んで他人に関与するのが珍しいと思つてな。」

「良くも悪くも、何事も経験だ。ただし、深入りするなよ。ミイラ取りがミイラになるぞ。」

慶三郎はそう言つて、片方の眉だけ上げて目配せした。

それに対して、春人は神妙な面持ちで、無言のまま頷く。

「まあ、この婚約の話も二木の耳に入れば、あっという間に里中に知れ渡るだろうな。」

二木の当主だけでなく、当主以外の妹たちは一様におしゃべりが大好きな人たちだった。

仲人の喜美子に婚約したことを報告すれば、慶三郎たちが大して勞せずとも、この話は瞬時に広がつて一上家の分家の耳にも入るだろ

う。

一体、彼らがどういう動きをしてくるのか、見物である。

「それにしても、佳子かのじよも思い切ったことをしたもんだ。

まあ、あの分家とは俺も関わりたくないが、慣わしを破ってまで何故分家との結婚を嫌がるのか、理由を聞いてみたいものだ。」

「そうですね。そのうち訊いてみます。」

「無理するなよ。意図してあれこれ質問をすると、勘付かれる。」

「はい、気をつけます。」

「それで、連れ帰ってきた妖怪はどうするんだ？」

「今は車のトランクに札で封じた状態で入れたままです。明日、学校から帰ってきたら、曾我さんの所へ連れて行きます。」

しばらくそこで看てもらおう予定です。」

曾我は30歳過ぎの独身男性で、役場に勤めながら、趣味で妖怪の研究をしている人だった。

趣味に没頭しすぎて、他のことにあまり興味のない彼と春人は、似たような気質でウマがあつたのか、たまに連るんで出かけているようだった。

「ふーん、うまいこと言って、彼女に取り入ったな。」

まあ、今日はもう遅いし、早く風呂に入って休んでくれ。」

「はい、そうします。」

慶三郎はソファから立ち上がると、背伸びをして居間から出て行った。寝るために2階にある自室へと向うため、床板を軋ませながら階段を上る。部屋では、妻の夕輝と娘の陽菜が布団を並べて既に就寝していた。慶三郎の分の布団も並べて敷いてある。そこにすぐに入って横になった。

先週の出来事だが、佳子が忘れ物をしたというバッグの中身を検分した時に、スケジュール帳が入っていたのには注目した。

勝手に女性の手帳を調べることが春人は躊躇していたが、慶三郎は置き忘れる方が悪いと言って、太々しくも手帳を手にとって開いてみた。

手帳は見開きのカレンダーの欄から始まり、最初の一月には何も書かれていなかった。

次々と頁をめくっていくと、5月頃から記入され始めていた。7月からは働き始めたのか、出勤日らしいメモが記されている。あと、たまに予定があることを分かるように簡潔にメモがあった。

とても綺麗で読みやすい字で書かれていた。佳子は字が上手のようだ。

「この月の絵のマークは何でしょうか？」

毎月一つしかないですね。」

「お前アホか？」

愚問を口にした春人に思いつきり呆れて、慶三郎はつい毒づいてしまった。

春人は言われた理由がまるで分かっていないのか、きよとんとした間抜け面をしていた。

「女の子なんだから、生理の日に決まっているだろう。」

察しの悪い愚弟のために、慶三郎がわざわざ丁寧に教えてやると、目に見えて春人の顔が赤く染まった。耳たぶまで赤くなっている。中学生のような反応だった。そんな春人の反応が面白くなって、調子に乗って他の月の生理日もチェックしてみる。

「へえ、彼女はしつかり毎月くるタイプなんだな。」

お前、危険日って知っているか？ 生理が来る2週間前に排卵するから、その付近がやばいんだ。

逆に安全日はな、生理が来る直前頃で、えーと、彼女の場合、今月はこの日あたりが狙い目らしいな。」

ついでに女の子の体の事情も説明しながら、カレンダーの日付を指差して教えてやると、春人は顔を真っ赤にしながら慌てていた。今どきの高校三年生とは思えない純情ぶりだ。

「な、何言っているんですか！

そんな調査と全然関係ないところまでチェックしたら失礼ですよ！」

春人の真面目っぷりには、頭が下がる。

春人の反応は十分楽しめたし、これ以上からかったら話が逸れ過ぎる思い、もう止めることにした。

「はいはい、お前もこれしきのこと動揺しない。

それにしても、何で年の途中から書き始めているんだろうな。普通、1月から書くよな？」

「病気のせいで書けなかったんでしょうか？」

「うーん、怪我をして手が使えないならともかく、手帳くらいは病気の時でも使うんじゃないか？」

まあ、それは本人しか分からないことだな…。」

一上高志が“家出”と佳子の件で口にしていたと、春人から報告を受けたのは記憶に残っている。

当主の長期の不在は、病気の療養ではなく、家出をしていたせいだったのかもしれない。

佳子は家出から帰って来てから、手帳を使用し始めた などと色々推測できるが、根拠となるものがない以上、結論が出ないのでこれ以上は考えるのを放棄した。

「あと、これを見る。こつちには使った金額が書かれている。手帳を家計簿代わりにも使っていたんだな。」

一週間の見開きページには、8月頃からその日に使ったと思われる金額が書かれていた。

その出費額を見ると、慎ましい生活を送っていることが分かる。

また、たまに人の名前が書かれていた。

春人とのお見合いの日には、“五月”という文字と、待ち合わせ場所のホテルの名前と時間が記されている。

会う予定のある人の名前と、約束した日時と場所を忘れないようにメモしているらしい。

これより先の日付には、“如月、しんご”と名前が書かれていて、お店のような名前と時間が書いてあった。

「点で区切つてあるということは、“如月”と“しんご”という二人の人物に会うということか。しかも、“しんご”とあるが、何故

これだけひらがなで書いて、名字ではなく下の名前なんだろう。」

佳子は会う予定の人物の名前を“しんご”以外、全て名字で書いている。

何かが引つ掛かった。

「呼び捨てで呼び合う仲なのでは？」

「そこまで親しかったら、名前の漢字も知っているだろう？」

「親しくない人物ということですか。」

知っていたら、多分佳子は手帳に漢字で書いていたはずだ。

男の名前で“しんご”という名前がもとからひらがなののは、ほとんどないはず。

しかも、名字を書いてないということは、下の名前しか知らないのだろうか。

通常、名字は知っていても、下の名前は知らないということが多い気がするが。

「もしくは、同じ名字の人物が多くて、下の名前ではないと誰か分からない状態なのか？」

春人はその言葉に反応して、無言で軽く頷いた。

佐藤や鈴木などよくある名前の人が、同じ環境に二人くらいいることもあるだろう。

そう云った状況はよくあることかもしれない。

しかし、佳子の場合は、背後に分家という存在がある。分家は、ほとんどが一上姓を名乗っている。

もし、彼女が会う人が分家の人間ならば、名字ではなく名前を記すのは筋が通る。

「面白くなってきたな。誰と会うのか、ちょっと店の名前を調べて見張ってみるか。」

表では分家と対立する様な真似をしていて、わざわざ陰で分家の人間と会うのも怪しい。

もし、分家の人間と会うのならば、どんな人物と接触するのか、興味が出てきた。

慶三郎はお店の名前から該当する店舗を調べ出して、電話で日時の確認をするふりをして、予約客の確認を取ってみた。そして、如月という名前で同一時刻に予約を取っていたお店を突き止めた。

彼女の友好関係を少し調べてみるのも、捜査の幅が増えるきっかけとなるかもしれない。

春人とのお見合い当日に、最後に現れて佳子を攫った男が乗っていた車の登記情報を調べてみたところ、意外な事実が発覚したのだ。車の所有者の名義は、“鬼頭 克”という人物だった。株式を上場している企業をいくつも傘下に治めた親会社の会長の名前だ。

様々な分野に進出して、手広くやっているグループ企業の代表。

まさか高齢の会長本人がやってきたとは思えないので、その大物から車を借りたのかもしれないが、そんな人物とつながりがある男と佳子が交友していたとは驚きだった。

そのあたりの裏事情も分かれば、ますます面白い。

まだ一上家の分家を探るには、程遠い情報量だが、春人が自ら進ん



で人と関って得ようとしている姿を見て、大変進歩していると感じた。

目的は調査という指令のためで、全くプライベートではないが、それでも人と触れ合ってやり取りを学ぶことは、現在の春人にとって必要なスキルになるからだ。

今回も佳子から本心を聞き出し、交渉の末に偽装の婚約話まで持ちかけたのだから、大したものだ。

五月家の人間が一上家の本家を訪れたのは初めてのことだ。しかも今後も足を運ぶ口実を作って、お邪魔する約束を取り付けたようだ。彼女の家は、泥棒にでもあったかのように凄まじく散らかっていたらしいが、その方が色々触って調べても、気付かれにくいから都合だと春人は言っていた。

なかなか春人も諜報員として、やるようになったものだ。

春人が五月家に来たのは、彼が5歳の時だった。

慶三郎と春人とは年が一回り近く離れていたもので、ちょうど自分が思春期に入る頃に、親の目が春人へ集中したのは、自分にとっては大変有難かった。思春期特有の反抗期の、親の干渉が疎ましく感じる時期だったからだ。

初めて会った時の春人は、子供のくせに死んだような暗い目をしていた。

常に怯えたように人の顔を伺い、手が頭の上に近づいただけで、反射的に顔と身体を強張らせていた。

こちらが話しかけるまで何も話さず、子供らしいところがまるでなかった。

亡くなった母が、それはそれは優しく接して甘やかせてやり、ずいぶん時間をかけて信頼関係を築いていった。

そのおかげで母に良く懐き、家の中では何処に行くにも後をくっついていた。そのうち母以外の家族にも慣れてくるようになった。そうなる、不思議と可愛くなるもので、慶三郎も目を掛けてやるようになった。

そうして、だんだんと春人が色々な感情を露わにするようになると、今度は興奮した時の痲癩が酷かった。

今まで理不尽な形で押さえつけられていた感情が、色々な形で出されるようになったため、急にうまくは制御できないものなのだと、母が言っていた。

しかし、そうは言っても現実の被害は目を覆わんばかりのものだった。

春人の特殊能力は身体的強化だった。通常の大人よりも破壊力を持つ腕力や脚力を持ち合わせていて、感情のままに振り回して、家中のあちこちを破壊し尽くした。

感情の嵐が去った後に、本人は後悔して酷く塞ぎこみ、それを母が慰めるといふパターンを繰り返していた。

慶三郎は悪魔のような子供が来た最初は思っていたが、本人が一番可哀想なのだと母は言っていて、決して見捨てたり突き放したりしなかった。

そのうち、母が言うように春人が感情の折り合いを訓練してつけられるようになってくると、野生の猛獣のような子供が人間らしくなってきた。問題を起こすことが少なくなってきた。

学校での春人は、小学校では上手くいっていなかったようだった。家族には慣れ始めていた春人だったが、入学当時は同級生にもビクついていて、すぐに泣きだすような弱虫だったからだ。

苛めというより、おもちゃにされていて、よくからかわれては泣かされて学校から帰って来ていた。

そのうち、春人は意地悪な奴らから自分の能力を活かして逃げるところを覚えて、あまり構われないように接触自体を避けるようになっていたようだった。ほとんどの子供は家の外で駆けまわっているのに、春人は友達と遊ばず、家の中や道場にしか顔を出していなかった。

中学校に上がると、今ののような性格にほとんど出来上がっていた。ちょうどその頃、母が不調を訴えたので病院で検査したところ、末期の癌であることが発覚した。

それから坂道を下るように、急速に病状は悪化して、亡くなってしまった。苦しむ期間が短かったのが、せめてもの救いだった。

そんな母が最期まで春人のことを気に掛けていた。

今の春人は大げさに言うと、自分の世界に閉じこもって、人間関係の余計なストレスを受けないように自己保身に走っているように見えた。

友達と言っても、道場に通っている同級生数人だけで、人間関係はほとんど築かれていない。

他人と接しなければ、確かに煩わしいことから逃れられることが出来るだろうが、それ以上に大事なことを得ることが出来ない。

慶三郎は春人を何とか変えたいと思っていたが、それは本人が望まない限りどうしようもない事だった。

今回、佳子によって偶然にも春人に白羽の矢が射られ、それを利用して彼を一上家の調査に駆り出したが、面白い方向に話が進んで行って、今後の報告が楽しみだった。

偽装とはいえ、一上家と婚約したことに親父は良い顔をしないだろうが、事情を説明して説得するつもりだった。

そういえば、先週くらいから、春人を目当てに従兄妹の里香が五月家に遊びにくるようになり、親父が面白がってお節介を焼き、二人

をくつつけようとしているようだった。

里香は親父の義妹の子供だった。

親父は後継ぎとして五月家の養子となったが、そもそも五月家の実子として里香の母がいて、大橋家に嫁いだのだ。

最近できたアウトレットパークに行きたいと里香が言い出し、それを聞いていた親父が調子に乗って、「それなら春人が車を出せばいい。ついでにこずかいあげるから上着でも買ってこい」と口添えして、全く乗り気でない春人を頷かせていた。

春人は親父には柔順で決して逆らわない。思春期であるにも関わらず、春人の反抗的な態度を慶三郎は今まで見たことがなかった。

親父もそれを分かっていて、言っているから人が悪い。

しかし、そのくらいのことをしないと、春人はいつまでも変わらぬのは理解できた。

里香は明るくて愛想のいい可愛い娘だ。

挨拶もきちんとしてくれる。

無愛想な春人にはお似合いかもしれないと、親父はいたく気に入っていた。

春人は相変わらず彼女にも無関心で相手にしていないが、それにもめげずに里香は積極的に話しかけていた。

あのくらいしつこくないと、春人は落とせないかもしれない。

昨日の春人は、親父の言いつけどおり里香と出かけたようだった。

日が暮れる前に帰ってきたが、嫌なことが蓄積していたのか、また春人は家の裏の雑木林で暴れていた。

所構わず癩癩を起こすことは無くなったものの、我慢できない怒りやストレスを何かしらにぶつけて発散するのは昔と変わらなかった。それでも自分で被害の少ない場所を選ぶようになったのは、大きな進歩だ。

生えている樹木に、春人は素手や足で殴りつけたり蹴りつけたりし

て、根元の幹からへし折って倒していた。

以前、春人が雑木林を風通し良くしたのは、高校へ入学した頃だった。それ以降、波風の立たない生活を送っていたのに、最近は何三郎が無理矢理参加させた奉納試合で優勝して注目されるようになったせいも、ストレスの溜まることが多くなったようだ。

うちの雑木林が、そのうち丸坊主にされなければいいが。ちなみに倒された木々は、近所の人が薪に使うと有難そうに言ってトラックに積んで持って帰って行った。

慶三郎がごろりと寝返りをうつと、その向いた側にはすぐ隣に妻の夕輝がいて、寝ている姿が見えた。

目を瞑って静かに眠っている。

そう思っていたら、夕輝の目が開いて、見つめていた慶三郎と視線があつた。

「起きていたのか？」

慶三郎が密やかに話しかけると、夕輝は首を横に振った。

「慶三郎様が入らした時に、たまたま眠りが浅くて、起きたのです。」

「そうか。」

「眠れませんか？」

「考え事をしていて、頭が冴えてしまったよ。」

そう苦笑しながら答えると、慶三郎の布団の中へと夕輝が体を動かして入ってきた。

慶三郎の足に自分のそれを摺り寄せてきた。

布団で温まっていた夕輝の足は、冷たくなっていた慶三郎の足に熱を与えてくれる。擦れ合う彼女の足の肌は、とても滑らかで、気持ち良かった。

「足先を温めると、寝つきが良くなりますよ。」

慶三郎は自分を気遣って優しげな表情を浮かべる夕輝を見つめて、幸せを感じた。

慶三郎は夕輝を抱きしめて、彼女の髪に顔を埋める。

自分と同じ洗髪剤を使っているはずなのに、彼女からは自分とは違った不思議と良い匂いがした。

それに心が落ち着くのを覚えながら、慶三郎は目を閉じた。

## 春人の帰宅（後書き）

おまけ（R15）

「あの…。」

戸惑ったような声を夕輝が上げる。  
慶三郎の手は、夕輝の服の裾から入り込んで、素肌を撫でていたからだ。

それは徐々に上に移動すると、狙いを定めて彼女の敏感な胸元の膨らみへと移動する。

「だ、駄目です、慶三郎様。」

「大きな声を出したら、陽菜が起きるよ。」

くすくすと笑いながら、耳元で囁いて夕輝の耳たぶを甘噛みすると彼女は声を堪えて肩を小刻みに震わせた。

離れようと手で慶三郎の胸を押してくるが、彼女の耳を形に沿って舌でなぞると、「んっ…」と可愛い息を漏らして、手に籠めていた力が抜けたようだった。

「夕輝が悪い。可愛いことをするから。」

「そ、そんな…。」

慶三郎を困ったような表情をして見るその瞳もそそるものがある。  
本当に困った妻だ。

慶三郎は、今日もまた夕輝と夜の時間を楽しむのだった。



学校での騒ぎ（前書き）

春人視点です。

## 学校での騒ぎ

月曜日の学校は、不愉快そのものだった。

学校でのお見合いの話はいつの間にか沈静化して、誰も尋ねて来なくなっていたが、休み時間にストーカーと化している大橋が用も無いのにやって来て、春人の頭をいつものように悩ませた。

先週の土曜日に一緒に買い物に出かけたことを、周りにいる人間に聞こえるように、大声で話していたからだ。

「デート楽しかったね。」と大橋が言っていたのに対して、何を言ってもものれんに腕押し状態だと悟っていた春人は、“デートなどした覚えはないのですが。”と悪態を内心ついていた。

春人の義父を唆して、一緒に自分と出かけるように仕向けたくせに、恐ろしいことに自分が親に逆らえないことを見抜いているようだった。

腹立たしいやり取りだったが、彼女のやり方は正直舌を巻くものがあった。

佳子との時の参考とさせてもらおう。

春人は学校が終って、家へ一時帰って夕飯を作ってから、就業後の曾我の家へ久しぶりにお邪魔した。

佳子から預かっている負傷した妖怪のシロの件だ。

曾我との付き合いは長かった。

曾我に春人の能力を買われて、妖怪の探索へ出かける時のお供として臨時のバイトをしていた。

普通の人間では行けない場所へ、春人の力を借りて足を踏み入れる

ことができるからだ。よく曾我を背負ってあちこちの山を登ったものだった。

春人もこずかいを稼げるし、色々な知識を持つ曾我の話に興味があったので、進んで引き受けていた。

定時で上がっていた曾我に会ったとたん、開口一番で「合格おめでとう。」と言われた。

一瞬、何のことを言われているのかと考えて、初秋の頃に受けた職場の採用試験に合格していたことを思い出した。

曾我とはしばらくぶりに会ったから、彼からのお祝いの言葉が遅くなっただけだった。

「ありがとうございます。」と、春人は答えた。

里にある役場の支所には妖怪用の部署がある。そこに里の出身者が配属されるのは、お約束のことだった。

来年の春からは、曾我の後輩になる予定だった。

どこか愉快そうな曾我は、好奇心に溢れた目つきで春人を見ると、

「大橋と親公認で付き合っているんだって？」と、尋ねてきた。

思わず耳を疑った。一体どこから曾我は聞いたんだらう。

しかも、いつからそんな噂が広まっていたのかと思うと、不快を通り越して恐怖だった。

血の気がひいて目の前が真っ暗になりそうだった。

誰から聞いたかと尋ねると、大橋本人から聞いたと曾我の職場の同僚が言っていたらしい。

狭い里の中では、面白おかしい噂話は、人の話題に上り易く、広まるのが早かった。

大橋という女は、外堀から埋めていって、いつの間にか自分とは周知な関係にして、逃げられないように追い詰めていく気らしい。

周到的な手際に、恐ろしくなった。

「全くのデマです。職場の人にも伝えてください。」と憚然と春人

は訂正して、治療のために妖怪のシロを預けた。

義姉から貰っていた妖怪用のお札で、シロは身動きが出来ないようにされている。

シロは視線だけ動かして、春人の方を睨んでいた。

シロの怪我はどのくらいで治るか尋ねると、頭が凹んでいるだけだし、1、2週間もあれば治るんじゃない？と曾我は適当に答えていた。

もともと存在自体が人間と違って、不可思議なものである。

完全に滅せられない限り、時間をかければ放っておいても死なずに元通りに戻ることは多い。

恐らく佳子は妖怪を激しく痛めつけたことがなくて、そういう場面を目撃したことがないのだろう。

人間と同じように妖怪を心配していた。そこに付け入り、毎週会う約束を無理矢理取り付けた。

それなのにたった1、2週間程度で治ってしまうのは、春人にとって都合が悪かった。

何かと理由をつけて佳子には誤魔化して、彼女と会う機会を引き延ばさなくては。

そして、春人が帰ろうとした時に、曾我が声をかけてきた。

「そういえば、今年の夏の山神様はどうだったの？」

曾我が云う“山神様”とは、里にある山の1つに神様がいるのかもしれないと考えられて、使われているものだった。

15年くらい前から毎年起きている現象があり、そこからそう呼ばれるようになったらしい。

夏のお盆頃になると、お菓子などの食べ物が一つ二つ、いつの間にか盗まれる事件が里のあちこちで起こったのだ。

盗られた物は、気付かなければ気にもならないお菓子の類で、全然金目のないものだった。

しかし、家の中に盗人が入ったとなれば、気分が悪い。

それで里の住人の誰かが、犯人を見張っていたところ、それは妖怪だったのだ。

里の中には妖怪が他所より数が多いとは云え、滅多に人目に触れることはない。いつも隠れて暮らしている彼らが、危険を冒してまで、たかが人間のお菓子を狙って持つていくのは、不可解な現象だった。妖怪たちはお菓子を手にしてそつと民家を出ると、山の中へと消えて行った。

その山は人の手が入っておらず獣道のみで、普通の人間には妖怪に気付かれずにそれ以上の追跡は無理だった。

しかし、盗ったものを食べずに、妖怪たちが一様に山の中へ持つていくものだから、きつと山に住む神様に捧げているに違いないと里の者は思い、気にするのを止めて、妖怪たちの行動を受け入れることにしたと云う。

ところが、ここ2年くらいは恒例の珍事が行われず、何か不吉なことの前触れかと、かえって心配になっていたのだが、今年になって盗難が再開されて、山神様が再び戻ってきたと話題に上っていたのだ。

春人も気にしていた人物の一人だった。

中学1年の時に五月家から義母へのお見舞い用のお菓子を盗まれて以降、春人は山神様にずいぶん執心で、毎年妖怪たちがお菓子を盗むたびに、後をつけていたのだ。

先程の曾我の発言は、毎年追跡に失敗したと春人が言っていたので、今年は上手くいったのか尋ねたものだったのだ。

「今年も駄目でした。」

「そうか、残念だったなあ。」

曾我は春人の報告に少し肩を落とした。

「すみません、では失礼します。」

春人はお世話になっている曾我に嘘をつき続けていることに胸が痛んだ。

本当は、山神様の姿を春人は知っていた。

ただ、春人は曾我に山神様を会わせたくないという理由だけで、偽りの報告を続けていたのだ。

妖怪たちに囲まれた神様は、他の人間に気付かれたと分かったら、二度と現れない可能性もある。

もし正直に話せば、彼の性格のことだから、きっと自分も見たいと言い出すだろう。

しかし、曾我を連れて行ったりしたら、発見される確率が高くなる。もし山神様に会えなくなったらと思うと、本当のことを彼に言えなかった。

中学1年の時に山神様を発見してから、毎年ずっと気配を殺して遠くから見てきた。

やがて見るだけで満足できなくなって、妖怪たちのように山神様の側へ行きたい、と悩み始めた矢先に急に現れなくなって、春人は自分の気持ちに気付いてしまった。

曾我に玄関先で見送られて、春人は家に帰った。

佳子の体調が気になり、家の電話を使ってかけてみた。

佳子は電話に出てくれて、まだ喉の調子は悪そうだが、熱は下がったと言っていた。あれから風邪が悪化していなくて、安堵した。

シロの怪我の具合はどうかと佳子に尋ねられたので、「頭を負傷しているため、治ったように見えてもリハビリを兼ねて予後の観察が

必要なので、1カ月はかかると言われました。」と、良心で胸を痛めながら嘘をついてしまった。

佳子の心配そうな声を聞くと、本当に後ろめたい。

しかし、彼女に会う口実が無くては色々と困るのだ。接触しなくては何事も始まらない。

積み重なる虚言、誤魔化し。

それがいつ春人に跳ね返って押し掛かるのか、まだ分からなかった。

その次の日の火曜日は、すごい騒ぎになっていた。

春人がいつも通りに学校へ行くと、朝礼前に男のクラスメイトたちによって席を囲まれた。

「お見合い相手と婚約したって本当!？」

「マジで結婚するの?」

「そんなに美人だったの?」

「大橋とはどうなったの?」

「お前って、ホモじゃなかったんだ!」

前回と同じように次から次へと矢継ぎ早に質問された。

最後の見当違いな発言をした奴に、恨みの籠った鋭い視線を送りつつも、マイペースに鞆からノートや筆記用具などを取り出して、机に仕舞っていた。

女つ毛のない春人に対して邪推している奴がいることを知っているが、面と向かって言われると、腹が立つものがある。

いつもの通り、鞆を机の横のフックに掛けると、クラスメイトたち

に視線を巡らせた。

集まっている人たちは、前回と同様に春人と同郷の者たちばかり。月曜日に仲介人の二木へ婚約の報告をしたと義兄の慶三郎が言っていたが、あつという間に広がった噂を聞きつけて、目の前にいる彼らは真相を尋ねに来たに違いない。

「婚約の話は本当です。」

今回の春人は黙秘をせずに、集まった人たちへ事実を聞かせていた。

「おおー！　すごいな！」

「噂は本当だったんだ！」

大きな歓声と共に盛り上がる教室。

その騒ぎを聞きつけて、他のクラスメイト達も何事かと集まって来ていた。

「え、五月が結婚するって!？」

「マジで？　あのぼっちゃりした隣のクラスの女と付き合っているんじゃないの？　違ったんだ？」

「いつ結婚するの？　卒業後!？」

「結婚って、早すぎない？　もしかして、できちゃった婚!？」

春人の周りには人垣が作られて、凄い騒ぎとなってしまう、教師が入って来ても誰も気付かなかつた。

「お前ら、朝礼を始めるぞ！　席につけ！」

教師は一際大きな声を張り上げると、それでようやく気付いた生徒たちは慌てたように席に戻り、ようやく場は沈静化されたのだった。



昼休みになつて、春人はいつものように自分の席でお弁当を食べる予定だった。

春人がさっきまで受けていた授業の教科書などを片付けていると、山村が来る前に誰かが騒がしく廊下を走つて来て、春人のいる教室へ飛び込むように入ってきた。

それは怒りの表情をした大橋だった。

春人は慌てて大橋から視線を外すが、彼女は一直線に春人の元へと近づいてきて、机の前に仁王立ちした。

「ちょっと、あの女と婚約したつてどういうこと？  
全然聞いていないんだけど!!」

大橋は何故か始めから喧嘩腰だった。

彼女のどなり声に、春人は再びうんざりした。

「大橋さんに話を通さなくてはならない筋合いはないと思いますが、厚かましく彼女面をしないでください。」

“親公認の仲”だと嘘を言い触らしている大橋に対して、腹に据えかねていた春人は仕返しとばかりに嫌味を言った。

「そんな言い方ひどい!

それに、あたしの気持ちだつて知っているくせに、何も言わずに他の女と婚約するなんて、ひどいよ!!」

酷いのはそつちだと言いつ返しにくくなったが、大橋となるべく関わりにくくなかった春人は口を噤んだ。

会話も恋愛も一方通行の大橋がどうしてここまで憤るのか、春人には全く理解できなかった。

ありもしないことをべらべらとあちこちに言い触らすし、そもそも大橋は自分が何をしているのか自覚しているのだろうか。

相変わらず会話の通じない大橋に春人は辟易として、聞こえるように舌打ちをする。

「すみませんが、ご飯を食べたいので、騒がしくするなら別のところでもらえませんか？」

全く申し訳ないと思っていなかったため、慇懃無礼な態度で春人は大橋に言い捨てた。

「ちょっと、話はまだ終わって無いんだけど！」

バンツと、大橋は乱暴に机の上を拳で叩いて、身を乗り出して抗議してきた。

その大きな音が耳触りで、そうでなくても苛つかされていた感情がざわりと逆立った。

何故自分はこんな目に遭わなくてはならないのか。

春人の忍耐は限界だった。

「これ以上、ただの親戚の大橋さんとお話することは無いと思いますが。」

春人は声をできる限り低くし、不快な表情を露わにした。

射殺しそうな眼光で大橋を睨むと、彼女はやっと春人の本気の怒りが分かったのか、思わず息を飲んで後退り、身体をよろめかせた。

「そんな言い方しなくてもいいじゃない…。」

大橋の目には涙が浮かんでいる。

その表情は、いかにも傷ついていますと訴えていたが、春人はそれに全く心を動かされなかった。

女が泣いても、態度を全く軟化させない春人に為す術がないと大橋は悟ったのか、くるりと春人に背を向けた。

「ハル、覚えてなさいよ！」

恨みのこもった捨て台詞を残して、大橋は来た時と同じような勢いで教室から出て行った。

ようやく大橋が去ったことに安堵した春人は、山村が教室の離れたところで立ちつくしているのに気付いた。

春人と目が合った山村は、スイッチが入ったように動きだした。

「大丈夫？」

山村はこそこそと様子を伺いながらやってきた。

「ごめん、怖くて近づけなかったよ。」

山村は身を縮ませていて、本当に怯えているようだった。

「ああ、すいません。でも、これで彼女も二度と近づいて来なければ良いのですが。」

春人は心底うんざりして山村に返事をする、鞆から弁当を取り出した。

山村は定位置となっている春人の前の席を借りて座る。

「でもさ、ああ云うタイプって後が怖いよね。逆恨みして何するか分からないよ…。」

ありもしないことも平気で他人に話せる大橋の神経は信じられなかった。

去り際の台詞を思い出すと、山村の言う通り、逆恨みをしているかもしれない。

「何気なく背筋が寒くなるようなことを言わないでください。しかし、私にこれ以上何をして無駄だと思いますが。」

「うん、そうだね。何事もないことを祈ってるよ…。」

山村も春人と同じように暗い顔をして、昼食と一緒に食べ始めた。

「そういえば、春人って婚約したんだって？」

「直接言ってくれないなんて水臭いなあ。」

「すみません。噂が広まる速度が速すぎるんですよ。婚約したのは、先日の日曜日なんです。」

月曜日に仲介人に義兄が報告をしたばかりなんです。」

「はあ、お見合いしたと思ったら、今度は婚約かあ。」

「一体、どんな事情があるの？」

「それは、今は言えないんです。」

「そっか…。」

「でも、」

「でも？」

「上手くいけばいいなと思っています。」

真剣な口調で話す春人を、山村は信じられない顔つきで春人を見つめると固まった。

今日の山村のお昼ご飯は、母親が作ったと思われる弁当で、ちょうどタコの形に細工してあるウインナーを箸で摘まんでいたのだが、春人に気を取られ過ぎて注意力が散漫になったのか、それを箸から落としてしまい、弁当の上に転がった。

すぐにおかずを落としたことに気付いた山村は、慌てて落としたウインナーを箸で拾った。

「そ、そうか。陰ながら応援してるよ。」

山村は何か取り繕うように愛想笑いを浮かべる。

春人は彼の様子がおかしいことに気付いたが、訊き出したいと思うほど特に気にしていなかった。

「ありがとうございます。」

素直に礼を言う春人。

二人は大橋が来た騒ぎを忘れて、いつものように穏やかに昼食を食べた。

## 学校での騒ぎ（後書き）

そろそろ一日おきの更新が辛くなってきたので、少し更新の間隔があくかもしれません。  
申し訳ないです。

## 会わせたい人 1

今日は一上真吾と会う約束をしていた日だった。

佳子のパートの休みにあわせて、如月は予定を立ててくれたらしかった。

まだ喉の調子は悪いが、熱は下がっていたので湿度や身体を冷やさないように気をつけて、ぶり返さないように注意していた。

今日の天気はよく晴れていたが、乾燥した風が少し強く吹いており、冷たい外気は遠慮したい体調なので、あまり外出したくない心情だった。

天気予報では、一日中降水確率が低いようなので、家にいる妖怪たちにかさばるシーツ類を洗わせて、干しておいてもらった。

シロが不在なため、ご飯の支度は自分でしていたが、佳子の朝ごはんは、食パンとヨーグルト、野菜ジュースだった。火はもちろん使っていない。

お昼前に、如月が前回使用したのと同じ車で、わざわざ家まで迎えに来てくれた。

今日は如月自身が運転をしていた。

「忘れ物は見つかった？」

車の中で如月に尋ねられた。

衰えを知らぬ妖艶な美貌の主は、佳子に微笑みながら言葉を口にしていた。

思わずゾクリとするほどの彼の魅力は、佳子の視線を釘づけにしそうになる。

欠々に如月に会うと、彼の容姿に慣れるまでに少し時間がかかる。

助手席に乗り込んだ佳子は、意識して視線を彼から外してシートベルトに向けて、「見つかったわ。」とそれを装着しながら答えた。

「良かったよ。俺の気が利かないばかりに、不快な思いをさせて悪かったね。」

如月は「お詫びたよ。」と言いながら、後部座席に置いてあった綺麗に包装された大きな袋を佳子に渡してきた。

開けてみると、ファッションに疎い佳子でも知っている程、有名なブランドのバッグだった。

「こんな高そうな物、受け取れないし、受け取る理由もないわ。」

と言つて、辞退しようとした。しかし、如月は首を横に振る。

「たまたま忘れ物が見つかって良かったけど、下手をしたらバッグを失くしていたでしょ？」

佳子が貰ってくれないなら、このバッグの行き先が無くなってしまつよ?」

と、さらりと事も無げに言うので、佳子は素直に受け取るしかなかった。

車が発進して、今日の目的地へと向かい始める。

こんな高級品を気軽に買ってしまう如月。

気がいいとは前から思っていたけど、ここまでとは思っていないなかつた。

人間ではないし、色々と事情があると思つて、詮索する様な質問を今までしてこなかったが、普段どういう仕事をしていてお金を稼いでいるのか今回ばかりは気になった。質問が喉まで出かかったが、



思いつきで探るような真似をするのは、いささか無粋な気がした。今日の彼は、スーツほど畏まったものではないが、シャツとジャケットという、ビジネスカジュアル風な格好をしている。

佳子の目利きでも分かるほど、着ているものはいつも仕立てが良くて生地も上品そうな物ばかり。

そういう佳子も初めて会う人に失礼のないように、装いには気を付けていた。

話題を変えようと、週末に春人と会って荷物を渡してもらい、偽装の婚約をしたことを説明した。

如月は驚いた上に不審がつっていたが、お互い利害が一致して手を組んでいると詳しく事情を話すと、合点がいったようだった。

先日、止むを得ず春人を家にあげてしまったが、きつと我が家の散らかり具合に呆れたに違いない。

佳子は母親がいらないことを良いことに、家探しをして父の遺品を調べまくっていた。

そのため、タンスの中身などがひっくり返っているところもあった。しかし、そこまでもしても、佳子が探しているものはまだ見つからない。

みっともないところを他人に見られてしまった。

今度春人が来る前には、少し片付けた方がいいかもしれない。

春人のことを考えていたら、自分の名前を切なげに呼ぶ彼の声を急に思い出して、胸が締め付けられているような気持ちになった。

佳子が咳をすると、如月は「風邪？」と訊いてきた。

「そうなの。」と答えると、「食事が終わったらすぐに送るよ。」と彼は体調を気遣ってくれた。

着いたところは、料亭だった。

駐車場から如月と二人で歩く。紅葉で見事に色づいた庭を通つていくと、和の趣深い平屋造りの建物が見えた。

先頭をとる如月が入口の引き戸を開けると、「いらっしやいませ。」と和服姿の店員が対応してくれた。

如月が予約をしていたので、スムーズに個室に案内された。

部屋に入った瞬間、新しいような畳の匂いがした。

少人数用の和室の部屋は、落ち着いた雰囲気なものだった。

床の間に飛ぶ鳥を描いた掛け軸が飾られ、鮮やかな朱色の花を描いた大きな絵皿が置かれていた。

重厚な木造の食卓が部屋の中央に置かれており、背もたれつきの座席が二つずつ対面する位置にあった。

窓側の障子は開けられており、見事な日本庭園が一望できるようになっていた。

如月と佳子は、並んで座った。

腕時計を見ると、まだ約束の時間にはなっていないかった。

約束通り、真吾は来てくれるのだろうか。

内心、心配しながらも運ばれてきたお茶を飲みながら待っていると、5分くらい過ぎたころに真吾はやってきた。

彼が入って来た瞬間、息を飲んだ。

写真でも見たとおり、亡くなった父かと思うほど、似ていた。

予め知っていたものの、やはり実物を見ると、驚きを隠せない。

真吾はスーツを着用していて、服装の好みは父とは異なるものの、背恰好や顔つきなど、共通点が多くみられた。

「遅くなって申し訳ないです。」

真吾は会釈しながら入って来た。

佳子がいるのに気付いて、驚いたように顔色を変えた。

話し方は父とは異なっていたが、声まで似ていた。

空いている佳子たちの向かい側の席へと近づいて、正座をすると頭を下げて「お招きありがとうございます。」と挨拶をしてきた。佳子たちもお辞儀を返す。

横にいた如月が、真吾に挨拶を返していた。

目の前にいる真吾の様子を佳子は食い入るように見つめる。

佳子は急に込み上げるものを感じて、それを押さえようとしたが、できなかつた。

感に堪えられず、涙が頬を伝う。

真吾が佳子のように気付いて、何か言いたげな視線をこちらに向けてきた。

「ごめんなさい、亡くなった父にあまりにも貴方が似ていたものですから、まるで父に再び会えたようで嬉しかったです。」

佳子はいきなり泣き出してしまった無作法を詫びた。

「そんなに僕は似ていますか…。」

困ったような表情の真吾は、佳子に尋ねてきた。

「ええ、生き写しのようです。」

父が若返ったら、今の真吾のような様子だろう。

自分より一回りくらい年上の真吾を、温かい気持ちで見守りながら、そう佳子は答えた。

その時、「失礼します。」と声が出したと思うと、襖戸が開いて正座して手をついた仲居が姿を見せた。

「お料理を運ばせていただきます。」

次々と料理が運ばれて、食卓の上を飾っていった。

その間、佳子たちは無言になる。

料理の説明をされて、「ごゆっくり。」と台詞を残して、仲居達は下がって行った。

会わせたい人 1 (後書き)

序盤に名前だけ出てきた真吾をやっと出せました。

## 会わせたい人 2

「如月さんにはお久しぶりです。そして、貴女は初めましてですね。」

真吾はまず如月に挨拶をして、次に佳子に視線を向けた。

「初めまして、一上佳子です。」

真吾の視線を受けて、佳子が挨拶すると、彼も続いて「僕は一上真吾です。」と名前を名乗った。とうとう、真吾と対面した。

「ええと、貴方は私の叔父にあたる人だとお聞きしていますが、お会いするのは初めてですね。」

「ええ、僕はその家では微妙な立場なので、子供の頃は里の外で暮らしていたんです。」

それに、屋敷に戻ってからは、あまり人前に出ることはなかったのです。」

「そうだったんですか…。」

真吾は、分家の主でもある祖父の愛人の子供だと聞いている。

庶子という身分で、同じ敷地内で暮していれば、正妻やその子供には気を遣うのだろう。

さらに父と同じ顔をした真吾は、他にも色々と苦悩があったに違いない。

「それにしても、如月さんも人が悪い。予告なしに彼女を連れてくるとは。」

「すみませんね。彼女がどうしても貴方に会いたいとおっしゃるんです。私は彼女のお願いには弱いんです。」

「そうですか、佳子さんはずいぶんと如月さんに気に入られているようだ。」

分家とは縁を切つて、彼と仲良くされていたとは。」

意味深長な笑みを浮かべて、真吾は佳子を見据えた。

何か誤解しているような言い回しだったが、佳子は敢えて否定せず、ただ笑みを浮かべるだけで曖昧にした。

如月との関係を訊かれても、復讐の協力者だと正直に言えるようなものではないので、どのように言えば怪しまれないのか、上手な答えがすぐに出なかった。

「せっかく料理が来たんですから、冷めないうちにいただいちゃってください。」

絶妙なタイミングで、如月が真吾に声をかける。

「有難くいただきます。」

料理を勧められて、真吾が箸に手を伸ばし出した。

仲居達が置いて行った飲み物は、まだ昼間だったためか、如月が頼んだのか、お茶や果汁などのソフトドリンク系のみだった。透明なポットに大量に入っている。すぐ脇に氷のボックスが置いてあった。佳子は移動すると、適当に全員の飲み物を用意して、食卓に置いた。真吾は「ありがとうございます。」と微笑みながら礼を言ってくれ

た。

佳子はそれに思わず嬉しくなり、心が浮足立つのを押さえつつ、席に戻った。

「元様が心配されていましたよ。」

政子さんとは仲直りはされないんですか？」

お椀などの蓋を開けながら、真吾が質問してきた。

真吾は佳子の祖父のことを“元様”と呼ぶようだ。

父とは呼ばないところに、彼の言う微妙な立場が窺えた。

「ええ、」

佳子も箸と口を動かしながら、答える。

「今のところは。」

それに、母はお爺様のところにいた方が幸せだと思えます。好き勝手に暮らせますし。」

これ以上の母に関する追及は勘弁してほしくて、ぎこちない笑みを浮かべて言い切った。

今日は、母のことは思い出したくなかった。せつかく良かった気分が、下向き加減になってきた。

「しかし、それも役割を果たしていたらですよ。」

貴女の婚約話が噂されて、親としての監督責任を問われ、政子さんは窮地に立たされています。」

「そうなのですか？」



箸を動かす手を止めて、佳子は真吾を見た。

不仲な親とは云え、何も母の不遇を望んでいたわけではなかった。佳子は思わず心配になって尋ねると、真吾は「ええ。」と頷いた。

「勝手に高志さんとの婚姻届を役所に出されるかもしれませんが。役所に受理しないように届け出をした方がいいかもしれませんね。」

「そうですね。わざわざご忠告ありがとうございます。」

佳子は引きつった笑顔を作ることしかできなかった。

佳子はまた憂鬱な種が増えた気がして、気分が塞いだ。

「それにしても、貴女は…。」

真吾の目はどこか憐みを含んで佳子を見ていた。

「先代の当主が亡くなって、傷心だとは云え、ずいぶんと無茶をしていますね。」

「無茶ですか？」

「一族の決定にことごとく逆らっておいででしょう。」

「一体何を考えられているんですか？」

真吾は単刀直入で尋ねてくる。

誤魔化しは効かないとばかりに踏み込んできた。

「結婚は個人の自由じゃないですか。勝手に結婚相手を決める母親の考えについていけないだけです。」

嘘は言っていないので、佳子は堂々と胸を張って言い切った。  
そんな佳子の様子を、目を丸くして真吾は見て、面白そうに声をあげて笑い出した。

「ハハハ…、貴女は里の外で育ったせいかな、あの家の洗脳には染まっていないようですね。

あそこの女は、みな一族の言いなりですよ。逆らうとあそこで暮らしていけませんから。」

洗脳という真吾の言い回しに、佳子はなるほど腑に落ちた。  
母の物の考え方は、そう言っても過言でないくらい偏っていた。  
一族の男と結婚するのが当たり前で、他の考えが入る余地はまるでない。

それにしても、真吾は分家の人間だと云うのに、客観的にあの家のことを語っている気がした。

里の外で育ってきたと云うし、彼も佳子のように分家にあまり染まっていないのかもしれない。  
そう思うと、少し安心した。

「話は変わりますが、佳子さんは僕に何か尋ねたいことがあるんじゃないですか？」

真吾の方から佳子の本題を尋ねて来てくれた。

真吾を見ると、父とそっくりな彼の表情は真剣だった。

「はい。お言葉に甘えて率直にお伺いしますが、貴方は私と腹違いの兄妹なのですか？」

「直球で訊きに来ましたね。」

真吾は苦笑した。

「しかし、その答えを知る者は誰も生きていないんですよ。私の産みの母も、貴方の父親も亡くなっているのですから。」

「母親からは何も聞いていないのですか？」

「ええ、父親と一緒に暮らせないのは何故だろうと子供心に思っていたくらいですが、元様が時々訪ねて来てくれるので、そのうち母は愛人だということに気付いたんです。」

しかし、経済的に困っていなかったし、大学まで通わせてもらったので、特に不満に思うことはありませんでした。」

「そうなんですか……。でも、貴方は私の父に似すぎていて、思わず血縁を疑ってしまったのですが。」

「親戚同士ですから、顔がたまたま似ることもあるのではないのでしょうか。」

真吾は本心で言っているのか、誤魔化しているのか、佳子には分かりかねた。

しかし、真吾が質問を受け入れている間に、他に問いただしたかったことを口にしようと急いだ。

「真吾さんは、父が亡くなる数日前に分家の屋敷で父と会っていましたよね？」

佳子は緊張で心臓が激しく脈打つのを感じながら、真吾の反応を伺

う。

「さあ、昔のことなので、記憶が…。」

「一上真吾さん。」

如月が真吾の言葉を遮って急に名前を呼んだ。

真吾は如月に視線を送る。真吾と如月は目線が合った。

如月は真吾の目を捕えたまま、言葉が続ける。

「彼女にとって大事なことなので、申し訳ないですが、正直に話してもらえませんか。」

「え、ええ…。」

真吾の瞳が揺らいだ気がした。

「貴方の父、先代の当主にはお会いしたことがあります。偶然里のお屋敷で出会いました、僕の顔を見て驚いていました。それで色々質問をされました。」

如月は真吾に目の力を使ったようだった。

誤魔化そうとして、忘れたと嘘をつきかけた彼の口から過去が語り始められた。

あまりにも自然なやり取りのうちに、如月の力が作用していたので、佳子のようにあらかじめ知っていなければ、気付くことができないだろう。

「ええ、貴方の出生についてですよね？」

「そうです。母の名前や、僕の誕生日、父親についてです。」

「父は貴方が自分の子供かもしれないと言っていないませんでしたか？」

「はい。政子さんが嫁に行く少し前まで、母は本家にご奉公にあがっていたようです。その時に、深い関係にあったと先代から聞きました。しかし、僕は元様に認知してもらっていません。本当のことは亡くなった母にしかわかりません。」

「でも、貴方は父にそっくりだわ。父もそれで貴方が自分の子供だと確信したのでしょう。」

「父親が誰だったにせよ、愛人の子供と云う、僕の立場が変わることはありません。」

「どうして？ 父の子供ならば、本当の後継ぎは、本来ならば長男の貴方だったはずですよ。」

「いいえ、僕は血の薄い劣り腹の母から産まれたので、血の濃さでは貴女には敵いません。」

もし仮に貴女と父親が同じでも、後継ぎには到底なれませんでした。」

「父は亡くなる前に電話で私にこう言いました。“佳子に会わせた人がいる”って。」

父のことだから、貴方を紹介したかったんだと思います。自分の子供として。」

「それは…。」

「父は貴方を家族として迎えたかったのでしょうか。そうでなければ、

私に紹介しようとは思わなかったはずですよ。」

「仮に僕が貴女の兄だとしても…、一族は僕を後継ぎとしては認めなかったでしょう。」

「貴方が言うのだから、きっとそうなのでしょうね。」

でも、父はどんな手を使ってでも、認めさせたかったんだと思います。」

「どうして…。」

「父の真意は父にしか分かりません。」

父は亡くなる前日に、母との離婚と、貴方を後継ぎとして認めるよう、お爺様に迫っています。」

そして、家へと帰る途中で父は事故で亡くなりました。」

佳子が語る内容を聞いた真吾は、平静だった様子を一変させて顔を強張らせた。

「佳子さん、貴女は何をどこまでご存じなのですか？」

「今まで話したこと全てです。」

雰囲気張り詰めさせて、声を低くした真吾に、佳子はたじろぎもせずに落ち着いて答えた。

含みのある言い方をしたのは、わざとだった。

彼に分家へ不審な感情を持たせるために、意図的にそう話した。

そのため、自分の発言によって、彼が何かしら反応することは、予測済みだった。

「貴女の目的は何ですか？」

「私は父の望みをかなえたいのです。父と同じように貴方を家族として迎えたいのです。」

佳子は真実の一つを正直に話した。

復讐というもう一つの理由は、まだ言うべきタイミングではないため、伏せてはいたが。

「貴女の気持ちは嬉しいのですが、これ以上貴女には無理なことはして欲しくありません。」

それに、今更僕のことと身を騒がしくして欲しくありません。

僕は今の生活で満足していますから。

それに、貴女の父が亡くなっている以上、認知についてはどうすることもできないでしょう。」

「法的にお爺様の子供のままでも、問題ないのではないのでしょうか。そもそも血縁的に私の叔父であって、全くの他人と云う訳ではないです。」

「どうして僕を当主にしたがるんですか？」

もしかして、好きな男と結婚したいからですか？」

「私の結婚話は、全然関係ないですよ。全ては父のためです。」

貴方に当主として治まっていただければ、貴方が父の子として認められたことと同じになり、父の望みを叶えることに繋がると考えています。」

「今日出会ったばかりなのに、そんなに僕のことを信用していいのですか？」

それに、僕が当主になったら、貴女の立場が無くなるのでは？」

「私の場合は当主と云っても、里に住んだこともなく、実情を何も知らされていなくて、お飾り同然なのです。」

里に詳しい貴方がなった方が余ほど相応しいと思います。」

それに、貴方とは今日初めて会ったと云うのに、全然他人という気がしないというか…、父が家族になりたいと願った気持ちが、私にもよく理解できます。」

「そうでしたか…。佳子さんにそこまで言っていただけで嬉しいです。」

しかし、貴女は一族が認めた唯一の正統後継者です。貴女が産む後継者を一族は欲しています。」

貴女がそれに逆らおうとするならば、一族はどんな手段に出るかわかりません。」

僕は貴女に恐ろしい目に遭って欲しいとは思っていません。」

「どんな目に遭っても、決して私は意思を曲げません。」

「そんなことをおっしゃらないで、一族に対してこれ以上は事を荒立てないでください。」

今ならば、まだ十分間に合います。」

「私は…。」

「佳子さん、貴女が僕を兄として慕ってくれるならば、僕の意見も少しは聞き入れてくれると嬉しいですよ。」

佳子は真吾の言葉に頷くことができなかった。

佳子が何も答えなかったので、気まずい沈黙が場を支配した。



彼が佳子の考えに同意してくれず、分家に逆らうことは反対のようだった。

父によく似た真吾。

彼の言葉を素直に受け入れて、彼の歡心を得たい気持ちもあった。しかし、分家の人間とは結婚できない。

恐らく分家は、今も罪を犯している。

父が望んだように、家族として真吾を迎えて、そこから彼を救いたいと、佳子は願っていた。

しかし、真吾は分家に逆らうのを恐れているようだった。

佳子とは違い、分家に深く関わっている立場ならば、簡単に裏切れないのも無理はない。

佳子は、事を急ぎ過ぎたと感じた。

亡き父を彷彿させる彼に親しみを覚える自分とは違い、彼にとって佳子は縁のないただの他人と思われても仕方ない存在なのに。

彼は会ったばかりの自分のことをよく知らないのだから、説得に応じないのは仕方がないことだ。

「ごめんなさい。真吾さんの立場を考えずに、色々と言って困らせてしまつて。」

「いえ、気にしてはいませんよ。」

亡くなった父親のことを大切に思う貴女の行動は素晴らしいと思います。それに僕のことを家族のように思ってくれて嬉しいですよ。

真吾の優しい気遣いが身に沁みた。

こうやって佳子に対する思いやりの気持ち、彼にあることを感じ

た。彼は父と同じように、相手の気持ちを推し量れる人だ。彼に対する期待がどんどん膨らむ。

「…あの、また機会があったら私と会っていただけませんか。」

今回は説得に失敗した佳子だったが、真吾とはもっと親交を深めたいと願い始めていた。

仲良くなって、真吾の信頼を得ることができたら、彼は考えを変えてくれるかもしれない。

「ええ、喜んで。」

真吾は快く了解してくれて、さっきの深刻な話をどこかに置いてきたように、親しみを込めた笑顔を佳子に向けてくれた。

佳子は、父の面影そのものの彼の笑顔に感極まった。

真吾といると嬉しさがこみ上げてくるのは、やはり彼には自分と同じ血が流れているからだろうか。

仮に説得には成功することはできなくても、真吾を兄と慕うことができ、仲良くなって心を通わせられたらと、願わずにはいられなかった。

## 如月の回想 佳子の誓い

その後、佳子は真吾の近状を尋ねたり、世間話をしたりして、顔合わせの食事は終わった。

すでに彼は結婚していて、子供もいるらしい。

二人の娘が可愛くてしょうがないと、最後は穏やかな会話で締めくくられた。

佳子は真吾に別れた後でも、嬉しさのあまりに少し興奮気味で浮かれているようだった。

彼女は亡くなった父にそっくりな彼に、父親を重ねているのだろう。わざわざ彼女のために顔合わせの場を設けた甲斐があったが、初対面の真吾にいささか入れ込み過ぎている気がした。

「彼はどうだった？」

運転してきた車に二人で乗り込んだ後に、如月は佳子に尋ねてみた。如月の視界に、機嫌良く笑みを浮かべている佳子が映った。

「分家の外で育った人間だからかしら？」

私の母みたいに偏った考え方をしていなくて、すごく安心したわ。それに、優しいところは父に似ていて、やっぱり親子だと確信したの。

彼に会えて嬉しかった。本当に今日はありがとう如月。」

手放して感謝されて、嬉しくない訳なかった。

こんなに上機嫌な佳子を見たことがあっただろうか。

彼女の様子に如月も満足だった。

「そう言ってもらえると、骨を折った甲斐があったよ。」

そういえば、父親が亡くなっている以上、認知についてはどうすることもできないって彼が言っていたけど、死んでから3年以内なら認知はできるんだよ?」

「死んでるのに出来ちゃうの!?!」

「子供が望めばね。」

「そうなんだ…。まだ父が亡くなってから3年経ってないから、可能だったのね。」

それにしても、如月って意外なことを知っているのね。」

「伊達に長く現世にいないよ?」

佳子自身は家族になることを希望していて、本日真吾に伝えるという目的を達成することが出来たが、彼自身はそれを望んでいるように見えなかった。

変化を恐れていて、揉め事を起こされるのを避けているようだった。佳子は今後どうするのだろうか。

「彼への説得はつづけるの?」

「うーん、それは悩んでいる最中なの。」

そもそも彼は会ったばかりの私のことを信用していないでしょうし、彼の言う通り、一族はこのままでは彼を後継ぎとして認めないでしょう。

私がいなくなれば、次に血が濃いのは彼だから、後継ぎ候補に上がるでしょうけど。」

「まさか、また家出するの?」

その時は、喜んでまたお付き合いでするよ?」

「いやね、まだやることあるし、いなくなったりできないわよ。父を殺した奴をこのまま野放しにはできないわ。」

そう言つて、如月から視線を逸らした佳子の表情は、張り詰めた様子で微かに眉間に皺が寄っていた。

それを見届けた如月は無言で車のエンジンを掛けた。

彼女の復讐心は全く衰えていない。

そのことに少し安堵しながら、車を発進させた。

父が殺されたと、出会ったばかりの自分に衝撃な事実を告げた彼女。一旦は止まった彼女の涙だったが、辛い内容を話すうちに、また心が乱れたのか瞳から溢れ出ていた。

「ごめんなさい。」と言つて、彼女はおしぼりで流れ出た涙を拭いていた。

「真つ黒な仮面をかぶった黒衣の男が、お父様の車に近づいてきたんですって。」

事故の衝撃で意識のないお父様を助けもせず、ただ傍から見ているだけだったって…。

そのうち、車が燃え出してしまつて、父は見殺しにされたのよ…! しかも、死んで身体から離れた魂魄すらその男の手で殺されたの

…。」

「魂も？」

「そうなの…。男が紙を取り出すと、そこから突然化け物が現れて、無防備なお父様の魂に襲い掛かったそうなのよ…。」

それって、私の一族が持つ力と同じなの。」

「身内にやられたの？」

崖から転落した車の事故現場にすぐに現れるとは、もともとそこで事故が起こると分かっていた待機していたのだろう。

もしかしたら、事故自体その男によって引き起こされたのかもしれない。

「そうなのかもしれない…。」

でも、なんでお父様が殺されなくてはならないの？

殺されなくてはならないほど、恨みを買うような人ではないのに

「！

彼女の目に浮かぶのは、父を突然殺されて奪われた怒りと苦痛の感情。

「お前はその答えを知りたいだけなの？」

「え？」

突然何を言い出すのかと、非難に近い怪訝な眼差しを自分は彼女から向けられた。

「俺が言いたいのは、その答えを知って、お前がどうしたいのかが問題だと思って。」

「犯人をどうしたいの？」

「犯人を、どうするかですって？」

彼女は如月に言われるまで、そこまで考えが及んでいなかったのだらう。

言葉を反芻したまま、表情が固まった。

体の動きまで止まり、視線は宙を見つめたままだった。

「犯人に復讐をしたいの？」

それとも、そういうのは危ないから止めておく？

放っておくなら、別に答えを探す必要はないんじゃないかって。

「

「犯人を放っておくですって？」

そんなことできるはずないじゃない…。」

佳子の声は小さかったが、その口調は激しく怒っていた。

彼女から伝わってくる負の気迫は、側にいる自分にまで影響を及ぼしてきた。

表面の皮膚に細かな電気が走ったみたいに、痺れる様な痛みを感じていた。

自分までも不安定な気持ちになり、まるで荒れ狂う嵐の中に放り込まれたようだった。

彼女が及ぼす作用の凄まじさに、内心動揺を覚えた。

「…それじゃあ、どうするの？」

冷静を装って自分が問いただと、彼女は自分の目を見据えて口を開いた。

「犯人に相応の報復を与えるわ。」

父を殺した奴が、のうのうと暮らしているなんて許せない！」

佳子は復讐を誓った瞬間だった。

そして、彼女がそれを望んだからこそ、自分が彼女の力になれることを確信し、彼女のそばに居続けられる理由ができた。

「それならば、俺が力を貸そう。」

真実を知りたければ、俺がその方法を知っている。」

自分は身を傾けるように彼女に近づけて、その耳元で囁いた。

「本当？」

彼女が驚いたように目を見開いて、間近にある自分の顔を見た。

「そつだよ。力になると言っただろう？」

俺を頼ると良いよ。決して悪いようにしないから。」

決して偽りがないと伝えたいがために、真剣な表情で彼女を見つめ返した。

「でも、どうして、貴方は私にそこまでしようとしてくれるの？」

貴方とは、さっき会ったばかりなのに。」

ここまでのこのこ疑いもせずについてきたのにも関わらず、彼女は  
まだ自分に警戒をしているのだろうか。

今更だと思いなから、それでも答えることで彼女が安心できるのなら、  
何度でも彼女の気が済むまで真面目に答えようと思った。



「袖振り合うも多生の縁というか。俺にとって、もうお前はただの他人ではないよ。」

「私たち、まだお互いの名前も知らないのよ？」

そう言われてみれば、自己紹介もまだだったことに気付いた。自分にとって、名前なんていうものはどうでも良いものだった。長い時の流れに身を任せていると、自分にとってみれば短い時間しか生きられない人間の名前など、興味がなくてすぐに存在自体忘れるか、エピソードは断片的に覚えていても、顔や名前は記憶の渦に飲み込まれて思い出せなくなってしまう。命よりも大事だったと思っていた相手すら、もう臙げなものだといふのに。

「名前なんて、ただ他人を区別するだけの手段に過ぎない。

別にそんなもの知らなくても構わない。お前と今日偶然出会えたことが、なにより重要なことだ。」

自分がそう言いきると、彼女は啞然としていた。

彼女の手を取り、両手で優しく包み込んだ。

彼女が生きている間だけ、自分が彼女を覚えていればいいだけなのだ。

どれほど焦がれるように求めても、彼女が死んでしまえば、名前も姿もいずれ自分の中から消えて、お終それまでいなのだ。

「私の名前は一上佳子。貴方の名前は？」

彼女の名前は、“いちがみよしこ”か。

意中の女の名前を聞いても、さして心を動かされるものはなかった。

自分の名前を訊かれたが、今使っている名前は所詮偽名だった。その偽名すら、すでに何個目だったか忘れた。本名はいわずもながである。

一時の関係で終わらせたくない彼女に、今の嘘の名前を教えても意味のないものを感じた。

「俺の名前は、お前の好きに呼んで欲しいな。」

「ええと、それじゃあ、2月に出会ったから“如月”っているのはどう？」

名前を考えるようにいきなり要求されたにも関わらず、彼女の名付けの閃きの速度は早かった。

「いいよ。」

如月という名前のセンスは、結構良かった。

思いのほか気に入って、彼女に笑顔を向けると、自分が掴んでいた彼女の手が無言で逃げて行った。

「如月は、さつき真実を知る方法を知っているって言うていたけど、本当なの？」

彼女は切り替えが早い。さっさと自分の本題に戻っていった。そういうところも、気に入った。

「そつだよ。当てがあるんだ。」

今日は遅いから行くのは明日になるけど、大丈夫？」

「ええ、問題ないわ。学校の方はもうすぐ卒業だし、少しくらいサ

ボっても、大丈夫よ。」

彼女はぎこちなく笑みを見せた。

彼女にとってみれば、現在の心情は学校どころではないのだろう。

父の死の真相に近づけるチャンスを、自分が握っているのだ。

彼女の関心が自分に向かっていていると思うと、愉快でたまらない。

この時の彼女は“少しくらい”と言っていた不登校が、2年越えの家出になるとは想像もついてないようだった。

## 如月の回想 佳子の誓い（後書き）

徐々にお気に入り入りの件数が増えていて嬉しいです。  
掲載作品中、過去最高になりました。

これからもよろしくお願いします（ペコリ）。

## 母への警戒

如月が運転する車は、佳子の家に近づいていた。当初の予告通り、真吾と別れた後は寄り道もせず安全運転で帰路を走っていた。

「体調が大丈夫なら、役所も付き合っけど、どうする？」

赤信号で車を停止させた際に、如月が佳子に尋ねてきた。

「役所？」

佳子は首を横に動かして如月を見た。

「そう、さつき無断で結婚届を出されないように何らかの措置を取った方がいって言われたばかりだろう？」

「せっかくだから付き合っよ。」

そう言われて、佳子は真吾との会話を思い出した。

確かに彼は不受理届でも出した方がよいと言っていたはずだった。

「じゃあ、お言葉に甘えて、付き合っってくれる？」

「せっかく忠告をいただいたんだし、やっておくわ。」

「了解。」

「あと、ちょっと家に寄ってもらえる？」

「必要そうな物とか持ってくるから。」

届けを出すなら、保険証などの身分を証明するものや、印鑑など必要になりそうなものを持っていくことにした。

家に寄ってそれらを持ち出すと、再度如月の車に乗って、役所へ向かった。

戸籍を見てみると、幸いなことに佳子はまだ独身だった。

真吾のアドバイス通り、勝手に婚姻届を出されないように届けを出して、また如月に家まで送ってもらった。

真吾がこのような助言をしたということは、彼はどちらかということ佳子の味方なのだと思い、佳子はますます彼に好感を持った。彼も自分を案じてくれている。

そう思うと、何故もつと早く、父が亡くなるより前に彼と出会えなかったのか、それが残念で仕方なかった。

父と真吾と、佳子の三人で会えたら、どれほど嬉しかっただろうか。

家に再び入ると、留守番電話がメッセージを録音しているのに気付いた。

電話機の再生ボタンを押して、自室へと向かう。

引き戸を開けっぱなしにしておいて、着ていた服を脱ぎ始めた。

機械がかかってきた時刻を読み上げる。それを聞きながら、普段着へと着替え始めていた。

メッセージの再生が始まり、「佳子さん……。」と聞き慣れた声が佳子の耳に入ってきた。

思わず、手を止める。

流れてくる音声に全神経を集中させた。

「貴女が婚約したっていう噂が真しやか流れているんですけど、本当なんですか？」

お見合いはともかく、婚約なんて冗談では済まされないのですよ！？

本当のところはどうなのか、きちんと説明してください。

電話待ってますよ。」

母の怒気が籠められた声に、一気に気分は底辺に叩きつけられた。急激なストレスで、佳子の胃が鷲掴みにされたように、ぎゅうと苦しくなった。

いい加減に自分のことを放っておいて欲しかった。

いつまでこの干渉が続くのだろうか。

真吾が言っていた“監督責任”を母が務めているからだろうか。

母は自分の地位を守るために、我が子を支配しようとしているのか。母が自分の言いなりにしようとするのも、全て自分の都合の良い人間を作るためなのか。

佳子は着替えを済ませて、ふらふらとした足取りで仏間へと向かう。仏壇の上の天井付近に飾られている遺影に視線を送る。

父の写真がそこに飾られていて、佳子は仏壇の前に力尽きたように座り込んだ。

父は亡くなる前日に分家の祖父に要求を突き付けたが、それが叶わないならば一上家がひた隠しにしている罪を公にすると脅迫したのだ。

そうまでしてまで、父は望みを叶えたかったのだ。

脅迫のネタとして、きつと何か証拠のようなものを持っていたはずだ、と佳子は考えていた。

それなのに、そう云ったものは懸命に探しても未だ見つかっていなかった。

見つからないままだと、犯人を追いつめる道具がなく、言い逃れされてしまう恐れがある。

せっかく母を家から追い出してまで、捜索を続けているのに、成果の無い作業に望みが薄れ、諦めが生じていた。

佳子は姿勢を直して正座をすると、線香をあげて仏壇に手を合わせた。

「お父様、きつと見つけ出してみせます。」

佳子は再び自分の気持ちを引き締める。

写真の父は、いつまでも変わらぬ表情で佳子を見下ろし続けていた。



## 如月の回想 佳子と洋館

佳子を家に送ってから、如月はこれから用事があるところへ車を走らせていた。

彼女と別れた後は、いつも胸の中が言いよつのない焦燥感に駆られる。

まだ彼女の側に長くいられない自分に苛立つ。

偽装とは云え、自分以外の男と婚約してしまった彼女。

一族から求められる結婚に追い詰められたとは云え、早まったことをしたのではないか。

身勝手な憤りが、身体を駆け巡る。

佳子の計画では、いきなり仇打ちに行くのではなく、犯人を追いつめることができる証拠を探すことから始めた。

それを突きつけた上に公開することで、社会的からも制裁を受けさせたいらしい。

彼女は徹底的に犯人を断罪することを望んだのだ。

それによって、飾りとはいえ一族の長と云う自分の立場すら失くす可能性もあるというのに。

佳子が知っている情報は、あくまで状況証拠のみだ。

知り得る状況でしか、犯人が推測できなかったため、黒と断定する前に誅するのは、彼女にしてみれば抵抗があったのだろう。それに、最悪の場合、白を切られることも考えられる。

初めて自分と会った夜、彼女は一旦家に帰った。そして、次の日に再び自分と合流して、とある場所へと向かった。

自分が連れていったのは、廃墟のような洋館が建っている場所だった。

屋敷の周囲を隙間なく壁の様な無機質な高い塀が囲み、入口にある錆ついた鉄格子の門は固く閉ざされていた。門柱の上には、厳つい表情をした奇妙な生き物の金属でできた置物が両側にそれぞれあり、門番のようだった。

何人たりとも、彼らは敷地への侵入を許さないかのように見えた。

「主に用があるので、開けてくれないかな？」

自分はその門番を見上げて、それに話しかけた。

すると、置物と思われたものは首を動かして自分を見ると、「名前は何？」と尋ねてきた。

「多分、美人で優しい鬼が来たっていえば分かるはずだけど。」

しばらく、彼女と二人でただ立ちながら待っていると、門が自動的に開いた。

「入っていいそうだな。」

門番は自分にそう話しかけたのを最後に、置物のように再び動かなくなかった。

自分が敷地へと足を進めると、後を追うように彼女もついてきた。

入口まで石畳が続いているが、長い間管理されずに放置されていたせいで、石が敷き詰められていないむき出しの土の部分は、雑草で覆われていた。

冬の季節だったから、雑草が寒さで枯れていて、まだマシな状況に違いない。

自分たちが建物の入り口に近づくと、大きな木製のドアが独りでに開いた。

僅かな隙間の向こうからは、誰の気配もしない。

自分はドアノブを掴んで、大きく開け放つ。

視界に飛び込んできたのは、屋敷の中央に位置する二階へと上がるための開放的な吹き抜けの階段。

くすんだ赤色の絨毯は、長年の歳月により色褪せて、かつての色の名残もなく劣化していた。

高い天井には、埃と蜘蛛の巣だらけのシャンデリアが飾られていて、傾いていた。

「おーい、どこにいるんだ？」

自分が大きな声で問いかけると、しばらく間を置いてから、「二階だ。」と何処からか小さな返事が返ってきた。

自分は彼女の手を取って、階段を上って行った。

彼女は賢明なことに何も話しかけてこなかった。

二階のフロアへ行くと、長い一列の廊下が続いていて、それぞれ左右にある部屋へと行き来できるようになっていた。

全てのドアが閉まっていたが、自分たちが見守る中で、一つの部屋のドアが自動的に開いた。

まるでこちらへ来るように促す様に。

自分たちは、その開いた部屋へと向かって行った。

その部屋に足を踏み入れると、部屋の中央にロッキングチェアが置いてある以外、何も家具のない部屋だった。

その椅子は、誰も座っていないものにも関わらず、ぎしぎしと木の軋む音を立てて、揺れ動いていた。

周りを見渡すと、壁の一面に額縁に入った絵が一つ飾られているのに気付いた。

それは誰かの自画像らしく、黒い燕尾服を着た中年の男の絵が描かれていた。

「そこにいたのか、舟子<sup>ふなこ</sup>。」

絵に向かって話しかけると、「舟子と呼ぶな、色鬼<sup>いろおに</sup>。」と、苦々しく絵の中の男が話し出した。

「相変わらず、女を侍らしおって。しかも、今回の女は、なかなか良いじゃないか。」

「羨ましいだろう。」

憎まれ口を叩くと、舟子と呼ばれた男はフンツと鼻息を荒くした。彼の本当に悔しそうな様子に、僅かな優越感に浸る。

「今日は女を見せつけに来たのではあるまい。何の用で来たんだ？」

自分は薄く笑った。

「彼女の父の過去を見たいんだ。お前なら出来るだろう?。」

舟子の目が怪しく光った気がした。

「出来なくはないが、彼女は了承しているのか？」

自分が彼女を見ると、親切でない会話のやり取りがよく分かっていないため、首を傾げて自分を見つめ返していた。

「こいつなら、お前の父親の過去を覗くことができる。しかし、その代わり、お前の時間が犠牲になる。」

「犠牲？」

自分が説明すると、彼女は疑問点を口に出した。

「そう、お前にとっては、父親の過去を見ることは一瞬のことかもしれないが、現実に戻れば何年も時間が経っているんだ。」

「過去に戻れば戻るほど、その過ぎ去る時間は多くなるぞ。」

舟子も自分に合わせて、説明を足してくれた。

「それじゃあ、1週間くらい前の過去を見たら、現実にはどのくらい経ってしまうの？」

彼女は恐る恐る尋ねてきた。

「1、2年は経っているぞ。」

「そんなに!？」

彼女は驚いた声を上げた。

「まだ肉親だからいいものの、全くの他人だったら、もっとかかる場合もあるんだぞ。」

舟子の説明に彼女は困惑している。

「そんなことを言われても…。」と彼女は呟いて、結論が出せずにいるようだった。

「悪いけど、彼以外に過去を知ることができる人物は知らないんだ。それに、お前の父親が殺される前あたりからの行動を直接見ることができれば、何か犯人のヒントを得られるかもしれないと俺は考えている。」

父親が外出したのは、いつから？」

殺人の場合は、自殺、過失致死、計画的な謀殺、故意の故殺など色々であるが、妖怪の目撃情報から、今回は謀殺に近い気がした。身内の犯行かもしれないと彼女は言っていたので、殺人の場面を見ることができれば犯人に心当たりが出てくるかもしれない。とにかく、何かしら情報は得られるはずだ。

「えーと、確か2週間くらい前かしら？」

1週間くらい母の実家へ滞在していて、帰る時に殺されたの。

そして、それから検死があつて、葬式があつて…、さらに1週間くらい経っているわ。」

「それなら、2週間前に戻れば大丈夫そうだね。そのためには2、3年の歳月が必要になるけど。決めるのはお前だよ。」

何もしないまま、手を拱いているか、一か八かのチャンスに賭けるか。どうする？」

自分が彼女を見つめた。彼女は俯き加減で深刻な表情をして、どちらを選ぶか悩んでいるようだったが、次の瞬間にはその瞳は決意した様子で自分を見つめ返していた。

「やるわ。2、3年ならまだ犯人も生きているだろうし、何とかなると思う。」

彼女の答えに、思わず笑みが漏れた。

復讐を望んだ人間は、犠牲も厭わずに行動しなくてはならないと自分は考えていて、彼女が自分の望む通りの選択してくれたからだ。彼女には悪いが、これから彼女の父親が殺される場面を見る破目になるのに、自分には楽しくて仕方がなかった。

「よし、それじゃあ、君たちにはこっちに来てもらおうか。」

舟子が言うと同時に、自分の視界が歪んだ。

絵に吸い込まれるように、引き寄せられたと思うと、身体に浮遊感が襲って目の前が真っ暗になった。

彼女の悲鳴が聞こえた気がした。

春人の張り込み（前書き）

春人視点です。



## 春人の張り込み

義兄の指示により、佳子が“如月”と“しんご”の両名と会う料亭の付近で春人は張り込んでいた。

春人自ら志願したのだ。

皆勤賞で通っていた学校はサボってしまった。11月は特に行事やテストもないので、一日くらいの授業の遅れはどうかすると高を括っていた。

ちょうど料亭を一望できる高い丘の上に公園があったので、そこで予定時刻前から息をひそめて待機していた。

人の気配がほとんどないこの場所は、一人でいても誰にも気にされずに気楽だった。

春人の手には、望遠レンズのついたカメラがあり、三脚を使って目的の場所を捉えていた。

曾我から今日のために借りたのだ。

黒い車がお店の駐車場に入って来た時、そのナンバープレートが前回佳子を連れ去った車と同じことにすぐに気付いて、緊張が走った。春人は車を撮影する。

そして、車内から出てきた人物は佳子と、見知らぬ男だった。

思わず息を飲むほど整った顔をしている男を見て、一上高志が言った台詞を思い出した。

“お前に負けないくらい顔の良い男だったぞ”

目下にいる男は、お見合いの時に最後にやってきた人物と同一なのかもしれない。

あの時、佳子を最終的に手に入れた男。

春人は自分の顔が実母に似ていて嫌っていたが、他人からは美男子

と評されているのを知っていた。

その自分の顔と同じくらい、いやそれ以上かもしれないと感じさせるほどの男だった。

雰囲気や立ち振る舞いは、遠目に見ても洗練されていて、女性の扱いに慣れていそうだった。

綺麗に着飾った佳子の脇に、上機嫌な様子で並んでいる男をただ見ているだけの自分。

春人は知らずに歯を食いしばっていた。

それでも自分の仕事を忘れずに、男の写真も撮るのだった。

佳子と男が料亭に入った後、他にも何組かのお客が訪れていた。

今回佳子が会うのは、あと一人。それが誰なのか、まだ確認が取れていないため、春人は佳子たちが店を出てくるのをひたすら待った。お昼時だったので、あらかじめ用意しておいた携帯食品をポケットから出して、空腹を満たしていた。

1時間以上経った頃、佳子たちが店から出てきた。

緩んでいた緊張が一気に戻ってきた。

入店時に確認できなかったもう一人の男が佳子のそばにいた。

彼女に微笑まれている男は、春人の知らない人物だった。

しかし、どこかで見たとような気がしなくてもなかった。一体どこで会ったのか、全く思い出せない。

長髪の男に比べると、普通の風貌をしている。

あの3人の中では、一回り位年上で一番年長者だった。

春人はその男の顔もカメラに収める。

その男は佳子たちと駐車場で見送られて、別の車に乗り込んで行った。

春人はその車のナンバーを記憶して、ついでに車体も撮影した。

一方、佳子たちは来た時と同じ車に乗り込んで、走り去って行った。

春人の仕事は終わった。

機材をバッグに仕舞うと、自分もそこから去るのだった。

自宅に帰って義兄の慶三郎に報告する。

新たに得た車体のナンバーから、後で持ち主を調べるつもりらしい。ついでにカメラに撮影されたデータをパソコンに取り込んで確認してもらおう。

長髪の男を見た時に、慶三郎は口笛を吹いた。義兄も感心するほどの美貌だったらしい。

そして、もう一人の男を見た時に、慶三郎は驚いた声をあげた。

「これって、彼女の父親じゃないのか!？」

「どういうことですか？」

佳子の父親は数年前に亡くなっているはずだった。

慶三郎の発言は、死者が写真に写っていることになる。

「先代の一上家当主と同じ顔ってことだよ。しかし、よく見れば先代よりはまだ若いよな。30過ぎってところだし。これほど似ていたら、里にいても目立つだろうし、他所の人間か？」

慶三郎は当主が集まる寄合に毎回出席しているので、一上家の先代にも会ったことがあるらしく、顔を覚えていたようだった。

春人は彼を見た時に感じた、気のせいかと思っただけで既視感が間違っていないなかったことに気付く。

「一上家の先代は再婚なのでしょうか。前妻に子供がいたとか。」

男は佳子より年上だったため、先代が今の妻との結婚前に出来た子供かもしれないと、推測してみた。

「いや、それはないよ。」

はつきりと言い切った慶三郎は、無意識のうちに顎を手でさすっていた。

「彼女の両親が里で披露宴をあげた時に、五月家ごいつけだけ除者のけものだったからな。

それで激怒した親父は、子供心にも恐ろしかったから、よく覚えている。」

20数年前の出来事だから、慶三郎はその時には小学生の低学年頃だったようだ。

裕福な一上家の慶事は、盛大に行われたようだ。

景気良く内祝いとして、様々な品物が里の人々に贈られたが、五月家だけには何も届かず、さらに披露宴にも様々な当主たちが招かれたが、その頃には跡を継いで当主だった親父には招待状が届かなかつたらしい。

義父は他所者だから舐められた真似をされたのだ。

ちょうど成人した一上家の先代と、分家の主の一人娘の結婚話は里中の話題となり、慶三郎も色々な処で耳にしたと云う。

年齢の釣り合いがとれた二人は許嫁だったようで、花嫁が結婚できる年齢になるまで待っていたようだ。

その後、二人の間にはなかなか子宝が恵まれず、それについて親父が「人に恨みを買うような真似をすると、どこかでしっぺ返しがあるんだ。」と一上家に嫌味を言っていたらしい。

五月家と一上家の確執は、春人が生まれる以前から始まっていて、その深さは計り知れない。

「それにしても、本当に彼女の周りは、謎なことだらけだな。面白い。」

とりあえず、この先代にそっくりな男が“しんご”で、残りの長髪の男が“如月”という名前かな？」

一上家と血縁がありそうなほど似ている男が“しんご”だと、慶三郎は当たりをつけたらしい。

前回の推理で“しんご”という人物は、一上姓ではないかと考えていたからだ。

今回の状況と照らし合わせて、それはあながち外れていないと思われる。

「日曜日に彼女の家に行くんだろう？」

「はい、そうですが。」

「彼女にカマをかけてみなよ。」

父親の遺影がどこかに飾られていたら、“この間、この写真と似た人と里で会いました”って。」

「カマですか……。」

「そうそう、何かしら答えてくれるだろう？」

もしかしたら、彼女の口からさらに情報が引き出せるかもしれない。」

「はい、分かりました。」

春人は素直に返事をした。

自分は養子として本当の子供のように可愛がってもらっているとはいえ、恩義ある五月家には感謝の気持ちをおぼれなく持ち続け、この家のために尽そうと誓っていた。

自分がまともに育つことが出来たのは、全て五月家のお陰だと思っ  
ていたからだ。

従って、義兄であり、当主である慶三郎の言葉は絶対だった。

しかし、その“絶対”が最近揺らいでいる。

ある件についての家族の心情と、自分のそれとが相反しているから  
だ。

それでも、何かと理由をつけて今回の任務を誤魔化しながらもやっ  
てきてはいるが、自分の中でいつまで折り合いがついて続けられる  
のか、自分自身にも分からなかった。

反感を買つと分かつていることを正直に話す訳もいかず、さらに自  
分の望みを実現させるためには、黙っているのが最良だった。

しかし、もがけばもがくほど、深みに嵌まっているような気がする。

しかも最悪なことに、この忠誠心と、自分の中の欲求や願望が、完  
全に対立した時の答えをまだ春人は出していなかった。

ただ、見ているだけで満足していれば良かったのか。

切ない胸中を誰にも言えず、苛立ちや焦りが降り積もるのを自覚し  
ながらも、解消する術すべを知らなかった。

春人の張り込み（後書き）

ストーリーカーみたいですネ…。

## 春人の 1

とうとう春人と約束した日曜日がやってきた。

前日に電話があつて、午前中には着くと聞いてはいた。いたけど。

現在、朝の九時。

何故かあの彼がいます。

休みの日には、惰眠を貪つてなかなか起きられない佳子だったが、静寂を破る玄関のチャイムによつて叩き起こされた。

一体何事かと思ひ、寝起きのままで玄関に向かつて、慌てて解錠した戸を開け放つと、心臓に悪い美貌が目の前にあつた。

春人がしゃつきりとした様子で、玄関の軒下に立っていたのだ。

彼の両手は、大きな紙袋をそれぞれ提げていて、その中身は沢山詰まっていた重そうだった。

「おはようございます。」

滑舌良く爽やかな挨拶をされても、未だに寝ぼけた頭の佳子はもごもごと口籠つて「おはよう……ございます」と返事することしかできなかつた。

しよぼしよぼの目は、彼のかたちの良い唇から覗く白い歯をかるうじて捉えていた。

白い歯つて素敵……。

現実逃避をした佳子の耳には、遠くで聞こえる雀の元気なさえずり聞こえる。

長閑そうな動物たちが、この時ばかりは羨ましかった。



鏡を見ていないので、自分の姿を確認はしていなかったが、毎日寝ぐせに格闘している頭はきつとぼさぼさだらうし、半開きの目には、目やにがついているかもしれない。それに現在着ている部屋着は、そろそろ洗濯をしようかと思っていた程よろよろだったもの。

土間に入ってきた春人は、この間も見たジャケットにカットソーとジーパンと、有り触れた格好だったが、美形の特権なのか、何を着ても様になっていた。

それに比べて自分のみすぼらしい格好に、急に情けないやら恥ずしいやらで、悲しくなった。

「お邪魔してもよろしいでしょうか。」

ぼうつと突っ立っていて、いつまでも家の中に案内しない佳子に、春人の方から断りを入れてきた。

「え、ええ、どうぞ…。」

寝ぼけた頭は、何か気の効いた台詞を言えるほど回っておらず、彼に言われるがまま頷いて、奥へと通した。

春人はそのまま廊下を真っ直ぐに進んで、台所へと入る。

前日も来たことがあるので、少しは勝手が分かっているらしかった。春人は自分の持ってきた荷物を台所の床に置いて、取り出し始めていた。

「すみません、こんなに早くにいらっしやるとは思わなくて、まだ寝起きなんです。」

何で自分が謝らなくてはならないのかと、内心面白くはなかったが、佳子は自分の格好の気まずさから、取り繕うように謝罪した。

「いえ、こちらこそ早くからすみません。

今日が料理作りの初日だったので、なるべく時間が沢山あった方がいいと思つて、早く来てしまいました。

あと、それに、少しでも長く、その佳子さんと……。」

春人はガサガサと騒がしく音を立てながら話していたので、段々と尻つぼみになつていった彼の台詞を、佳子は最後まで聞き取れなかった。

「すみません、冷蔵庫お借りしますね。」

佳子が「はい、どうぞ。」と云うが否や、テキパキと手際よく、紙袋から色々なものを取り出して、冷凍庫や冷蔵庫に仕舞い始めた。

「本当にわざわざ遠くからすみません。

シロの具合はあれからどうですか？」

「知り合いに診てもらっていますが、順調に回復しているみたいです。」

作業中の春人に話しかけると、彼は手を動かし続けながらも、チラリとこちらを見て答えてくれた。

「そうですね。でも、やっぱり治るまでには結構時間がかかるんですよね？」

「傷自体は2週間もあれば治るようですが、頭を打っているの念のために予後を見守りたいと思います。」

異変があつた時にすぐに診てもらえるように、しばらく五月家うづまで

預かりますね。」

春人は気まずそうな表情で話してくれた。彼のせいでシロは怪我をしたのだから、罪悪感に苛まれているのかもしれない。

予後の経過を診るなんて、人間みたいに大げさだと思っただが、頭部は妖怪でも人間と同じように大事なところらしい。

シロには早く帰って来て欲しかったが、春人の言う通りに容体が急変した時に、すぐに診てもらえる人が側にいるなら、そちらの方がシロにとっては良さそうだった。

「お手数ですが、引き続きよろしくお願いします。」

佳子がお辞儀をすると、春人も「こちらこそ、シロの件は申し訳ございませんでした。」と再び謝って来た。

シロの怪我は今でも腑に落ちない点があるが、春人の誠心誠意の対応を見て、度々責めるのも可哀想な気がしていた。

「いえ、それはもういいんですよ。」

ところで、これから私は身支度をするので、すいませんが勝手にやってもらってもよろしいでしょうか？」

「はい、いいですよ。あちこち使わせてもらいますね。」

「はい。お願いします。」

佳子は春人に背を向けて自室に戻っていった。

これから自分の寝起き姿をどうにかしようと考えていた。

それにしても、来る時間が早すぎる。やはり彼は只者ではない。

佳子は一人きりになった部屋でこっそり嘆息をもらした。

佳子がいつも通りの身支度を終えて、居間で朝食に食パンと野菜ジュースを食べていると、そこに台所で作業をしていた春人がやってきた。

持参してきたのか、紺色のチェック柄のエプロンをつけていた。

食事中の佳子の横に正座すると、こちらを見ながら話しかけてきた。

「佳子さん、近所のスーパーは何時から開店しているんですか？」

「ええと、10時ですけど…。」

近所のスーパーといえば、佳子のパート先であった。

彼がこれから続けるであろう台詞が、佳子にとって悪い状況へと導きそうな気がして、嫌な予感がした。

「これから料理をするのに材料を揃えたいので、買い物に付き合っていただけないでしょうか？」

春人は何やら嬉しそうに、佳子の予想通りに誘ってきた。

彼はお店の場所を知らないから道案内でもして欲しいのだろう。

「ええと…。」

しかし、佳子は春人の申し出に大いに困惑した。

自分の勤め先であるあのお店に、この顔だけは良すぎる春人を連れて行ったら、注目される上に明日出勤したら根掘り葉掘り、彼とどうい関係なのか訊かれるに違いない。

今まで地味な存在で真面目に働いてきたのに、急に注目されるような事態になるのは避けたかった。

一般人の中で目立つようなことを避けてきた佳子は、そういう対応に慣れてなかった。

「スーパーは私の職場なので、出来ればこゝろは避けたいのですが……。」

「どうしてですか？」

きよとんとした春人の顔は、愛嬌があつて思わず見とれてしまったが、一方では察しの悪さに困惑した。

「男つ気のない私が五月さんを連れて行ったら、あとで同僚たちに色々と尋問されちゃうじゃないですか。」

「まあ、そういうこともあるかもしれませんが、でも、人の噂もすぐ飽きて忘れられますよ。」

あと、そういえば、私の名前の呼び方ですが、今後は“春人”とお願いします。」

「え!？」

佳子にとっては深刻な悩みをさらつとスルーした春人は、さつさと話題を切り替えていた。

「婚約者同士なので、下の名前で呼び合つた方が自然かと思ひまして。」

あまりの対応のつれなさに異論の声をあげたのに、呼び方について疑問の声をあげたのかと春人は解釈して、説明をわざわざしてくれた。

今更気付いたのだが、春人は佳子のことを名字ではなく既に名前で呼んでいた。

里では一上姓がうじゃうじゃいるから、紛らわしいので下の名前で判別していたのかもしれない。

「…じゃあ、これからは春人さんとお呼びしますね。」

「はい、よろしく願います。」

もう少ししたら、時間になるので一緒に出かけましょうね。」

上機嫌な様子で春人は言葉を口にする、再び作業をするためか、立ち上がると台所へと戻っていた。

結局、佳子は春人の思惑通りに一緒に買い出しに出かけた。

自分のご飯のための食材をこれから買うんだから、同伴するのは筋かもしれない。

食べ物の好みだって、彼は知らないのだから、色々和讯きたいのも良く分かる。

スーパーの中を一緒に見て回っていたが、佳子は出来るだけ離れて歩いていった。

たまたま近くにいましたと思わせるくらいの距離を絶妙に保って。

かごを持って商品を物色している春人の姿を、多くの女性たちが目を輝かせて見ているのを、傍から佳子は目撃していた。

日曜日の特売日だったため、客も開店と同時に賑わっていた。

「超、かっこよくない!？」と、本人たちは声を抑えているつもりなのだろうが、興奮しているため丸聞こえな音量で、春人に視線を送りながら騒いでいる人たちまでいた。

私はただの通行人です。

心を無にして、同じようにかごを持って辺りをぶらぶらしていたところ、空気を読めない春人が近づいてきて「佳子さーん」と声を掛けてくる。

「お肉は脂身の多い方が好きですか？ それとも淡泊な方がいいですか？」

春人は楽しそうに佳子に尋ねてきた。

春人に熱い眼差しを送っていた女性陣たちの視線が、一変して突き刺すように佳子に向けられた。

恐慌状態になりそうなのを、たじろぎながらも必死に耐えながら、「あ、脂身の塊は嫌いです。」と正直に答えてしまった。

料理してもらおう身なので、あれこれ好みを煩く言う気はなかったのに、そこまで配慮する心の余裕がなかった。

そして、再び距離を置こうとして動こうとした時に、佳子の空いている方の手首を掴まれた。

「佳子さん、なるべく近くにいてくれませんか。」

そう言っつて、佳子の手を取って握り締める。

平熱36.5度の彼の掌は、売り場から漏れる冷気で熱が奪われた佳子の手にとつては、とても温かく沁み入るようだったが、大胆な行動は時と場合を考えて欲しかった。

ムンクの叫びの様な形相になっている佳子に顔を寄せると、春人は手を口元に添えて密談を始めた。

「佳子さん、これは練習です。」

「れ、練習？」

女性客の妬みや羨望、好奇心の視線を痛いほど感じつつも、佳子が訊き返した。

「普段から仲の良い婚約者同士を演じなければ、敵の目を欺けません。」

引き裂くことが出来ない位、熱い絆を日頃から見せつけましょう。



「で、でも…。」

恥ずかしい上に、春人は人目を惹くので、側にいるだけで否応なしに目立ってしまう。

そうでなくても秘匿の掟のために、ひたすら目立つことがないようにと、一般人に混じって暮らしている佳子は腐心してきた。

そのため、他人の目に触れないように気配をなるべく殺してきた佳子には、この状態は苦痛そのものであった。

「大丈夫です、佳子さんは側にいてくれるだけでいいです。後は私に任せてください。」

「はあ。」

佳子は曖昧な返事しかできなかった。

春人は佳子の手を離さず、密着したままゆっくりと歩みを進める。

佳子はなるべく人と目が合わないように下を向いて、買い物に集中する振りをして周りの視線から逃げた。

同じように顔の良い如月と一緒にいても、大勢に注目されるような場所に長く一緒にいたことがなかったので、このような居心地の悪い目には遭ったことが無かった。

大衆の中の美男子は、遠くから見るものであって、側にいると凶器のようなものである。

佳子は教訓として、そう心に刻んだ。

色々と話しながら、二人はレジ付近へと近づいていた。

最後の関門だった。

ここは佳子の同僚たちがいるからである。

平日の昼間は既婚者のパートたちが多いが、日曜日の本日は学生な

どのアルバイトが多かった。

佳子はレジ打ち担当だったので、当然ながら顔見知りか沢山いた。自分だけレジを通れば良かったのだが、お1人様1個までの洗剤の特売品を、すっかり板に付いた貧乏根性のせいで欲に目が眩んで、春人を勘定して2個かごに入れてしまったのが運の尽きだった。

購入数が限定の特売品は、同伴者もレジに並んでください、レジ担当ならば誰もが知っているお店の決めごと。

それをパートの自分が破るわけにはいかなかった。

直前で気付いても後の祭り、今更戻って棚に商品を戻すわけにも行かず、春人と一緒にレジの列に並ぶ破目になった。

さすがにレジの前では、春人は手を離してくれた。

緊張の余りに握られた手は汗をかいていて、ずっとその手を握っていた春人に申し訳ない気持ちになった。

自分の番が来た時に、佳子に気付いた同僚が声をかけてくれて、会計してもらいながら会話を交わすうちに、佳子の横にいる春人に同僚が気付いたのは、時間の問題だった。

春人の持っていたかごの中身は、結局自分の腹に収まる食材なので、「会計は一緒をお願いします。」と佳子は頼んだ。すると同僚は佳子の隣にいた春人を見上げると、硬直して大きく目を見開いて食いつける様に凝視する。

そして、目を点にしたまま佳子と春人の顔を交互に見た。

「一上さん、彼氏と買い物ですか!？」

驚愕の声をあげた同僚は、佳子より一歳年下の学生だった。

お昼休憩が同時の場合、ご一緒する間柄で同僚の中では仲が良い方だと思っていた。

彼女は彼氏募集中らしく、合コンに出かけたりして精力的に出会いを求めている、男っ気のない佳子にも、「今から枯れちゃ駄目です

よ！一緒に合コン行きましょう！」と声を掛けてくれたことがあった。  
気を配ってくれた彼女の誘いを有難く思いながらも、自分の背景が複雑すぎる佳子は、今は男よりお金が大事と言って断っていた。  
今回はどのように言えば角が立たないか、必死に考えを巡らす。

「ええと、彼はその…。」

「私は佳子さんの婚約者です。いつも彼女がお世話になっております。」

佳子は本日二回目の絶叫顔をした。

爽やかに挨拶をして出しゃばって来た春人を横目に見ながら、これ以上余計なことを言わないで欲しいと、必死の形相で睨みつけるが、同僚に顔を向けている彼はその佳子の表情に気付いていない。

「一上さんって婚約されたんですか!？」

同僚の声が思いのほか大きくて、佳子はさらに焦った。

パクパクと金魚のように佳子は口を動かすだけで、肝心の台詞が出てこない。

「そうなんですよ。先週念願叶って、婚約まで漕ぎ着けたんです。」

その隙に春人がぺらぺらと話す。

「まあ、そうなんですか！おめでとうございます。」

幸せオーラを出しつつ、照れ臭そうに話す春人にすっかり騙されている同僚は、自分のことのように喜んでくれて、祝いの言葉まで述べてくれた。

きつと、休憩に入ったたら他の同僚たちにもめでたい話だから、口にするに違いない。

“あの一緒にいたカッコいい男は誰なの？”と追及される予定だったはずが、“結婚するんだって？”に目の前ですげ替えられて、佳子の精神は端から崩れ去りそうだった。

誰ですか、自分に任せると言ったのは！

佳子にとって状況はどんどん悪くなる一方だった。

「何も私の勤め先にまで婚約のことを言わなくてもいいじゃないですか…！」

車に戻った途端、佳子は春人に苦情を言った。

すると、心外そうな顔をして春人は佳子を見返す。

トランクに荷物を積んでいた手を一瞬止めたが、困ったように笑うと再び手を動かして最後の荷物を載せた。

「普通婚約したら周りに報告しますよね？」

「え？」

春人はバンッと音を立ててトランクを閉じた。そして、佳子の方へと向き直る。

「佳子さんは偽装を止めた時のことを考えて、職場に報告しなかったんだと思いますが、それじゃあ詰めが甘いです。外堀を周到に埋

めて行かないと、敵に付け入る隙を与えてしまいますよ。」

「それは…。」

真剣な表情をしてこちらを見つめる春人に、佳子は返す言葉がなかった。

佳子と春人の関係を周知の事実にとっていき、相思相愛の二人を引き裂くのは、困難だと敵に思わせる。

春人の言わんとしている今回の作戦の意図を、佳子は今更ながら気付いた

佳子の母は手強い。

先日、婚約について真相を問い質してきた母に、佳子は何も連絡を返さなかった。

それから再三母から電話が掛かって来ていても、身に沁みついた母の影響力がやはり恐ろしくて、無視して相手にしなかった。

我が身の可愛さに、手を抜こうとした自分が恥ずかしくなる。

さらに、こうして真剣に共犯者として手を携えてくれる春人に対して申し訳ない気持ちになった。

「そうですね…。私の認識が甘かったです。ごめんなさい。」

素直に謝ると、逆に春人に恐縮された。

「佳子さんが謝る程でもありませんよ。さあ、車に乗って帰りましょう。」

佳子の気まずい気持ちを払拭するかの様に、春人は優しく微笑みか

ける。

普段、笑顔をあまり見せない春人のさり気ない仕草に、佳子は視線を釘づけにされてしまう。

運転席に向かつて歩き出していた春人から目を離せないでいると、立ち止まって自分を見ている佳子に気付いて、春人まで立ち止まると、佳子を見つめてきた。

二人の視線が交わり重なる。

平然としていた彼の表情が、急に含羞んだと思うと、視線を佳子から外して彷徨わせ出した。

そんな彼の様子に、つられたように佳子も急に落ち着かない気分になる。

慌てて助手席のドアに近づいて、取っ手を掴んで開けると、車に乗り込んだ。

同時に乗り込んできた春人には気付かれないように、深く息を吐く。

今の自分の動揺は、気のせいだと佳子は思い込むことにした。

先程の自分に向けられた春人の照れ臭そうな顔が、何とも言えず可愛いと思ってしまったのは、自分の胸に秘めておこう。

春人は「これから料理をしますので。」と言って再び台所へと籠っていった。

佳子は自室へ行き、内職に精を出した。

しばらくすると、筆を持つ手が疲れてきたので、一旦休憩を取ろうと思い、部屋の引き戸を開けると、食べ物匂いが漂っているのに気付いた。

春人が作っている料理に違いない。

固く閉ざされている台所の戸を、邪魔をしないように音を立てずに少し開けて、こっそりと覗き込む。

こちらに背を向けて立っている春人が、ガスコンロの前で何かを調理をしていた。

しかし、その彼の足元には膝丈くらいの妖怪たちがいて、棒のような物を持って彼の足を攻撃していた。

春人は器用に避けてはいるが、複数に囲まれて多勢に無勢な状況なので、たまに当たっている。

「止めてくださいよ。」

春人が困ったように苦情を言っても、妖怪たちは小馬鹿にしたように「ケケケ」と笑うだけで、手を止めない。

爬虫類が小人になったような妖怪たちは、佳子があげた端切れを自分たちで縫い合わせて作った服を着ていた。

蛙が漬れたような不細工な顔をしている彼らは、いつも陽気に歌いながら、佳子が頼んだ洗濯仕事をしてくれていた。暇な時は仲間同士で無邪気に遊んでいて、悪さをしているところなど今まで見たことがなかった。

目の前で繰り広げられる、そんな彼らの乱暴な仕打ちに、佳子は衝

撃を受ける。

そして、次の瞬間には戸を勢いよく開け放って台所に入り込んだ。

「こらっ！ 春人さんに何やっているの！！！」

春人と妖怪たちは後ろを振り返って、怒鳴りこんできた佳子を凝視した。

その怒りの形相をした佳子を見た妖怪たちは、一斉に震えあがった。妖怪たちは得物を捨てて、一目散に佳子から逃げ出した。

「こら、待ちなさい！」

「やだよ〜みたいなの？」

佳子の呼び止める声を無視して、彼らは足早に去って行った。逃げ足は途方もなく速かった。

「春人さん、ごめんなさい。躡がなってないばかりに、酷い目に遭わせてしまつて。」

佳子が慌てて春人に近づいて頭を下げると、春人は逆に恐縮して「頭を上げてください。」と促した。

「叩かれたと言っても大した力じゃないので、全然痛くありませんでしたよ。子供の悪戯なようなものなので、全く気にしていません。」

春人は本当に意に介していないらしく、佳子を優しく見つめてそう言ってくれた。

シロの件があつたため、春人は酷い奴だと何処かで思っている節が



あつたが、今回の彼の温厚な態度を見て、一概にそうは云えないな  
と思った。

思い返してみれば、シロは包丁を持っていたため、一つ間違えれば  
春人が怪我をしていたのだ。

春人ばかりを悪く思うのも良くないと気付いた。

「春人さんって、実は優しい人だったんですね…。」

「実はって…。もしかして、私は佳子さんの中では冷たい人間だっ  
たんでしょうか…?」

佳子は褒めたつもりで言ったのだが、言い方がまずかったらしく、  
春人は傷ついて落ち込んだ表情をした。

「いえいえ、違います！」

シロの件があつたので、春人さんは妖怪には厳しい方なのかと思  
つてたんです！」

「ああ、シロの件は本当に申し訳ありませんでした…。」

あの時は色々と切羽詰まっていた、余裕もなかったし、シロも包  
丁を持っていたので、つい…。」

「いえいえ、もうその件は怒っていませんよ！」

ところで、今は何の料理をしているんですか？」

「あー！」

気まずさから佳子が急に話題を変えると、春人は声を上げて慌てて  
後ろを振り返ると、持っていた菜箸で何かしている。

佳子が近づいてそれを覗き込むと、てんぷら鍋で鳥の唐揚げを作っ

ていた。

春人は箸でつまんだ唐揚げを、紙を敷いた皿の上に急いで置いた。

「揚げていたんですか。上手ですね。」

佳子には揚げ物を作るなんて、そんな芸当は持ち合わせていない。

「少し揚げ過ぎて、危うく焦げそうでした。」

ちょうどいいタイミングで佳子が乱入してしまったようだ。

妖怪に攻撃されてもなお、逃げようとしないで春人は料理していたのに、佳子は非常に申し訳なくなつた。

「お邪魔してしまつてごめんなさい。でも、春人さんの唐揚げはとても美味しそうですよ。ご飯楽しみですね。」

「ああ、そういえば、もうお昼ですね。ご飯にしましょうか。」

「はい。何か運ぶ物があつたら手伝います。」

佳子は春人に指示してもらつて、ご飯の用意を手伝つた。

お味噌汁を温め直す際に、佳子は春人に指摘されて、初めて火力の調整と云う技を知つた。

「道理ですぐに料理が焦げると思いましたわ！

今まで強火で料理していたんですね。」

「…。」

その時、春人は黙ったまま何も言わなかった。不審に思った佳子が春人の表情を伺うと、彼は手を口元に当てて、今にも嘔き出しそうなのを必死に堪えていた。何か彼のツボに嵌まったようだった。

居間で春人と食卓を囲んで、昼食を頂くこととなった。目の前には、久しぶりに出来たてのご飯が並べられている。揚げたての唐揚げを口にすると、味が良くしみた肉汁が口の中に広がって、とても美味しかった。衣もカリッとして、口当たりが良い。

「春人さんは、料理が上手なんですね。凄く美味しいです。」

「本当ですか？ そう言われると作った甲斐があります。」

料理を褒められた春人は、心底嬉しそうな顔をした。

料理が本当に好きなのだろう。上機嫌な様子で、唐揚げを作るコツはですね…、とうんちくを語りだした。

そんな彼の素朴な人柄に好感を覚えて、もっと彼のことを知りたいと思った。

もっと仲良くなれたらいいな。

そんな望みも、佳子が抱えている一族の因果を彼に知られたら、蔑みの前に儂く消え去るだろう。

春人とは利害関係で付き合うのが一番だと理性では分かっている。今日こうやってご飯を作ってくれるのも、シロの代わりを務めるた

めであつて、佳子と仲良く交友を深めるためではないのだ。勘違いしては駄目だと、佳子は思い直すことにした。

「ガスの火加減を覚えましたが、これからたくさん練習して、なるべく早く春人さんにご迷惑をかけないようにしますね。」

火加減を覚えたので、料理が焦がさなければ、何とか佳子も火を使つて食べられる物を調理することが出来そうな気がした。

「全然迷惑だなんて思つていませんよ！」

春人は手を振つて一生懸命に佳子の言葉を取り消してくれた。

そう言つてくれる春人の優しさが、この時は胸に痛んだ。

春人は、真実を何も知らないから佳子に親切にしてくれるだけなのだ。

彼の良さを知るにつれて、だんだんと自分に対する親切が後ろめたくなる。

もし私が一上の家に生まれていなくて、何も罪悪感なく彼と接することができたら。

今後も良好な関係を築くことができるだろうに。

物思いに沈みそうになった佳子はふと我に返つて、自分を恥ずかしく思った。

空想に逃避しても、現実は何も変わらないというのに。

目の前の彼は、佳子の暗い気持ちを知らず、目が合つと「おかわりは沢山ありますよ。」と声を掛けてくれた。

そんな何気ないやり取りを交わしてくれる彼に、今だけは佳子は救われる気持ちがあった。



和やかな昼食を終えて、食器を下げるのを手伝っていると、予定外の者が家に訪問したらしく、玄関の呼び鈴が鳴らされた。

「はい。」

佳子は玄関に小走りで行くと、玄関の外にいた訪問者は掛かっていた鍵を勝手に解錠すると、引き戸を開けた。

その開いた隙間から見えた和服姿の訪問者を見て、佳子は思わず悲鳴をあげそうになった。

佳子が見守る中、訪問者は玄関の土間へと足を踏み入れる。

芯が通ったように背筋を正しく伸ばして、和装を着こなす女性。

いつものように化粧をたっぷりと施して、完璧に淑女のお面を被っている。

「久しぶりね、佳子さん。」

音沙汰がないからどうしたのかと思って、久しぶりに帰ってきてきましたわ。」

「お、お母様……。」

母の後ろには、控えめな態度で従っている女中の姿も見えた。

母は落ち着いた様子で佳子に話しかけているが、長年母から押さえつけられていた影響で、無意識のうちに怯えてしまっていた。

「上がってもいいかしら？　そこをどいてもらえますか？」

ちょうど佳子が玄関から上がる位置に塞がる様に立っていたので、

母に避けるように指図された。

反射的に思わずそれに従おうとしてしまったが、佳子は動揺から立ち直って、首を横に振った。

家上げてしまつて居付いてしまわれては困るので、母たちを追い返さなくてはならない。

しかも荒れ放題になつた屋敷を見たら、何と言われるか。

「あら、まだそんな意地を張っているの？」

「違います。今日はお客様が来ているので、また今度にしてもらえませんか？」

「お客様？」

母が険しい表情で佳子を見上げたと思うと、次は下を向いて土間に置いてある履物を見た。

佳子もつられて見ると、母の視線の先には春人の男物の靴が揃えて置いてあつた。

「私がいないうちに、あの男とよろしくやっていたわけね……。」

低くなつた母の声に、嵐の予感がした。

佳子は覚悟を決める。

「そうです。婚約者と仲良くしていて悪いですか？」

「良いわけ無いでしょう！」

私が実家でどんな仕打ちを受けたか、貴女にはお分かり！？

貴女が勝手に婚約したせいで、親の教育が悪いだの、躰が悪いだの、親族にここぞとばかりに非難されて、居場所もなかったのよ？」

「あの家がおかしいんですよ。そんな中傷は気になさらないでください。」

「おかしいのは貴女ですよ！」

親に無断で婚約をするなど、親不幸以外の何物でもありません。」

「嫌がる子供に無理矢理結婚させる親は、どうなんですか？」

「貴女、何を言っているの？」

子供のためを思っている行動に決まっているでしょう！」

「子供のためと言いながら、自分にされた仕打ちを子供のせいにするって、どうということなんでしょうか？」

「屁理屈を言わないで。どうして貴女は母の言うことを聞いてくれなくなったのですか。」

父親が亡くなるまでは、あんなに素直でいい子だったのに……。」

「ただ単に我慢をしていただけです。」

自分の感情を殺して、お母様のご機嫌を窺っていただけに過ぎません。」

佳子はそう云いながら、昔の自分を思い出して心が重くなった。

母は佳子の気持ちを知らず、不愉快な風のため息をついた。

「世の中には我慢しなければならぬことは、沢山あるんですよ。」

今回の結婚もその一つに過ぎません。貴女が高志さんとの結婚に同意してくれさえすれば、貴女の将来が保証されるんですよ？」

このまま一族に逆らい続けければ、当主としての地位も危うくなり、



いつかはこの家から追い出される恐れだつてあるんです。

「どうしてそんな簡単なことが分からないんですか！」

佳子はもともと当主に固執していない。自分に苦痛しか与えないそんな地位など、母から結婚話を聞いた昔から嫌で仕方がなかった。

「そんな保証は要りません。

私に代わる方がいらつしやるんでしょう？　なら、その方に当主をお任せすればいいんじゃないんですか？」

佳子は真吾の存在を思い出していた。

恐らく自分の次に継承権のある異母兄。

佳子の言葉を聞いた母は、怒りの形相を見せた。

「あんな血筋の劣つた男に当主を継がせるわけにはいきません！

貴女が一番相応しいと云うのに、道理の分からぬ輩たちが、これ幸いと貴女を引きずり落とそうとしているんですよ。

貴女も自分の立場をよく考えて、行動しなくては駄目ですよ。」

佳子は母の発言に、内心驚いた。

母は真吾の存在を知っているようだ。自分だけが何も知らされていないなかつたのかと、たつた今知つた。

「お母様は、真吾さんのことをご存じだったのですか…？」

「あの男の名前を私の前で出さないで頂戴！　不快にも程がありません。」

私の夫となる男を誑かした女の息子が後継ぎ候補に挙がるなど、あつてはならないのです！」

真吾は祖父に認知されているが、母の台詞や話振りから、真吾が父の子供である可能性はやはり高そうだ。

もしかして、一族の中では周知の事実だったのだろうか。

子供の頃から夫婦の仲が冷え切っていた佳子の両親。

それは、母の性格や金遣いのことだけではなく、真吾のことも関係していたのではないか。

「色々と私のためと強調しておっしゃいますけど、本当はご自分のためじゃないですか？」

私が当主のままならば、母も一族の中で地位は安泰ですし、ご自分にとって邪魔者の真吾さんの問題も片付きますものね……。」

佳子の言葉に、心外だと云わんばかりに母は表情を苦痛に歪ませた。

「そんな悪意の籠った言い方をするなんて……、何て性根が醜くなっ  
てしまったんでしょう……。」

きつと、父親に似てしまったのね。」

母に言われた科白に自分の耳を疑う。

最愛の父の悪口を、まさかその妻であった母から聞かされるとは思  
つてもみなかったからだ。

それはまさしく佳子の逆鱗に触れた。頭を突き抜ける様な怒りがわ  
き上がる。

「お父様を侮辱するのは止めて！」

酷いのはお母様だわ。私の気持ちを無視して、自分の都合ばかり  
押し付けて！

もう話すことはありません。帰ってください！……！」

「まだ話は……、」

母が何か言おうと口を開いて動きが止まり、佳子の後ろに視線を送るので、佳子も気になって後ろを振り返ってみた。

「佳子さん、大丈夫ですか？」

気がつくくと、佳子の背後には春人が立っていた。

佳子の両肩に両手を添えるように置いた。彼の掌から伝わる温もりが、何とも云えない癒しを与えてくれて、少しだけ佳子を落ち着かせてくれた。

「春人さん……。」

佳子が春人の名前を呼ぶと、彼は穏やかな瞳で佳子を見つめてくれた。

それが今はとても心強かった。

「よくも私の前に顔を出せたわね。人の娘を誑かしておいて……。」

母が射殺しそうな勢いで、春人を睨みつけた。

「すいませんが、今日のところはお引き取りください。」

「お前如きに口出しされる謂れはありません！」

佳子さん、早くこの男と別れてしまいなさい。貴女は騙されていますよ！

この男には親が認めた許嫁のような女が既にいるんです！

いつも家でも学校でも逢引していると、噂になっているんですよ！

「あれはただのストーカーです。噂を鵜呑みにしないでください。」

春人は辛そうに弁解した。

彼はストーカーの被害に遭っていると言っていた。きっと誤解されて噂されて苦しんでいるのに違うに違いない。

佳子は実の母親よりも、春人の言葉を信じた。

「私は春人さんを信じます。決して別れません。」

佳子が力強く断言すると、背後から腕をまわしてきて春人が抱きしめてきた。

自分とは全く違う、堅く頑丈な体つきに包まれて、全神経がその感触に集中した。

思わぬ春人の行動に、胸がドキドキと高鳴ってしまふ。

しかし、佳子はこの彼の行動の意味に気付く。

母に私たちの仲を見せつけて、堅い絆で結ばれていると思わせようとしているのだ。

恥ずかしかったが、彼の行動を抵抗せずに佳子は受け入れて、されるがままになった。

「全く、この顔にすっかり骨抜きにされて…。」

弄ばれて捨てられても、誰も助けくれませんよ。後で泣きを見るのは貴女なんですよ…。」

母は苦虫を噛み潰した様な顔をして、佳子に恨めしげに言い聞かせる。

短い付き合いだが、春人は女を弄ぶようなタイプには見えなかった。母の彼への悪意を感じて、思い込みでいい加減なことを言うのを止めて欲しいと、腹立たしく思った。

「彼は私を弄んでなどいません。」

「そうです。私は佳子さんと真剣にお付き合いをしております。」

「口では何とでも言えますものね。そもそも五月家に佳子を誑かすように指図されているんでしょう?」

「口では何とでも言うとは、正しく今の貴女の言動がそうじゃないでしょうか。私のことを悪く言うのは構いませんが、亡くなった人のことを悪く言うのはいかなものでしょうか。」

それに誑かすのでしたら、わざわざ婚約しないとと思いますが。」

先程母が亡き父を侮辱した件について、春人が苦言を呈してくれたことに感動を覚える。

あそこで不快な気持ちになったのは、自分だけではなかったのだ。

「どうせキズものにして、孕ませたあげくに、婚約を破談にして本命の女に逃げる気なんでしょう!？」

佳子をボロボロにして一上家の血筋を汚す気なのよ…!」

母の言葉を聞いて、よりによって何てことを言うのだと、佳子は呆れて眩暈すら起こりそうだった。

佳子の背後にいる春人の顔が見えないため、彼がどんな表情をしているのか分からないのが、母の言葉に彼が不快な思いをしていないか、不安になった。

そんな時、背中越しに彼が軽く笑うのが分かった。

彼の吐息が佳子の耳にかけ、その敏感な感触はくすぐったいような、何やらぞくぞくするような変な気持ちになる。

さらに、佳子の体に回っていた春人の腕がゆつくりと動いたと思うと、彼の両方の掌が佳子の下腹部に当てられた。

背後にいる春人に好き放題されて、佳子は思わず恥ずかしくて悲鳴

をあげそうになったが、今の自分たちは相思相愛の恋人同士の設定のために、それを必死に飲みこむ。

「佳子さんのお腹に私の子供が宿っていたら、どんなに嬉しいでしょうね。」

どこか楽しそうな春人の声が後ろから響いてくる。

彼の大胆で恥ずかしい発言に、本日3度目の絶叫顔に佳子はなった。目の前の母の顔も凶悪なものへと変化したが、すぐに「ですが、」と春人の声が続いた。

「まだ学生の身で責任が取れないので、残念ながら清いお付き合ひしかしていませんよ。」

彼女の体が大事ですから。」

春人に何か言おうと母は口を開いたが、どうしたわけか険しい表情から一変して、良い奸計が思いついた悪女へと変化して、口元に邪悪そうな笑みを浮かべた。

「そうよね。卒業まではあなたたちはどうしようもないものね。」

母は今すぐに私たちが入籍する可能性がないことに気付いたようだった。

それで母の中で猶予が生まれて、この余裕の表情になったようだ。

「ええ、まあ、そうですね。」

彼の卒業後も入籍する気のない佳子は、複雑な心境で母の言葉に同意する。

「オホホ、なら今はそれほど焦らなくても、良かったのね。

卒業までの間に、じっくり時間を掛けて、貴方たちの関係を清算してあげましょう。ええ、きつとね！」

母は最後の言葉に力を込めて吐き捨てた。

一体何を考えているのか分からない、未恐ろしい母の執念に、終わりのない戦いを佳子は予感せずにはいられなかった。

母は「また出直します。」と言って、女中を引き連れて帰って行った。

佳子の胸中を散々掻き乱し、後味の悪さだけを残して。

母の姿が消えた途端、佳子は安堵の余りに力が抜けた。その場にうずくまる様に床にしゃがみ込んでしまふ。

予告も無く突然母に來られたものだから、全く心構えもなかったため、心理的な負担が大き過ぎた。

張り詰めた緊張が解かれて、以前のように指先に震えがきた。

「大丈夫ですか…。」

春人も佳子のすぐそばにしゃがみ込むと、床についた佳子の手を取ると労わる様に両手で握りしめてくれた。

情けないくらいに小刻みに震える手を、春人の温かい手は包み込む。冷えていた佳子の手から伝わる体温と共に、彼の優しさまでも佳子へと流れ込んでくるかのようだった。

「佳子さん、本当はすごく恐かったですね。」

それなのに、必死に自分の意思を貫かれたんですね…。」

とても穏やかで、思いやりが込められた言葉に、佳子は目を背けていて気付かない振りをしていた気持ちを揺さぶられる。

「そ、そんなこと…！」

“無いです”と続けようとしたが、感情が堰を切ったように溢れだし、それは叶わなかった。

泣きたくもないのに次から次へと涙がこぼれてきた。

人前で泣く様な真似などしたくなかったのに、嗚咽が口からこぼれて止めるのはもはや無理だった。



「うつ…、う、ごめんなさい。み、みつともないところを見せてしまつて。」

春人に凶星を指されて、蓋をしていて自分でも押し殺していた気持ち。

あの母に齒向かうのは、勇気の裏側にある恐さとの戦いだつた。

長年母に従うのが当たり前だつた自分。それを変えようとするのは、容易なことではなかつた。

本当は誰かに自分の辛さを分かつて理解して欲しかつたのかもしれない。

自分の境遇に同情してもらいたかつたのかもしれない。

彼にたつたあれだけの言葉を言われただけで、こんなに取り乱すように泣き出すなんて。

春人は何も言わずに、まるで大事なものを扱うかのように、佳子の体をそつと抱きしめてくれた。

彼の胸元へと引き寄せられて、佳子は顔を埋めるように密着する。

始めは突然の春人の行動に驚いた佳子だったが、背中にまわされた彼の手の、ゆつくりと何度も撫でてくれるその動きに、全く疚しさを感じなかつたため、されるがままにした。

春人のその行動は、子供の頃に亡き父親にあやされた時を思い出させたからだ。

その懐かしさと安らぎが、今の佳子がとても求めているものだった。人の温もりは、何とも言えない落ち着きを与えてくれる。

すぐく居心地が良くて、ぐちゃぐちゃに乱された感情が、穏やかな海のように落ち着いて行くのが分かつた。

どの位、抱きしめられていたのだろう。

涙はいつの間にか止まって、佳子の呼吸はいつも通りに戻っていた。感傷的になっっているせいか、佳子は何故か春人から離れがたく、いつまでもこうして寄り添っていたかった。

耳を春人の胸元に寄せると、彼の鼓動の音が響いてきた。

父の鼓動はとても穏やかなものであった、そう懐かしく思っただけのものも佳子は予想していたのに、春人の胸から聞こえる力強いそのリズムは、早鐘のように早い。

春人の状態の異変に気付いた佳子は、我に返って思わず彼の顔を見上げた。

佳子と目が合うと、恥ずかしそうに微笑む春人。

その眼差しは潤んで、まるで熱を孕んでいるようで、吸い込まれる様に囚われた佳子はその視線から逸らすことができなかった。

「佳子さん…。」

春人が切なげに自分を呼ぶ。

佳子はその声によって、先週突然春人に抱きしめられた状況を思い出させられた。

あの時も、同じように春人は自分の名前を呼んでいた。

その声に佳子はまるで金縛りにあったように、身体が動かなくなる。身体が上気したように熱くなり、春人のように佳子まで心臓が激しく脈打った。

いつの間にか佳子の両肩に春人の手が乗せられている。

春人の顔が徐々に近づいてくるように感じる。

お互いの距離が縮まって、佳子の顔の肌に、春人の微かな吐息すら感じた。

もう少しで唇同士が触れ合う。

そう思った時、佳子の視界の端に金物のような物が天井から降ってくるのが見えた。

「グワアアン！！」

ドラのような音が鳴り響くと同時に、それは春人の頭上へと落ちていた。

突然のことに驚いて、反射的に佳子は春人から体を離した。

春人の頭にぶつかって跳ね返ったそれは、床へと落ちてゆき、けたたましい音を何度も立てながら転がっていった。

春人に落ちてきたそれは、洗濯に使う金盥であった。

それが降ってきた天井を見上げると、先程春人を苛めていた妖怪たちが張り付いていた。

佳子と目が合うと、ビクツと肩を震わせて一目散に逃げ出す。

そのうちの一匹が「佳子に触んじゃねー！」と遠くへ逃げてから春人を振り返って、あっかんべえをして去っていた。

佳子は春人に視線を戻すと、彼は俯いて床に両手をついていた。

「大丈夫ですか？」

佳子が思わず尋ねると、春人は「え？」と驚いたように顔を上げる。佳子と目が再び合わさると、春人は急に顔を赤らめて、慌てて視線を逸らして立ち上がった。

そして、「す、すいません。色々と修行が足りなかったです。」と、彼はよく分からない謝罪を述べると、早足で台所へと向かって行ってしまった。

取り残された佳子は呆然と春人の後ろ姿を見つめる。

金盥が降って来なかったら、今頃自分は彼と何をしていた？  
それを想像すると、胸の鼓動が激しくなって興奮してしまう佳子。  
思わず熱くなる自分の頬を両手で押さえた。

一体、自分はどうなってしまったのか。

いきなり自分があんな状況になるなんて、頭がおかしくなっ  
つたに違いない。

男の人に抱きしめられることなんて、初めてのことだったから、  
きつと色々と脳内の回路がショートして認識を間違えてしまったのだ。  
勝手に誤解して、恋人みたいな行為を想像してしまうなんて！

春人に勘違い女だと思われたらどうしようと、羞恥心で身悶えそ  
うだった。

春人の。 5 (後書き)

ようやく恋愛話っぽく…。  
粉砂糖を口から吐きそうになりながら、頑張ります。

あの後、居間に戻った佳子と春人は噛みあわない会話を続けて、しどろもどろだった。

このままではいけないと、佳子は気持ちを切り替える。

「そういえば、修行の巻物の件ですが、どういう風に作ればよいのでしょうか？」

「ああ、巻物ですね。ちょっと待ってください。今、サンプルとして持ってきた物があるので。」

春人は持ってきた紙袋から1つの巻物と地味な黒い石が1つだけついた首飾りを取り出した。

そして、佳子に使い方の説明を始める。

巻物に封じ込められた創造物の呼び出し条件や方法、中断方法、終了方法など、様々なルールを淡々と説明していく。

佳子は念のためにメモ帳に記しながら、話を真剣に聞いた。

どうやら誤作動防止ように、起動用のアイテムを装備していないと使えない仕組みになっているようだった。

そのため、春人が持参してきた巻物を使うためには、この首飾りが必要らしい。

「すぐに作れるものなのですか？」

「ええと、それはやってみないと分かりません。まだどんなものを作るか決まっていませんし。」

あと、巻物自体がないので他の材料で代用してみますね。」

春人がいるうちは、まともな物が作れないだろうと踏んでいた。さっきの恥ずかしい件のせいで、春人が側にいるだけで、落ち着かなくなつて何も考えられなくなつてしまう。

「お願いします。」

「はい、楽しみにしててくださいね。」

佳子は春人の為に、修行に役立つような強敵を色々と作ってみようと、やる気が出てきた。

「ありがとうございます。」

春人が目を細めて微笑むのを見ただけで、佳子は拳動不審になる。春人と二人きりであるのが耐えられなくなつて、佳子は「部屋に戻ります。」と言って、自室へと逃げようとした。ところが春人に背を向けた途端、「あの、佳子さん！」と呼び止められた。

「なんででしょうか。」

佳子は動揺を抑えつつ、後ろを振り返つて春人を見る。

「あの、差し出がましいようですが、部屋の片づけをお手伝いしてもよろしいでしょうか。」

「そ、そんなこと、春人さんにさせるわけにはいきませんよ！」

佳子は慌てて手と頭を横に振つて、春人の申し出を断つた。

春人がそう言ってくる気持ちも分からなくもない。何しろ、我が家

はとても散らかっている。

父の遺品探しのために、隅から隅まで仕舞ってある物を引っ張り出しては、調べ尽くしていたのだ。

不思議なもので、佳子自身が片付けようとしても、何故か物は元通りには収まらなかった。

そういったことが繰り返されて、収める場所が見つからない物たちが床じゅうに溢れだして、收拾がつかなくなっていた。

「ですが、申し上げにくいことですが、佳子さんって、片付けが苦手じゃないですか？

いつまでも、このままの状態ではお困りでしょう。」

「そ、それは…。」

この屋敷で一番の汚部屋と化している佳子の自室を既に春人に見られているので、言い逃れが出来なかった。

「大丈夫です。実は私は片付けが得意なのです。任せてくだされば、綺麗なお部屋にしてみせます。」

春人の気合の入った台詞に、佳子は気圧された。

この家の散らかり具合は、春人の掃除魂に火をつけてしまったようだ。

「で、でも、春さんにそこまでしていただくわけには…。」

無駄だと思いつつ、佳子は遠慮という名の抵抗を試してみた。

「言い出したのは私なのですから、佳子さんは何も気にする必要はありませんよ。」



それにですね、代わりと言ってはなんですが、お願いがあるので。」

「お願いですか？」

「ええ、一上家に伝わる宝具の類を見せて欲しいのです。」

「宝具ですか？」

宝具とは、不思議な力を持つ物質を加工して、道具にした物である。身につけて装備すると、道具が持つ特殊能力が付加されるので、大変重宝されているが、希少価値が極めて高い品物だった。

一上家の本家ともなれば、そういった物があるかもしれないと、春人は考えていたのだろう。

「はい。もともと、そういった物に興味がありました。

数自体少ないので、滅多にお目にかかることがないので、あれば是非見てみたいんです。」

「私の記憶では、指輪の宝具が1つあったと思うのですが、…えーと、どこにあったかしら？」

仏間のどこかにあった気がするのですが…。

蔵の中にも何かあるかもしれませんが、父が突然亡くなったので、その…、よく知らないんです。」

「そうなんですか。それじゃあ、片付けるついでに、それも探してみますね。」

「はい、お言葉に甘えてお願いします。」と言って、佳子は了解した。

「それにしても、中身がひっくり返されたみたいになってますけど、泥棒に入られたわけじゃないですよね？」

「違いますよ！ ただ単に私が探し物をしていて、漁っただけなんです。」

佳子は春人の言葉を慌てて否定する。

「探しものですか？」

「ええ、父の遺品を捜しているんです。まだ見つからないんですけど…。」

「どんな物なのか教えていただければ、私も一緒に探しますよ？」

「ごめんなさい。それがどんな形で残っているのか私も分からないのです。ですから、それは結構ですよ。」

脅しのネタなんてもの、春人に見られる訳にはいかない。

彼に片付けてもらうところは、既に佳子がチェック済みだから、見られても何も問題になるものはなかった。

「そうですね…。」

話が終わったので、佳子は自室へと戻った。

部屋の戸を閉めて、独りになった途端、深くため息をついた。

情けない寝起き姿を見られたり、汚い部屋を見られたり、春人には好感度が下がりまくりのことばかり、見せつけている。

料理も片付けも出来ない自分は、全く魅力がないどころか、劣等感

すら感じていた。

さらに最悪なことに、春人と会った先週に、“お見合い相手に選んだのは、奉納試合での優勝者だからだ。誰でも良かった。”などと酷いことを言っている。あの時は春人の人となりを知らず、彼の仕打ちに色々と腹を立てていて、弾みで言ってしまったことだった。

その後、春人は最初の失態で失った好感を挽回するかのように、佳子のために腐心してくれる。

佳子は過去の自分の言動を後悔していた。

そういえば、春人はどうして自分とお見合いをする気になったのか。関心がやっと彼へと向いた。

五月家は一上家を嫌っているはずなのに、わざわざ一上家の当主である自分と会ったの理由は何なのか。

今更になって興味を持つなど申し訳ないとは思ったが、後で尋ねてみようと思つた。

佳子がトイレから出ると、春人が隣の仏間にいて戸棚を整理しているのを目撃した。

床に無造作に置いてあった物が、短い時間しか経っていないにも関わらず、あつという間に少なくなっているのに驚く。

春人の自己申告通り、片付けは得意分野ということが証明された。

「あ、佳子さん。休憩ですか？」

「お茶淹れますので、一緒に休みませんか？」

「ええ、喜んで。」

二人は台所へ行き、春人はお茶の用意をして、佳子はお茶受けのお菓子を戸棚から取り出した。

居間で食卓を二人で囲む。

佳子は春人の淹れてくれたお茶に口をつけた。

シロがいなくなったので、温かいお茶を飲むのは久しぶりだった。

「仏間に飾ってあった遺影を見たんですが…。」

春人が会話を始め出した。

「はい、遺影がどうしましたか？」

「多分、佳子さんの父親の写真かと思うのですが…、最近、同じ顔をした人間を里で見た気がしまして、大変驚いたんです。」

春人の話す内容に、佳子は思い当たる人がいた。

父と同じ顔をしていると云えば、彼しかない。

「ああ、もしかしたら、真吾さんかもしれませぬわ。」

「真吾さん、ですか？」

先程の佳子さんの母親の話でも、出てきた名前ですよね？」

「ええ、私も最近知ったのですが、彼は私の叔父にあたる人なんです。」

「叔父なんですか…。しかし、彼は後継者の候補として挙がっているようですが、一上家の先代には、他にご兄弟はいらっしゃいませんかよね？」

「あら、よくご存知でしたね。」

真吾さんは、表向きでは祖父の子供になっていますが、恐らく…私の腹違いの兄なんです。

父は亡くなる直前に彼を認知しようと動いていました。あの事故さえなければ、彼は確実に私の兄になっていたでしょうに…。本当に残念でした。」

「何故そんなややこしい状況になったのでしょうか。もともと佳子さんの父親が認知していればよかったですのでは？」

「多分、父はその当時は何も知らなかったんですよ。真吾さんのことを知ったのも、亡くなる数日前ですし。」

きつと、その当時お付き合いしていた女性が妊娠していたと知っていたれば、現状は異なっていたと思います。

まあ、そういうわけで、そんな背景があるので、私が分家に逆らってばかりいるから、私を廃して血筋の上では父の子である彼を当

主として据えようとする動きがあるのでしょうか。」

「それって、佳子さんの立場が危ういってことじゃないですか？

このまま分家に逆らうのは、本当はまずいのでは？」

「私の立場なんて、いてもいなくても大して問題じゃないです。今だって後継ぎだけ求められているだけですし。」

それに、最終的にここを追い出されたって、仕方がないと思って  
います。」

一上家が代々担ってきたお役目は、この地に封印された妖怪を守護する守人もりびととしての役割を故郷から担っているだけで、佳子でなくて代わりの者でもお勤めは十分に果たせる。

要は、この土地を勝手に荒らされなければ良いのだ。

「佳子さんの父親が亡くなってから分家に逆らうようになったみたいですけど、一体何があったのですか……？」

春人が深く踏み込んだことを尋ねてきたことに佳子は驚いた。

今まで親族との婚姻を繰り返して、その血を保ってきた一上家の当主の反旗に、興味を持ったのだろうか。

父が殺されたからと正直に話すわけにはいかない。

佳子は一応偽りではない建前を語ることにする。

父が亡くなった時に、高校の担任の先生が愁傷の佳子のもとを訪問してくれた。

その際に、母の勧める結婚が嫌でたまらないと語ったところ、先生が佳子に今でも心に残る言葉を伝えてくれたのだ。

もう子供ではないのだから、善悪の区別もつく。だから全て親の言

いなりでなくて良いと。

親と自分は違う人間なのだから、考えが違って当たり前で、逆らうことが悪いことではない。

たとえ親に逆らって失敗したとしても、自分の責任なのだから、自分で何とかすればよいだけだ。

だから、佳子が自分で良く考えて行動したことが、母親の希望と異なっても、自分の人生なのだから、好きにすればよい。

佳子にとっては、その先生の考えは目に鱗だった。

親の言うことに盲目的に従うことが当たり前だと思っていたからだ。

「前から親族婚について反感を持っていたんです。

でも、父が亡くなって、庇ってくれる人が居なくなつて、これからどうしようかと自分の将来を改めて考えてみたんです。」

「それが分家と袂を分けた切っ掛けですか？」

「ええ…。」

佳子は過去を思い出す。

自分の将来のことを考えた時に、真つ先に浮かんだのは父のことだった。

父に会いたい、たとえ彷徨う魂の姿でも。

父を失った悲しみで嘆くことしかしなかった自分が動き出す契機だった。

そして、その行動は様々な出会いを果たす要因ともなった。

「佳子さんは変わられたのですね。」

そう言われて、佳子は苦笑した。

玄関先での母とのやりとりを見た後では、昔の佳子は想像もつかないだろう。

昔の佳子は、母と考えが違ふ時は「でも…」と言って、いつも控えめに自分の言い分を述べるくらいであったが、最終的には母の押し強さに負けて、言い返すことも出来ずに渋々ながら従うしかなくった。

それに見かねて、たまに父が佳子の味方をしてくれることがあったが、二対一でも母の意見は強かった。

「ええ、まあ…。ところで、私も質問なんですが、春人さんはどうして私のお見合い話を受けたんですか？」

春人はちょうど湯呑を持って、熱いお茶を飲もうとして冷ましていたが、佳子の言葉を聞いた途端、ぎよつとした顔をして慌てて佳子を見た。

その時、あたふたしてしまつたため、お茶が湯呑から少しこぼれたらしく、「あちっ」と言つて食卓の上に湯呑を置いていた。

佳子は心配になり、「大丈夫ですか？」と尋ねると、春人は「びつくりしました。」と苦笑いを浮かべていた。

「ええと、私がお見合いを受けた理由はですね…、義兄あにの勧めなんです。」

「お兄さんのですか？」

親の意見でお見合い話などは決定すると思つていたので、春人の答えは意外だった。

「ええ。実はですね、私が人付き合いを避けるタイプだったので、義兄が何事も経験だと言つて、お見合いに行くようにと言ひ出しま



して…。」

春人の話を聞いて、佳子は少し安心した。自分と同じように、彼も結婚の意思がなくて罪悪感がかなり無くなっただからだ。

「あら、やっぱり顔合わせだけの目的でいらっしやっただんですね。それにしても意外です。春人さんはお顔がとても良いので、色々な方に声を掛けられそうだから、友達が多そうなイメージを持っていました…。」

佳子がそう言うと、春人は困った顔をした。

「私は自分の顔が嫌いなんですよ。だから、この顔が好きで寄ってくる輩たちと付き合う気はないんですよ。」

「顔が嫌いなんですか…？ せっかく素敵なお顔なのに…。」

佳子は春人の整った顔を羨ましそうに見つめた。こんな美人に生まれたら、さぞかし自分もモテモテだったに違いない。

「実は、この顔は実の母にそっくりなのです。自分の顔を通して母親のことが思い出されて、どうしても嫌なんですよ…。」

そういえば、春人は五月家に養子として迎えられたと聞いていた。実親と暮らしておらず、なおかつ、実母と同じ顔を嫌う背景には、人には言えないわだかまりが色々あるのだろう。そう思うと、春人の顔嫌いはそうとう根が深そうだった。

「だから、佳子さんがお見合いの相手を顔で選んでいないと知って、実は嬉しかったんですね。」

「え!？」

春人に言われて、念を押すようにそんなことを訊かれたのを佳子は思い出した。

あの時は春人の顔に対する事情を知らなかったから、佳子の発言によって美形のプライドが傷つけられたのかと、勘違いしていた。

しかし、自分の顔に言い寄ってくる女たちを避けている春人にとっては、その点はとても重要なことだったのだろう。

お見合いを申し込んだ動機を確認してきたのも、春人の顔を気に入ったと思われていたからに違いない。

しかし、顔で選んでいないと分かった後に、春人は酷く落ち込んでいたように思われる。

嫌いな顔で選ばれていなければ、春人にとっては悪い話ではなかったはずだ。

「じゃあ、どうして、あの時は落ち込んでいたのですか？」

「あの時とは？」

「ほら、春人さんが奉納試合で優勝したから、お見合い相手として選んだと言った時です。」

「ああ、あのときですね…。いや、あの、それはですね…。佳子さんが…。」

佳子が問い詰めると、春人は気まずい顔をした。

何か答えようとするが、言いくいことなのか、春人の歯切れがす

ごく悪い。

その様子のせいで、彼の答えを異様に知りたくなった。

「私がどうかしたんですか？」

好奇心を抑えきれず、覗き込むように春人の様子を観察する。

春人は俯いて小さく身を縮ませている、その様子はまるで厳しい尋問に遭っているようなだった。

「その、佳子さんが酷く不機嫌だったからです…。あの時、私に縁談を断って欲しそうじゃありませんでした？」

ギクツッ！！

佳子は後ろめたいことを指摘されて、動揺した。

確かにあの時の自分は、お見合い話をさっさと無かったことにして欲しくて、仕方がなかった。

それが思いつき態度に出していたに違いない。  
過去の自分を殴りたくなった。

「す、すいません…。あの時は失礼な態度でしたね…。

でも、どうして私に断って欲しそうだと落ち込むんですか？

春人さんはお兄さんの勧めで、人付き合いの練習がてらにお見合いに來ただけであって、もともとはこの話には乗り気ではなかったんですよね？」

「え！？」

春人がさらに狼狽した。

返答に窮したように、とても困った様子をして激しく動揺している。

何だか、春人がとても怪しく感じた。

「もしかして、何か訳があるんですか？

そもそもおかしいと思っただけです…。五月家は一上家うへとは仲が悪いじゃないですか。

本当は申し込んだ時点で、すぐに断られるかと思っただけです。」

「いえ、その、違うんです！」

春人は慌てて否定してきた。

しかし、その後には弁解が続かず、佳子の中の疑惑が無くならず、却って深まってゆく。

「何が違うんですか？」

佳子は誤魔化されないように追及する。

春人を窺い見ると、彼は縋る様な目つきで佳子を見つめ返した。

その瞳は潤んでいて、泣きそうにも見える。

これ以上、何も訊かないで欲しい。そう、春人の目は語っていた。精神的に窮地に立たされているせいか、彼の顔色は少し頬が赤く染まっていた。

しかし、佳子は何も言わないまま、春人から目を離さなかった。

春人が何か答えるまで、無言で見つめ合う状況は続いた。

やがて、それに耐えきれなくなったのか、春人から目を逸らした。

「あの、その、本当はもっと後で言おうと思っただけです…」

しどろもどろになって、春人は話し始めた。

彼から込み入った事情を聞くべく、佳子は姿勢を正して真剣な面持ちをした。

すると、春人が膝を畳の上で擦らせながら、佳子の近くまで移動してきた。

佳子がお互いの距離が不自然に近いと驚いたところ、春人は急に佳子の右手を掴んで握りしめる。

突然の行動に戸惑い、春人の表情を探る。

「佳子さん…。」

彼は思わず息を飲むほど、真っ赤な顔をしていた。

一体、彼はどうしてしまったのかと、佳子は声を失った。

佳子の手を握っている彼の手は、僅かながら震えている気がした。

「あの、私は…、その…。」

これほど説明に躊躇っている春人を見て、深刻な事情を彼は抱えているに違いないと確信した。

佳子は出来ることなら、彼の力になってあげようと思った。

それが色々と手を尽くしてくれる彼への恩返しになるだろう。

佳子は春人を安心させるために、空いている左手を自分の手を握っている彼の手の上に添えた。

「私は春人さんの味方ですよ。何かお困りなら、私もご協力いたしますので、安心してください。」

春人を落ち着かせようと気を遣った台詞を言った途端、春人が感極まった顔をしたと思ったら、急に抱きついてきた。

春人の両腕が固く佳子の背中へと回されて、佳子は身動きが取れなくなった。

「あのっ…!」

驚愕のあまりに声を上げるが、頭がこの展開についていけない。

「佳子さん、好きです。」

密着する身体から聞こえた春人の台詞が耳に入る。その言葉が神経によって脳内に伝わり、それから単語を理解するのに数秒はかかった。

「えええええ！？」と佳子が絶叫して、反射的に春人から離れようとしても、彼は決して腕の力を緩めてはくれなかった。

春人が言う“スキ”とは、恋愛感情の好きのことだろう。

いくら何でもそれくらいのは理解できたが、一体どんな理由で現在春人が愛の告白にまで至ることになったのか、佳子はまだ把握していなかった。

それに、春人が自分に対してそんな感情を持っているなどと、予想もしていなかった。

「私と付き合ってください。」

佳子はさらに悲鳴を上げようとしたが、何かによって口が塞がれてしまい、それは不可能だった。

春人の。 7 (後書き)

色々追い詰めちゃいけませんよね…。

窮鼠(春人)、猫(佳子)を噛んで(?)ます。

あと、ユニークアクセスが1万件を超えました。

いつも読んでくださってありがとうございます(拝)。

春人の。 8 (前書き)

お待たせしました。  
更新遅くなっています。



春人の唇が自分のものへと重なっている。

驚愕のあまりに身体が硬直して、固まってしまった。

一体、これはどうしたことだ。

目の前には春人の顔が迫って、密着ではなく、口付けをしている。

柔らかい彼の唇が静かに離れていっても、佳子は言葉を失って、呆然としていた。

「佳子さん、好きです。」

春人はもう一度、告白してきた。

彼の潤んだ目は佳子だけを一心に見つめている。

その情熱を孕んだ瞳に、佳子は捕らわれて身動きが取れなくなった。

「すごく好きです。」

そう言つて、佳子は再び春人の胸の中へと抱きしめられる。

彼による突然の濃厚な接触到に仰天して、混乱状態となり声が出なくなっていた。

そんな状態で、温かい彼の体温に包まれる。

春人の身体は自分を守ってくれるかのように大きく包んでくれて、

その居心地の良さに生理的な嫌悪は全くなかった。

春人に触られるのは嫌ではない。先程も玄関で抱きしめられた時も、安心して身を任せてしまった。

今も抵抗もせずにこの状況を受け入れてしまっている。

情愛が込められた彼の台詞は、佳子の心に真つ直ぐに届いて響いていた。

佳子の頭は、もはや春人のことで一杯だった。出会って間もないのに、いつの間にか佳子の心の隅に春人が入り込んでいたようだった。

佳子の心臓は勝手に激しく鼓動している。

口から出そうなくらいだった。

この展開に驚きながらも、胸をときめかせている自分を、佳子は認めざる得なかった。

しかし、その一方で新たな葛藤が生まれる。

佳子は彼の気持ちを受け入れられない理由があった。

一上家は罪を犯している。

それは、自分にとっても無関係なことではない。

そんな立場の自分が彼の求愛を受ける訳にはいかないのだ。

佳子は思い切って、両腕で突き飛ばすように春人の身体を押しやっ  
て離れると、立ち上がって後ずさりして彼から逃げ出した。

「ごめんなさい、私は貴方とお付き合いはできません。」

佳子は潔く頭を下げた。

「どうしてですか!？」

春人が佳子を仰ぎ見る。その表情には悲痛なものが浮かんでいた。

「どうしてもです。ごめんなさい。」

佳子は春人の顔を直視することが出来ずに、視線を逸らした。

春人は自分のことが好きだったから、破談になりそうで落ち込んでいたのだと、この状況になってようやく気付いた。それなのに、彼の胸中を全く推し量れなかった佳子は、馬鹿みたいに追及してしまつて、地雷を踏んでしまったのだ。後になつては言い訳に過ぎないが、春人が自分のことを好きだとは思ひも寄らなかつた。

先程玄関で口付けしそうな雰囲気だったのは、佳子だけの勘違いではなくて、彼自身もそれを望んでいたに違いない。

「相手は分家の人間でなければ誰でもよいとおっしゃっていましたよね？」

私では駄目でしょうか…？」

春人から暗く弱弱しい声が聞こえてくる。その様子だけでも、彼が傷ついていることが分かる。罪悪感が佳子を襲つた。

「ごめんなさい。それは結婚相手ではなくて、お見合いの相手のことです。」

母があまりにも高志さんとの縁談を勧めるので、反抗心から別の相手とお見合いをしただけなんです。

結婚相手が誰でもよいなんて考えてはいません。」

佳子の話が終わると、重い沈黙が場を支配した。春人にもう一度視線を送ると、彼は俯いていたため、黒い頭上しか見えなかつた。

「本当にごめんなさい。春人さんの気持ちは嬉しいのですが、お付き合ひはできません。」

あと、私の食事の用意はもう結構ですよ。ここにいらっしやるのは今後気まずいでしょうから。」

振られた相手の家に来るのは拷問に等しいだろうと考えて、お断りを申し出た途端、春人は慌てて頭を上げた。

「嫌です。私にチャンスを下さい！」

「チャンスですか？」

「そうです。今は私のことを佳子さんは何とも思っていないかもしれませんが、これからの私を見てもう一度考えて欲しいのです。」

「でも…。」

考えるも何も、春人の人柄に惹かれるところがなくて断っているわけではない。

自分の事情で誰とも深く付き合う気がないだけだ。

しかし、その理由を言うわけにはいけないので、どう言えば彼が納得してくれるのか考え悩んだ。

その隙に春人が音もなく立ち上がっていて、気がつくや佳子の目の前にいた。

驚いて後ろに下がろうとしたら、それより前に春人の腕の中に囚われていた。

「佳子さん…。」

「…、困ります…。」

春人の身体に手をかけて離れようとするが、彼は佳子を逃す気がないらしく、頑丈な腕が固く背中に回されていて、行動不可能だった。ふと視線をずらすと、先程の妖怪たちが物影からこちらの様子を窺っていて、挙動不審な様子だった。

妖怪たちあいつに、春人への手出しを止めるように言い付けていたので、それを厳守しているのだろう。

春人とのキスシーンを見られてしまった恥ずかしさと自分の迂闊さに、佳子の胸中は複雑だった。

「ここまで誰かに惹かれたのは初めてなんです。それなのに、断られて一瞬で終わるのは、…辛いです。」

「そ、そんなこと言われても…。本当に困ります。」

春人さんにそこまで好かれる程、自分が魅力的な人物だと思いませんし…。」

「そんなことないですよ！」

佳子さんは素敵です…。それに何と云うか、不思議な雰囲気をお持ちですよね。

視界に入ると、何故か目が離せなくて、激しく心が掻き乱されるんです。

気がついたら、手を伸ばして触れなくなつて…。」

「何度危なくなつて視線を無理矢理逸らしたことが。」と春人は続けながら、佳子の頬を両手で包み込む。

そして、強引に上向きにされて、春人の顔と向き合う破目になった。佳子は緊張を再び強いられる。

感情に囚われた彼の目は、危険な色を帯びていた。

同じ目をどこかで見たことがある、と考えに注意が向いてしまっ

た時には、勝手にもう一度唇を重ねられていた。  
触れるだけの軽やかな口付けは、佳子を再びパニックにさせた。

「は、春人さん！ 本当に困ります！！」

顔を真っ赤にしながら抗議するが、春人は開き直ったような態度で聞き流す。

「キス以上のことはしませんから、とりあえず友達からお付き合いください。」

「友達でも普通はキスしませんよね！」

佳子の突っ込みは、返答がなくて虚しく流された。

佳子がかもう一度抵抗して春人から逃れようとする、今度は素直に解放してくれた。

「毎週、佳子さんに会いに来ますから。」

春人を横眼でちらりと見ると、彼は真剣な目をしていた。

覚悟を決めたその瞳は、まるで佳子を逃さないばかりに、獲物を狙う獣のようだった。

野生の本能的に佳子は身の危険を感じて、息を思わず飲み込んでしまった。

そういえば。

先週偽装の婚約を成立させた時に、不安に思った彼の目つきと、今日の春人の同じだったことに、佳子はようやく気付いた。

まさか、あの時から春人は自分のことを。

佳子は真つ直ぐに自分を見つめる春人に、ただ圧倒されて言葉を失った。

その後、佳子と春人は微妙な雰囲気になり、気まずい沈黙が二人の間を占めていたが、それは隣の離れに住む坂井の嫁の美智子によって破れた。

敷地内に停めてあつた春人の車に気付いた美智子が、佳子の家に顔を出してきたのだ。

美智子は春人の姿を発見するや否や、好奇心いっぱい目を輝かせながら、彼に色々と話しかけてきた。

佳子は美智子の夫の正には、本当のことを打ち明けていたが、美智子には何も話していなかった。

正も美智子には何も説明してないらしい。

春人に佳子が一目惚れをして、お見合いを申し込んで相思相愛になり、婚約までしたと美智子は信じていて、それを前提として会話をしていた。

誰にも内緒で突然行方を暗まして家出していた期間、正は務めていた大学の助手の仕事を休職してまで、佳子の捜索に奔走してくれたらしい。

そこまで尽してくれた正に隠し事ができるほど、佳子是不誠実ではなかったため、彼には佳子が知り得た父のことを話した。

正は父から何も聞かされていなかったらしく、正はその事実には驚愕すると同時に痛嘆していた。

長年仕えている正にまで黙っていたのは、父の優しさだったのだらう。

美智子は春人に根掘り葉掘り尋ねていて、それで初めて知ったのだが、春人は里にある役場に内定が決まっています。来春から採用予定らしい。

結婚したら仕事はどうするの、と美智子が尋ねる。

まだ結婚の時期が決まっていないので、このまま勤めますと春人は答えていたが、このまま佳子との婚約を続けていたら、いずれ結婚のために仕事を辞める人間だと見なされて、仕事をしていく上で彼にとって不都合なことが出てくるだろう。

そう考えると、彼が就職するまでにはこの偽りの関係を終わらせた方が良く、気に留める。

何の道、父の3回忌である来年の2月末までには、決着をつけようこのみちと考えていたので、問題はなかった。

春人は夕方には帰っていった。

また来ます、と言葉と熱い眼差しを残して。

まさか、自分を誰かに好きになってももらえるなんて思ってもみなかった。

まだ彼に愛されているという実感が持てなく、彼の言葉に疑いを感じてしまう。

出会う間もないはずなのに、一体彼は自分の何を見て惹かれたのだろうか。

佳子はそっと自分の唇に触れる。

自分のここに、他人のそれが初めて重なったのだ。



一人きりになり、冷静になって春人のことを考え始めた。好感を持っている異性との接触は、嫌ではなかった。

春人のことは嫌いではない。

好きか嫌いかのどちらと問われれば、好きだと答える。

しなしながら、亡き父より大事な存在ではない。

仇を討つためには、恋にうつつを抜かすべきではないと、理性が警告を鳴らす。

ただ、あの抱きしめられた時の温もりは、何物にも代えがたい心地よさがあり、春人を拒絶してしまえば、もう二度とあの腕の中にいられないのだと思うと、胸に今まで感じたことがなかった痛みがあった。

父を亡くしてから、あれ以上の悲しみはないと思っていたのに、どうしてこんな気持ちを抱いているのか、佳子はこれ以上その理由を考えたくなかった。

春人の。 8 (後書き)

やっと彼が帰ったので、「春人の。」の話は終わります。

ちなみに、この話の正式なタイトルは「春人の告白」でした( < > )。

春人の独白 1 (前書き)

春人視点です。

## 春人の独白 1

春人が自宅に戻ると、居間には義父の寿治郎とじじゅうが一人でいて、テレビを見ていた。

中肉中背の体格は昔とさほど変わらないが、出会った時には灰色だった短い頭は、いつの間にか白髪になっていた。

現役を退いて隠居して、もうすぐ古希を迎える身体は確実に老いてきていても、いつも鬢かくしやく鑠やくとしていた。

「ただいま戻りました。」と挨拶をすると、義父は春人に気付いて、視線を送る。

その顔は、義兄の慶三郎と面影が似ていた。

「春人お帰り。夕飯はどうした？」

「まだですが、適当に済ませますので大丈夫です。」

春人が台所へ行つて、残り物などで簡単に夕飯を用意している最中に、普段は台所に近づかない義父が珍しく近くにやってきた。

「内偵の方の調子はどうだ？」

「はい、相手にまだ疑がわれていないので、順調に捜査しています。」

「そうか。ところで、一上の当主はどんな方なんだ？」

「はい、とても優しくて思いやりのある方ですよ。」

分家の人間のように他人を卑下したり、見下したりしないんです。本当は怖いのに、母親や分家にも勇気を振り絞って立ち向かって

いて…。

義兄のいう、よくない噂は分家のみだけで、本家には何も関係ないと私は思います。

彼女が分家と縁が切れたら…。」

「こら。」

義父の諫める声に春人は語るのをすぐに止めた。

「一上家の人間を信用するな。」

善人面をしていても、あの一族の根っこは性悪なんだ。

同情を買おうと弱い女を演じていても、真に受けられないようにな。

それに先入観があつては、調査をする者の目が曇るんだぞ。あまりにもお前が彼女に肩入れするようならば、今回の件はうち切りにする。」

「申し訳ございません。以後、気をつけます。」

春人は色々と言いたい言葉を飲み込んで、素直に謝罪した。

義父の機嫌を損ねて、今回の密偵の仕事が中断させられたら、佳子と会う本当の口実が無くなってしまふ。

義兄が跡を継いでいるとはいえ、義父の影響は未だ大きい。

「標的に感情移入するな。それを守るのが鉄則だぞ。」

「はい、肝に銘じます。」

感情を殺して平静を装って、春人は恭順の意を表した。

義父はそれを見て納得すると、また居間へと戻っていった。

誰の耳にも届かないように、こっそりと嘆息する。

義兄から一上家のお見合いと同時に内偵の話が降ってきた時は、またとない僥倖だと思い、自分が抱いている感情を五月家の誰にも悟られずに引き受けたが、春人はそれが正しい選択だったのか、今更ながら悩むようになった。

春人は依頼を受ける前から佳子のことは知っていた。

初めて見たのは、中学一年の時。

毎年夏のお盆時期に、山神様への貢物として、妖怪たちが人間の住処から食べる物を盗んで行く恒例行事があった。

目につくところに置いてあるお菓子などを盗って行くので、里の間は知恵を働かせて、あらかじめ勝手口の付近に来訪者に分かりやすいように、お菓子を置いておくようになっていた。

しかし、母が急病で倒れてそれどころではなかった五月家。

母の代わりに、春人が家事を必死にこなしていた。

日を追うごとに義母は目に見えてやつれてゆき、寿命が刻々と減って行くのを感じていた。

義母の好物のお菓子を亡くなる前にせめて食べてもらおうと、わざわざ遠くの菓子屋から取り寄せて、家に置いておいたのだ。

春人が家にいる時に、不審な物音がするのに気付いて、春人は自室から出た。

何事かと思つて見回りをすると、慌ててそのお菓子の箱を持って逃げる妖怪がいて、それによって春人は山神様のことを思い出した。今年に限って、お菓子を勝手口に置いておくのを、すっかり忘れていたのに気付いたのだ。

持つて行かれたと認識した途端、春人はその妖怪を慌てて追いかけた。

妖怪は玄関を出たばかりで、まだどこかの物影に姿を隠していなか

つたのが幸いして、逃げる妖怪をひたすら追跡しつづけた。しかし、里にある大見山の奥深くへ足を踏み入れたはいいものの、山の中は視界を遮るものが多く、途中で妖怪を見失ってしまう。自分の過失のせいで、お菓子を盗られたと思っていた春人は、責任を感じてひたすら山の中で捜索を続けた。

一体、どのくらい時間が経ったのか分からなかった。辺りは暗くなり、月明かりだけが照らす中、ついに春人は妖怪たちが集まっている場所を見つけた。

そして、普通の人の足では到底辿り着けないような場所で、ついに山神様を恐らく里で初めて春人は目撃した。

和服姿の一人の若い女性。女性と言っても、春人より少し年上のまだ学生とも言える年頃だった。

彼女を見た途端、心臓が鷲掴みにされるような、激しい衝撃が春人を襲った。

初めて体験するこの感覚は何なのか、春人は全く分からなかった。彼女から目が離せず、一心に物陰から見つめ続けた。

妖怪たちは山神様を囲んで、何やら楽しそうに騒いでいる。

山神様は倒木に腰を掛けて、妖怪たちと黒と白の石を使ったりバースンをしていた。

その脇には、妖怪たちが集めた食べ物が山盛りになっていた。

ある者はそれを観戦し、ある者は踊り、ある者は歌い、まるで宴会のようだった。

どうやら、勝負がついたらしく、山神様が嬉しそうに喜んでるところを見ると、彼女が勝つたのだろう。

一方で、妖怪たちは悔しそうに地団駄を踏んでいた。

山神様は食べ物の山へ手を伸ばして、品定めを始めた。

風呂敷を広げて、食べ物を検分しながらその中へと置いている。

その食べ物の山の中に、五月家から盗まれたお菓子の箱があるのに、春人は気付いた。

山神様はその箱を手に取ると、妖怪たちに何か話しかけた。すると、一匹の妖怪が彼女に近づく。

それは、五月家から盗みを働いた妖怪だった。

彼女は何か妖怪に話しかけると、お菓子の箱を妖怪へと渡した。

何故、あのお菓子は選ばれずに返されたのか。

春人はまるで自分自身が否定されたように感じて、酷く傷ついた。

山神様は全部のお菓子は取らずに、山の一部だけ風呂敷の中へと入れると、妖怪たちへとお菓子を指差しながら、声を掛けた。

すると、一斉に妖怪たちは残りのお菓子の山へと群がって、それらを貪り始めた。

妖怪たちが浮かれて騒ぐのを、ショックで呆然としていた春人は見守り続けた。

やがて、ある程度時間が経過すると、山神様は眠たくなったのか、口元を押さえて欠伸を連発するようになった。

山神様は不思議な力で手元から空を飛ぶ龍を呼び出した。

あの時は、一上家の人間だと知らなかったから、山神様の生き物を生み出した神業に息を飲んで驚いた。

そして、山神様は風呂敷包みを片手に、その龍の頭に乗ると、龍は空高く舞い上がり、彼女をどこかへと連れ帰ってしまった。

気がつくくと、妖怪たちはそこからいなくなっており、解散していた。春人は当初のお菓子を取り戻すという目的を完全に失念していた。

お菓子を持った妖怪も見失ってしまうし、結局取り戻すことが出来ないまま、家へと帰った。



家に帰ったら帰ったで、何も言わないままいなくなった春人を、心配していた義父に開口一番怒鳴られた。

盗られたお菓子をとり戻したかったと、事情を話して謝ったら、義父はすぐに態度を軟化してくれた。

山神様に盗られたなら仕方がないと、母さんなら笑って許してくれるはずだぞ と、義父は言っただけで、もうこんなに心配かけるんじゃないと、春人を叱りつけるだけでお仕置きは済んだ。

次の日、春人が目を覚ますと、驚いたことにお菓子が家へと戻っていた。

一体、彼女は妖怪に何と言ったのか。  
春人はとても気になった。

それから毎年、家族に外出の断りをきちんとしてから、こっそり山神様を見に行くようになった。

山神様に会うと、胸が激しく鼓動して、周りにいる妖怪のように浮かれた気分になる。

中学三年の夏に、見ているだけでは物足りなくなつて、山神様の近くへ行って、妖怪たちのお近づきになりたくなつた。

しかし、山神様にどのような反応をされるのか怖くなつて、結局いつも通りに眺めているだけだった。

ところが次の年には、お菓子を盗まれないどころか、山神様も現れなかった。さらに、その次の年も。

山神様に会えなくなつて、一体彼女に何があつたのか思い巡らすだけで、原因不明の胸の痛みや精神的な苛つきや苦しみ、焦燥感などに悩まされるようになった。

山村様のことは伏せて、友人の山村に自分の症状を説明して相談したところ、彼は戸惑いながら“まるでその人のことが好きみたいだ

ね。”と言われた。

その時に、初めて恋愛感情というものを意識した。

今年の里の夏祭りの奉納試合へ、義兄によって無理矢理参加させられたが、偶然にも観客席にいた山神様を発見した。

春人は興奮する気持ちを抑えて、自分の傍にいた義兄にあれは誰かと尋ねた。

その時に、新しい一上家の当主であり、佳子という名前を教えられて初めて知った。

もしかして、彼女は人外の実在ではないかと、思っていたところがあつたので、義兄から得られた情報に歓喜した。

しかし、それも一瞬で終わる。

彼女の一族が親族婚を繰り返すのが仕来りとなっており、そのうち分家の人間と結婚するのではないかということを知られたからだ。

あの時の絶望にも似た衝撃は、今でも忘れられない。

放心状態となつてしまい、その心の隙のせいで敵の罠にはまり、納屋へと閉じ込められてしまった。

運良く助けられたものの、春人の心境は荒れ狂っていた。

その仕業が、決勝戦の相手である一上高志の身内であることは状況から明白だった上に、彼が佳子の婿候補の一人であることは想像に難くない。

その男を見ていると、深い恨みを抱かずにはいられず、自分が彼に何をしてかしてしまうか分からない、不安定な興奮状態に陥っていた。

それでも問題を起こしたくなかつた春人は、一瞬で彼を場外に押し

出して、試合事体を終了させると、彼の前から早々に姿を消した。

夏休みだったから良かったものの、しばらく何もする気になれなくて、無気力な日々を過ごしていた。

春人の独白 1 (後書き)

長くなったので、途中で分けました。  
次回で「春人の独白」は終わりです。

## 春人の独白 2

ところが9月の中旬頃に、二木家の喜美子が仲介人になって、佳子とお見合いの話が舞い込んできたのだ。

義兄はすぐに断るつもりだったらしいが、一上家の内情を探るために都合が良かったため、保留にしたようだった。

お見合いの話を受けるのは、最終的には春人次第だと、義兄に言われた。

あの時に、了承以外の選択があっただろうか。

彼女と会える機会を得られる為ならば、多少の難儀は覚悟の上だった。

それでも彼女を密かに探るのは、正直嫌だったが、背に腹は代えられなかった。

一族の慣例を蹴ってまで、自分とお見合いをしようとしてくれるなんて。

煩わしく思っていた顔が役に立って、この時ばかりは都合よく喜んだ。

どうでもいい人に自分の顔のせいで近寄られるのは、堪らなく嫌だったが、彼女に同じことをされても、どういう訳か不快に思わなかったのは不思議だった。

義兄の言う通りに彼女自身も悪事に手を染めていたらどうしようかと不安に思うところがない訳でもなかった。

それでも、山神様と妖怪たちに慕われる彼女が、そんな訳無いと信じながら会いに行った。

お見合い会場にいた佳子と出会った時の感動は一人ひとりだった。

彼女と目があつた時、興奮のあまりに感情が爆発しそうになって、反射的に目を逸らしてしまった。

失礼な態度を取ってしまったと、内心慌ててしまう。

必死に動揺を抑えて、何とか挨拶だけ返すので精いっぱいだった。

ところが、お見合い当日には開始直後に佳子が連れ去られ、次に折角会つても彼女の機嫌を損ねた上に、風邪を悪化させてしまうやら、不手際の連続で目も当てられない程だった。

妖怪に好かれる彼女を問題の現場に連れて行ったら、どのような事が起こるのか、冬の海辺に興味本位で連れて行ったのが敗因だった。さらに最大の誤算が、彼女が自分に全く恋愛感情を持っていないことだった。

「だから、私に対して同情や哀れみは無用ですよ？」と言い切った彼女。

春人から今回のお見合いについてお断りしてくれと、それとなく匂わせていた。

このままではお見合いが終わり、彼女との縁も終わってしまう。

彼女に会えなくなるのは、耐えられなかった。

彼女との関係をかろうじて繋ぎとめようと、偽装の婚約を持ちかけたのは、自分でもよく咄嗟に閃いたと思う。

しかし、それと同時に内偵を続けることとなってしまった。

下がってしまった好感度を上げようと努力する一方、彼女に探りを入れなければならぬ卑劣さ。

家族と彼女の両方に対する後ろ暗さが、常に付き纏う。

それにしても、今日の告白はするべきではなかったと後悔した。

佳子と上手く関係を築き始めていたのに、全て台無しになってしまった。

あの時の自分の醜態のせいで、佳子に疑惑を持たれて追及されてし

まい、早々に自分の気持ちを告白してしまう破目になるとは思いも寄らなかつた。

言葉ではお互いに気持ちを確認していなかったが、彼女の為に誠心誠意尽してきたお陰か、彼女は自分に以前より好感を抱いている気がしていた。

結局は、片思いの自分の勘違いだったけれども。

玄関で動揺のあまりに震えている彼女を見て、幼い頃に実母によって苦しめられた過去の自分と姿が重なった。

庇護欲が掻き立てられて思わず抱きしめてしまった時、彼女は自分を拒絶せずに受け入れてくれた。

あの時の自分の行為に、やましい気持など全くなかつた。

ところが、泣きやんでも腕の中に居続ける彼女。

時間が経つごとに、自分の想い人と密着している状況を意識してしまい、思わず興奮してしまったのは不可抗力だった。

彼女が甘えるように自分の胸に顔を寄せて来た時に、もしかして彼女も自分のことを憎からず思ってくれているのでは、と期待に胸が膨らんでしまった。

期待が錯覚かどうか確認するために、佳子を見つめたところ、彼女も自分を意味あり気な潤んだ目で見つめてくれていた。

その瞳に吸い込まれそうになり、顔が自然に近づいていっても、彼女は逃げもせずに、無言で待ってくれる。

あの瞬間の時間が止まってくれればと、今でも祈ってしまう位、幸せなものだった。

あと少しで唇同士が重なりそうだったのに、思わぬ邪魔が入って、気持ちを確認するまでには至らなかつたが。

それでも、二人の気持ちは同じものだと思わずにはいられない雰囲気だったのだ。

告白を躊躇う自分に対して、彼女は優しさを込めて“味方”だと言ってくれた。

その言葉が自分を後押ししてくれた。

彼女が味方になってくれるなら、義父や義兄に頭を下げてでも、彼女との関係を認めてもらおうと、決意したのだ。

湧き上がる期待を胸に告白したのに、返ってきた答えは拒絶だった。

頭が真っ白になった。

すぐには理解できなかった。

しかし、彼女が頭を下げて、謝罪を口にした時に、ようやく状況を理解した。

自分が振られている。

その事実を「はい、そうですね。」と素直に受け止められるほど、簡単な惚れ方を彼女にはしていなかった。

諦めきれなくて見苦しい程、彼女に取り縋って、無理矢理チャンスを買った。

今のまともな自分があるのは、この養家のおかげだと思っている。

一度は底辺に堕ちた自分を拾い上げて、温かい感情を教えてくれた。それでも自分の心はいつも沈んでいて、水の底から水面に浮かぶ歪んだ陽を覗くように自分以外を見ていて、他人が自分の領域に入り込むのを嫌厭して拒んできた。

異能の為に親に捨てられて、異能のおかげで拾われた自分は、この里に来てからは自分の能力を磨くことに意を注いだ。

自分を家族として迎え入れたことで、養家に迷惑を掛けないように、自分の振る舞いには細心の注意を払い、評判には注意した。

学校にも通わせてくれたので、真面目に通って学業もそれなりの成



績を修めた。

他人に不必要に干渉されなければ、普通の生活を送れるだけで、満足していた。

それが一変したのは、佳子に出会ってからだった。

初めて、人に激しく興味を抱いた。

人外のものたちに囲まれた彼女。

あのように妖怪や自分を魅了するのは、一体どんな仕業なのか。

物影からでも、自分は憧憬の眼差しを送らずにはいられなかった。

そのうち、泥沼のような心底しんていから這い上がって、その手に触れたいと願った。

何故、ここまで彼女に惹かれるのか分からない。

ただ、彼女に会えなくなつて分かったことは、自分の容姿を嫌悪して、それに群がる連中を遠ざけてきた自分が、皮肉なことに彼女に一目惚れをしたということだった。

警戒心のない佳子が、噂通り恐ろしいことをしているとさえ思えない。彼女は心の痛みや弱さを知っている、とても優しい人だ。

彼女の人柄を知れば知るほど、分家の愚行が不愉快で仕方がなかった。

あの家のせいで、彼女の評価までもが五月家では貶められている。本家では疚しいことをしているように見えなかった。

大雑把で裏表のない佳子は、部屋を勝手に触つても、全く気にしてなかった。

しかし、彼女の肩を持てば持つ程、この家では自分が彼女に騙されていると思われて、自分が彼女と接するのを遠ざけられてしまう恐れがある。

彼女に対する偏見を正す機会は、ほとんど無かった。

家族には佳子自身に興味がない振りをして、任務に専念しているように見せなければならぬ。

彼女に対して罪悪感を抱きながらも、義兄の指示通り情報収集を行わなければ、何も成果がないと思われる、捜査が中止になってしまう。

後ろめたい気持ちを抱えずに、佳子へ会いに行くことができれば、どんなに良かっただろうか。

あの時、内偵の話を蹴って、彼女への恋心を義兄に白状していれば、今頃はこんな思いをせずに済んだのだろうか。

お世話になった養家に自分に対して悪い感情を持たれたくない。

一度捨てられた自分は、この五月家から見捨てられることを、心のどこかで恐れていた。

今まで“いい子”を意図して演じてきた自分の弱さが、養家に逆らうことになっても、佳子への気持ちを正直に告げられなかった原因だった。

自分の内面と向き合おうとした矢先に、彼女に振られてしまった。

佳子の心を得たい。

親交を深めて自分に対する好感度を上げるために、まだ彼女の元へと通い続けたかった。

そのため、周りを欺き続ける必要が出てしまった。

雲行きが怪しい自分の初恋は、どんなに見苦しくても諦められなかった。

自分は恋焦がれていた。

妖怪たちの神様に。

昔から佳子のが好きだったと、告白できたら少しは彼女の心を自分に惹きつけるができただろうか。

しかし、お見合いを受けるずっと前から彼女に好意を持っていた事が知られたら、都合が悪かった。

彼女と相思相愛になった後に、彼女との仲を家族に説得する時に、何故交際に反対する家族が、そもそもお見合いを受けることに了承したのが、問題となってくる。

内偵の件が彼女に漏れたら、信頼にひびが入って、せっかく築きあげた関係が終わってしまう恐れがある。

そのため、自分はその事実を隠した。

自分はずいぶん腹黒い人間になったものだと、春人は自分の悪辣さを賤しく思わずにはいられなかった。

それでも、春人はふと思う時がある。

考えたくもないが、もしも佳子がクロだったら、自分はどうしたらよいのかと。

海岸で佳子は、媒体がないと具現化は難しいと言っていたが、山神様だと思っただけで観察していた時に、彼女は手元に何もなかったところから龍を作り出していた。

嘘だと春人は見抜いていたが、誰にも黙っていた。

しかし、何故嘘をつく必要があったのか。

些細なことで猜疑心を抱くなんて、馬鹿らしいことだと思いつつも、不安に思わずにはいられなかった。

たとえ、彼女と相思相愛だったとしても、その場合だった時は、家族はその仲を決して認めないだろう。  
その時、自分はどちらをとれば良いのか。  
そんな最悪な岐路に立たされた時など、春人は想像もしたくもなかった。

期限（前書き）

慶三郎ターンです。

## 期限

慶三郎が1階へ降りると、春人が台所に置いてあるテーブルに向かつて座り、一人で何かを食べていた。いつもと比べて暗い様子が気になったが、今日は朝早くから出かけていたので、疲れているのだろうと察した。

「春人、お疲れ。」

「義兄さん、ただいま戻りました。」

春人は律儀に頭を下げて挨拶をする。

慶三郎はそれを受けながら、空いている向かい側の席に座った。正面にいる春人は、妻の夕輝が作った晩飯の残りを無言で胃袋へと片付けている。

今は8時頃だったから、途中で外食せずに帰って来たらしい。春人は手早く食事を終えると、流し場へと食器を持って行き、手早く洗い出した。

「疲れているところ悪いけど、報告してくれるかな？」

慶三郎がそう催促すると、春人は「はい。」と相変わらず素直に答えて、手は忙しなく動かしながら、本日の出来事を語りだした。

「へー、佳子の母親がやってきたんだ。しかも、都合のよい情報を残してくれてラッキーだったな。」

あっさりと真吾の正体が分かって、肩すかしを食らった気分だった。

彼が乗っていた車は、一上真吾本人の名義の物だった。

佳子と腹違いの兄妹だったとは。亡くなった一上家の先代もやるものである。

真吾の年齢的に結婚前の子供なので、浮気ではないだろうが、許嫁だった本妻としては、面白くない話だろう。

娘と先代を結婚させたかった分家の主が、他の女を妊娠させた先代の不始末を内密に片付けたに違いない。

しかし、真吾があまりにも先代に似ていたため、隠しきれずに事が露見したのだろう。

先代も悪いタイミングで亡くなったものだ。

せっかく我が子と親子の名乗りをあげようとしていたらしいのに、志半ばで逝ってしまうとは。

佳子の一族への反抗は、当主の座を揺るがしているようだ。

父の死を切っ掛けに、佳子が自分の意思を通そうとして分家に逆らうようになったらしいが、それによって地位も居場所も失くした後

のことを、あまり考えていないのが気になった。  
当主でありながら、その地位に拘っておらず、捨て鉢な挙動のように思われる。

頼れる親類もない中、経済的にもパートと内職という不安定なものだというのに、住むところを追い出されても構わないと言っているのは、世間知らず故か、それとも後ろ盾がいる強みか。

慶三郎は、如月と真吾との両名に会っていた佳子の行動を思い出す。そして、如月は経済界でも高い地位にいる鬼頭氏と繋がりとあると思われる人物だ。

後ろ盾としては、頼もしい存在だろう。

真吾と兄妹になれなくて残念と言っていた佳子は、彼の存在に肯定

的のようだ。

当主の座も彼に譲ればよいと考えているらしい。そして、真吾と直接会っていた事実は、彼との仲が不和ではないことを証明する。

彼女は真吾を当主に据えたいのだろうか。

彼女の一連の行動が、真吾を当主にするための工作だとしても、結婚を拒絶して偽装の婚約をしているだけで、いまいちやり方が生ぬるい。

死ぬ直前に真吾の存在を知った一上家の先代。

そして、最近真吾の存在を知った佳子。

この時間のずれが何を意味するのか。

佳子は一体どこから真吾の情報と、父が亡くなる前の行動を知り得たのだろうか。

亡くなってから随分経過しているのにも関わらず、父の遺品を探している佳子。

未だに目的のものは見つからないと云う。

途中から書き込みを始めた手帳。

父が亡くなってから今までの空白の期間、彼女は何をしていたのか。

彼女はどんな目的で何を企んでいる？

慶三郎は、結論を出すためにはまだ情報が足りないと感じた。

彼女の行動のほとんど全てに関係するのは、彼女の父である先代だ。一度、起源に戻って考え直すべきかもしれない。

「一上家の先代は、確か車の事故で亡くなったんだよな？」



確認のために尋ねると、春人は無言で首肯した。

「どんな事故内容だったのか、少し調べてみるか…。」

慶三郎は独り言を言いながら、手持無沙汰で顎を擦っていた。

その間に、洗い仕事を終えた春人が再び席についていた。

バラバラに得られる情報は、まるでパズルようだった。

埋められていく欠片は周囲を埋め尽くしていくが、未だに中央の絵柄が空白のまま、一体それが何なのかまるで掴めない。

鍵となる欠片は、一体何なのか。

慶三郎はまだそれが何なのか、想像もつかなかった。

「そういえば、今日里香ちゃん遊びに来ていたよ。」

来た時は何か落ち込んでいたけど、親父が相手していたと思っただけから機嫌良く帰って行ったよ。」

慶三郎が里香の話題を出すと、春人は苦虫を噛み潰したような顔をした。

義弟は興味のない他人に関わられるのを、心底嫌がる。

社会に出たら、そういう人間とも上手く付き合わなくてはならないため、今のうちに処世術を学ばなくてはならないだろう。

春人が里香に関心がなくとも、義弟自身で対処しなくてはならない問題だ。

慶三郎は全くその件について手助けをする気はなかった。

もしかしたら、瓢箪から駒のような展開が起こるかもしれない。

馬に蹴られたくないという理由もあった。

それにしても、今回の内偵に春人が携わってから、少し義弟が進歩したように感じる。

仕事とはいえ、丸一日同じ空間に女性と一緒にいても、春人が根を上げないとは。

目的があれば、気の持ちようも変わるのだろうか。

そういえば、親父があらぬ心配をしていたのには、内心笑ってしまった。

若い男女が二人きりで長い時間共に行動したら、どのように気持ちが変わるか分からないと。

佳子は春人に対してその気はなかったようだが、この整った顔の男が親切な様子で身近にいたら、彼女が自分に好意があるのかと勘違いを起こしてしまうかもしれない。

それに春人だって思春期の男だ。

彼女に対して標的以上の感情を持つ可能性が、義弟のことだから無いとは思うが、決してゼロではない。

そんな話を聞いていて、年頃の子供を持つ親と言うのは、あれこれ心配の種が増えるものなのだとしみじみ思った。

将来、娘の陽菜に変な男が近づいてきたらと思うと、親父の気持ちは分からなくもない。

小さい頃に手のかかった春人は、今では亡くなった母の代わりにテキパキと家事をこなして、家のために働いてくれる。

慶三郎の嫁の夕輝が五月家にやってきてからは、家事を分担するようになったが、春人は母の味を覚えているので、親父好みの料理を作り、春人の料理の時は嫁の夕輝の時よりも親父は美味しそうに食べる。

春人は血縁上では他人でも、家族として大事な存在だった。

そもそも、一上家の人間を毛嫌いしている親父は、佳子と春人が仲良くなるのをよく思っていないようだ。

さらに、親父が外出する度に、春人の婚約について周囲からあれこ

れ言われるのも、面白くないようだった。

そのため、この件について早く切り上げると口を出してきた。もともと春人の卒業までの予定だったが、年内には終わらせると言ってきたのだ。

「今回の仕事についてだけど、なるべく年内には終わりにしたい。状況次第では卒業まではと考えているけど、今のところ決定的な情報を得ていないから、その位が潮時だろ？」

「そう、なんですか？」

春人は戸惑った表情をしていた。

慶三郎の言葉をよく理解出来ていないようだった。

「事件がないまま憶測で調べている以上、だらだらと続けていいものでもないし、春人の就職にも影響が出るだろう？」

「しかし…。」

「彼女との結婚は婿入りが大前提だから、婚約していたら春人はいずれ里から出て行く人間だと見なされるんだよ。役場にこれから勤める立場としては、それはまずいだろう？」

「捜査が途中になっても、いいんですか？」

「せつかく、ここまで調べたんですから、最後までやり遂げたいです。」

春人のやる気を削ぐのは申し訳ないが、ここは折れるわけにはいかなかった。

「そうは言っても、春人が無理して続けるだけの理由にならない。彼女が何やら企んでいて、個人的には興味があるけど、それがあの分家を引きずり落とすほどのものとは思えない。」

慶三郎がさらに意思を伝えると、春人は何か言いかけたみたいだったが、最終的には諦めたようで口を噤んだ。

「まあ、あと少しの期間だけど頑張ってもらえるか？」

今は11月半ば。年内はあと一カ月半で終わる。それを思いながら慶三郎は春人へ言った。

春人は無言で小さく頷いた。

その時の義弟は無表情で、期限を早く設けたことについて、少し不満そうだったが、それ以降は特に何も食い下がって来なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4796w/>

---

そのお見合いは、危険です。

2011年12月23日01時50分発行